

拝啓

時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

東京電機大学高等学校創立四十周年記念事業に際しましては、皆様方の多大なる、ご支援を賜り誠にありますが、ご迷惑をいたしました。

さて、このたび四十周年記念事業の一環として作成してまいりました記念誌が、皆様のご助言とご協力を得て、このほどできあがりいたしましたので、お送りいたします。

この記念誌の発刊を機に、昨年来、一連の記念事業を通じて得られた教職員、同窓生、PTA、卒業生の結束をさらに固め、ますます母校が発展することを願って止みません。

敬具

昭和五十五年六月

東京電機大学高等学校創立40周年記念委員会

委員長 松下祐輔

# 回想

東京電機大学高等学校  
創立 40 周年

# 校歌

都心の天地は高く広く

輝き集り時代の文化

科学と技術の上に立ち

真理を仰げは富士に雲なく

勤労の道に希望あり



# 教育目標

正義を重んずる強い意志  
 真理を探究する高い知性  
 自発的な人間尊重の精神  
 心身のすこやかな成長  
 勤労をいとわず責任感の  
 強い誠実な人格

高橋 源八先生筆

## 校 歌

東京電機大学高等学校校歌

土 岐 善 磨 作詩  
 信 時 潔 作曲

(一)	(二)	(三)
都心の天地は高くひろく 輝き集る時代の文化 科学と技術の上に立ちて 真理を仰げば富士に雲なく 勤労の道に希望あり	創意の火花は深くさえて 平和のいとなみ昼夜絶えず 社会の進歩を共にうけて 静かにたどれば回路正しく 新たなる世界開けたり	歴史に栄ゆる電機学園 高校我等の負いゆく使命 親愛ひとしく競う意気に 相呼び相寄る自治のよろこび 協同の歩み力あり

東京電機工業学校校歌

文学博士 五十嵐 力 作詞  
 東京音楽学校教授 下総 皖一 作曲

(一)	(二)	(三)
日本の首府 大東京 工科の王座 大電気 名誉の二語を名において 吾等の学ぶ学びやを 東京電機工業と いうにあらずやこのよき名 学びやの名をあだにすな 学びやの名をあだにすな	千早振てう 神田の区 錦の町に盤踞して 電機の技を理論を 修め究めつ手を携りて 世界の進歩に先きがくる 学びや我れぞ懸命の 努力ささげてつとめよや 努力ささげてつとめよや	皇紀は二千六百年 新大東亜の建設に 国人こぞり奮う世に 生れあいたる吾等ぞや 至誠 勤労 独創の 三綱領にかがみつつ 御国のためにいざ進め 御国のためにいざ進め

東京電機第一工業学校校歌

(一)	(二)	(三)
日本の首府 大東京 工科の王座 大電気 名誉の二語を名において 吾等の学ぶ学びやを 東京電機第一工業と いうにあらずやこのよき名 学びやの名をあだにすな 学びやの名をあだにすな	千早振てう 千代田の区 錦の町に盤踞して 電機の技を理論を 修め究めつ手を携りて 世界の進歩に先きがくる 学びや我れぞ懸命の 努力ささげてつとめよや 努力ささげてつとめよや	皇紀は二千六百年 新大東亜の建設に 国人こぞり奮う世に 生れあいたる吾等ぞや 至誠 勤労 独創の 三綱領にかがみつつ 御国のためにいざ進め 御国のためにいざ進め

東京電機第二工業学校校歌 (案)

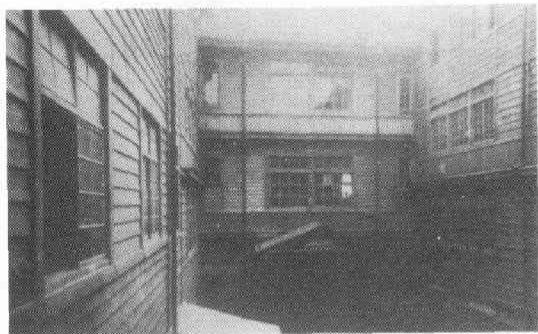
(一)	(二)	(三)
みやこのまなか錦のまちに 学びの園は白くそびゆる 第二工業その名も永久に たゝえん我等が母校の歴史 (折返) 電機学園第二工 電機学園第二工	朝な夕なに集ひし友は 画く図面に巧を寫し 廻る電機に真理を求め いざや究めん技術の業を	個性と自由を伸し育てつ 友愛信義を高むるこそは 我等の理想共に手を取り 栄えある庭に咲き出でむいざ

学 園 歌

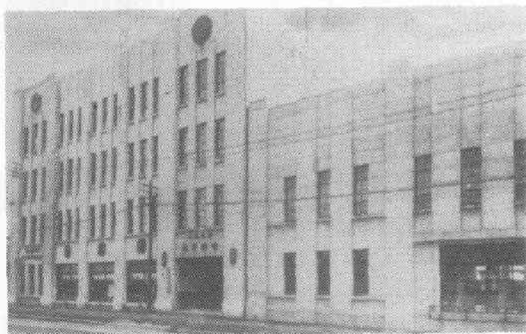
堀 内 敬 三 作詞・作曲

(一)	(二)	(三)
若き生命の 花萌えて 湧きづる力 限りなし 電光を駆り 雷を呼ぶ 未来へ進む この門出 われらは集う 電機学園	新たに国は よみがえり 飛躍の天地 いま開く 電波に結ぶ 西東 栄えの春を 築くべく われらは学ぶ 電機学園	大地の極み 雲のはて 幸をたずねて ゆくとても 誓は固き 幾万の 心の家と 永久に われらは護る 電機学園

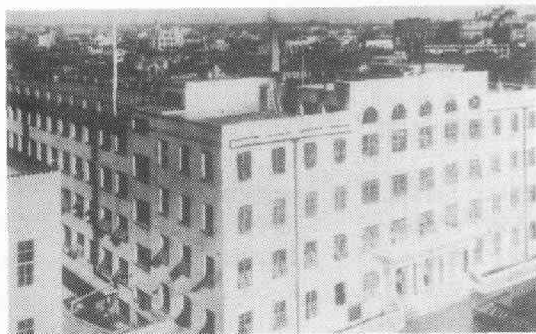
## 校舎のうつりかわり



← 大正3年9月神田錦町に完成した最初の校舎  
(木造3階建延221坪電機学校)

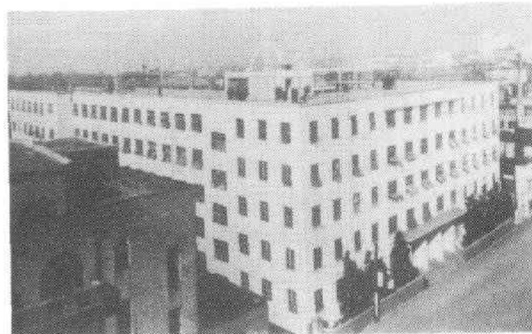


→ 昭和14年東京電機工業学校当時の校舎（現在は取りこわされて5号館となる）

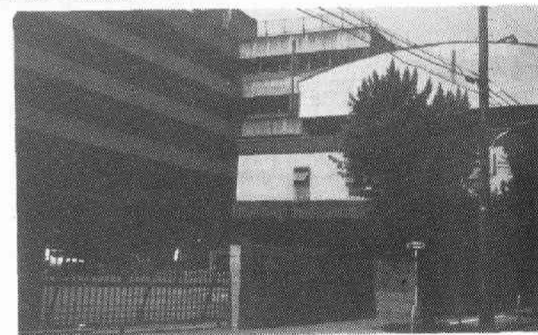


← 昭和23年電機第一、同第二工業学校が合体して電機学園高等学校となった当時の校舎

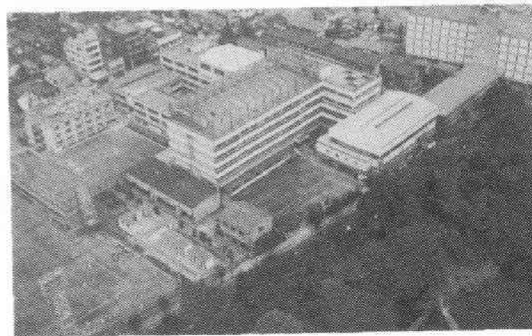
## で見る学校の歴史



← 昭和31年東京電機大学高等学校と改称当時の校舎



→ 昭和40年4月小石川新校舎で授業開始



← 昭和40年4月小石川後楽園上空より

## 記念誌の発刊にあたって

創立40周年記念委員会委員長

松下祐輔

事業準備会」の発足をみたわけです。

以来数回の会合を重ね原案を作成致しました。その大綱はPTAでは53年5月20日、同窓会では53年6月3日の総会で議題としてとりあげられ、53年度の事業の一つとして、準備会の原案通り記念事業を推進する旨を決議致しました。これに伴い準備会も「東京電機大学高等学校創立40周年記念委員会」に発展し、学校側との連携を密にしながら下記のような組織のもとで検討を重ねた結果、記念事業として「グラウンドの再舗装及び全天候形コートの建設」「記念植樹及び外構の整備」を、また祝賀行事として54年6月2日に記念講演・式典及びパーティを行う計画をたて募金基本額として寄付金額を1件あたり2,000円以上、お願いすること、総募金目標額を1,000万円とし募金期間を53年12月1日より54年8月31日とすることを決定し、広くPTA会員並びに同窓生の皆様に呼びかけたところ多くの方々のご理解とご協力を得まして、去る6月2日には、ホテル・グランドパレスにおいて、都議会議員の酒井先生を初め大学当局より連見理事長先生、阪本学長先生、その他多数の来賓の方々のご出席を賜わり、創立40周年式典を盛大に挙行することができ、かつご好評を得ました。またその他、当委員会の計画致しました、校庭の整備や植樹等の記念事業も当初の計画どおり実行することが出来たことは、このうえもないよろこびとする

私達の母校東京電機大学高等学校は、本年をもって輝やかなしい40周年の歴史を刻みました。昭和14年4月に東京電機工業学校として創立され第1回の入学生を迎えたのは、現在東京電機大学の5号館のある神田錦町の地にあった木造2階建ての校舎だったと伺っております。その後2回に亘る校舎の移転や、校名の変更など幾多の変せんを経まして現在に至る40年間に実に一万九千余名の卒業生を世に送り出しています。

同窓の諸兄は業界のパイオニアとして、また中堅として、それぞれの分野で活躍中であり、なお在校生千六百余名は将来日本を担う人材たるべく勉学にスポーツに努力を続けております。このように母校は、まさに40年代の壮年期を迎え名実共に歴史ある一流の高等学校として確固たる歩みをつづけておりますことは、ひとえに学校法人東京電機大学当局はもとより、教職員やご父兄のみなさん、そして同窓生の方々の並々ならぬご苦勞の賜物と深く感謝申し上げる次第です。こうした歴史ある母校の校風や伝統をさらに発揚させると共に在学生の勉学の励みになるような教育環境の整備等の事業を、創立40周年を一つの区切として行ってはどうかという声が、期せずして卒業生およびご父兄の方々の間より湧きあがり、早速学校側と協議のうえ昨年(53年)1月27日に、学校、PTA、および同窓会の三者からなる「高等学校創立40周年記念

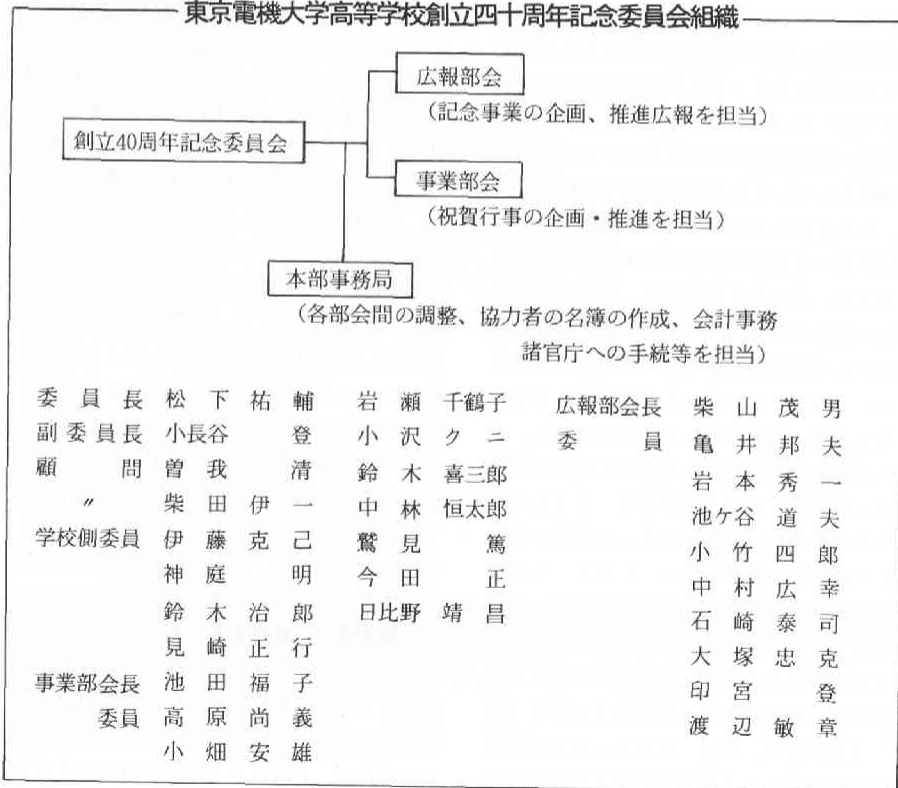
ところであります。記念事業委員会を代表致しまして厚くお礼申し上げます。

この一連の事業の成果は、教職員、PTA、同窓会のみなさんの新たな結束の力であり、ここに強力な団結の姿をみることができましたことは、我々学校関係者一同感銘新たなるところであります。学校の真価は、その建築物や設備だけにあるのではなく、そこから巣立つ人材が社会に有用でなければ学校の値打ちはないものです。幸い本高等学校は優秀な教職員と教育環境に恵れ、それにふさわしい人材を多数輩出してまいりましたことは、我々卒業生はもとより、在校生、ご父兄にとっても大きな誇りとするところであり、また我

々は学校が立派な学校として存在することを常に念願しております。

低迷する今日の世情では種々困難のあることが予想されますが、母校の発展と良き校風をもつ電高の伝統を固く守りつづけてゆくためには尚一層、教職員、PTA、同窓会の皆様が一体となって協力しあうことが大切です。またそのための協力をおしんではなりません。終りにあたり学校の発展のために献身的に貢献されてこられた、学校法人東京電機大学の理事長を初めとする教職員の方々及び関係各位のご努力とご功績に対して深く感謝申し上げます。

東京電機大学高等学校創立四十周年記念委員会組織



目次

教育目標・校歌	2
校舎のうつりかわりで見える学校の歴史	4
記念誌の発刊にあたって	7
創立40周年記念委員会委員長 松下 祐輔	
40年をふりかえって	11
東京電機大学高等学校校長 吉田 宇一	
年譜(学校・PTA・同窓会40年の歩み)	18
「講演会・式典・祝賀パーティ」	22
於ホテルグランドパレス (54・6・2)	
歴代の校長先生	37
歴代の先生	49
「随筆・思い出・歴史」	
・教職員	66
・PTA	86
・同窓会	96
吹奏楽部記念公演	110
於東條会館ホール (54・11・24)	
記念講演「北極点への旅」	111
於日比谷公会堂 (55・1・16)	
記念事業のあゆみ	114
[編集後記]	115

## 40年をふりかえって

東京電機大学高等学校校長

吉田宇一

### 《はじめに》

昭和54年は、私にとって誠に感銘深い年であった。というのは、学校と父母と同窓会で創立40周年をいかに意義あらしめるべきかを考え、それを実行し、それをなしとげた年だったからである。同時にまた、私の本校入学以来の40年が、そのまま高校創立40年と同一軌道上にあり、それが一層感慨無量なものにしているからである。

いま母校の長として、過ぎ去った40年を振り返ってみると、そこには平和な現在とは著しく異った変化に富んだ40年がまざまざと浮んでくる。

支那事変勃発間もなく入学し、途中から太平洋戦争に突入し、そして敗戦。終戦後の生活の混乱した時代、高度成長、石油ショック等を経て低い安定成長に落ち着くかと思えば、またもやイラン情勢等を含めた不安定状態という世の中の流れをみてきた私にとっては、世の移り変りの激しさとまどうばかりの有様である。

この度、学校教職員、父母の皆様、同窓会のご尽力によって創立40周年の記念式典、校庭整備にかかわる記念事業を立派になしとげたうえに、更に記念誌を発行して下さるご熱意と母校愛には、只々頭の下るおもいである。

いまここに、40周年記念誌発行にあたり、生徒であった頃、引続き本校に就職してからの過ぎ去った40年間を、学園の50年史、60年

史を頼りに振り返って、関係の皆様と共に、誌上で40周年を記念したいと考える次第である。

### 《創立から終戦まで》

#### 1. 工業学校の設立について

学園の50年史によれば、「昭和13年4月29日天長節の日に、YMCAで部課長会議を開いて、建議書を作り、理事会に提出した。かくて一時停滞していた高等工業学校（電機大学の前身）新設も、下から盛り上げる力により道が開けて来た。6月28日には校内に学制審議会を設け、波多淳三（工業学校初代校長）を委員長として高等工業、及び工業学校の設立を審議することにした」とある。この話は昭和8年頃にあり、先人のご苦勞の積重ねが実り、いよいよ昭和14年4月1日に東京電機工業学校が誕生したわけである。

#### 2. 小石川運動場の獲得

専門学校令による高等工業学校、実業学校令による工業学校が設立されると、いよいよ運動場が必要になってきた。そうした折に、小石川後樂園協の国有地約千七百坪の払い下げの情報が入り、昭和14年11月大蔵省に払い下げ申請を提出し、翌15年7月払い下げが許可された。1坪130円だったそうだ。現在、文京区少年野球場になっている本校の斜め向いにある土地がそれである。この三角グラウンドで運動会をやったり、教練を行った卒業生の方々には、懐しい思い出が沢山あることと思う。



### 3. 校章および校歌の制定

前出の50年史によれば、新設校の帽章、徽章は、従来あまり類のないものにしたと考えて、東京美術学校（東京美大）図案科の森田助教授に依頼し、その考案になるものが現在の校章であり、輪郭はそのままで学校名の変更に伴い、中の文字が変わっているわけである。この図案は当時流行していた流線型と、稲妻とをかたどったものである。

また当然であるが、校旗が昭和14年5月18日に出来上り、その由緒としては、近代文明の根幹をなす電機工業の源泉たる電気現象を表現すると共に、更にこれを通じて生々無怠なる宇宙造化の精神を意味するものであると書いている。

本校の卒業生が知っている校歌は卒業の年次によって違っている。日の本の首府大東京……の歌い出しの校歌が、昭和16年10月13日に制定された本校最初の校歌である。以後学校の新設や時代の変遷と共に各校別の校歌が出来たり、詞、曲が変わったりして昭和23年、新制高校発足と共に新しく校歌が制定され現在に至っている。

### 4. 電機第二工業学校の設立

昭和19年4月に設立された第二工業学校の特徴は、昼夜間とも国民学校（今の小学校）高等科修了程度を入学資格とし、修業年限は昼が3年、夜間が4年としたことである。第二工業学校設立に伴い、先に設立された東京電機工業学校を電機第一工業学校と改めたわけである。第一工業学校の入学資格及び修業年限は、昼が国民学校初等科修了程度で5年、夜は第二工業学校と同様であった。

### 5. 学徒動員と空襲

昭和16年10月には教室の窓には暗幕を取りつけ、間もなくその年の12月8日には太平洋戦争に突入、以後悪夢の様な4年間が続いた

わけである。この間には、教室の白熱電球も周囲を黒く塗りつぶし、真下だけの照明にとどめ、光が外部にもれない様にしたり、防空訓練、避難訓練、野外教練、鍛練大会等が頻繁に行なわれた。

昭和19年には学徒動員が実施され、第一工業学校の5年生と3年生は佐藤鉄工所、日本電機精器、越中島清水航器工業等に分散配置され、4年生は山洋電気に動員された。

また第二工業学校は、昭和20年の終戦直前に電機科は本多電機工場へ、機械科は三菱製鋼所深川工場に動員された。

当時私は工専の生徒として山洋電気に配置され、第一工業の4年生の諸君と共に作業した1人であるが、高橋源八先生が監督に巡回して来られたり、1週に1度故人の高田勇次郎先生が会社の青年学校の教室で講義され、午前は工業の生徒を、午後は工専の生徒がその講義を受け、時として第一工業の諸君のテストを採点させられたことを記憶している。

当時両校の校長であられた波多・具志堅両先生や、教頭の橋本・池谷両先生始め諸先生が大変ご苦労なされた事をよく伺ったものである。

空襲の被害は本校においても他人事ではなかった。昭和19年11月29日には現在の本館北側の半分と西側全部の民家が焼失し、本学園では水力発電実験所と電機校友会木造2階建が全焼した。動員先から学校に呼ばれて、池袋から神田校舎まで徒歩で登校し、この焼け跡整理にあたったことを今でもよく記憶している。

昭和20年2月25日には、第2校舎の木造部分が全焼した。この時は延千機に及ぶ艦載機とB29の大空襲来で、前記空襲で焼け残った校舎の付近一帯は全部灰に帰した。

なお20年5月24日には小石川運動場（現文

京区少年野球場）にあった管理人詰所、銃器庫、弓道場等が焼失したが、度重なる空襲の中で、本館、第二校舎の鉄筋建築は被害は小一部分に止まった。

又、終戦前の2年位の期間には、学業半ばで、予科練、予備練習生として志願する人、徴兵される同窓も少なくなかったし、戦争の犠牲になられた方も数多くあったことは気の毒に堪えない。

### 《終戦直後》

#### 1. 学園名の変遷

昭和14年に東京電機工業学校（のち昭和19年、電機第一工業学校と改称）と、東京電機高等学校（のち電機工業専門学校と改称）を設立し、昭和19年には電機第二工業学校が設立されたので、学園の名称も財団法人電機学校から財団法人電機学園と改称されることになった。昭和21年6月1日からである。この名称は31年に東京電機大学と法人名が改称されるまで使用された。高等学校卒業生の皆さんの中には、卒業証書の中に、電機学園高等学校とあるものと、東京電機大学高等学校とあるものがあるが、それは法人名を冠したものである。

#### 2. 学園創立40周年記念

終戦後間もない昭和22年は世の中が混乱し、暗い空気が漲っていた。卒業生の消息も良くわからず、学校との通信も絶えていた時代である。学園の先輩の先生方は、終戦後の混乱に際して、卒業生との連絡を密にし、併せて卒業生相互間の福利増進をはかるに尽力され、何かの催しを行うことは、卒業生と母校との薄らいだ感情を呼びもどし、疎遠になったお互いのつながりも甦り、ひいては卒業生各人の向上にも役立つと判断され、この年の11月24日、40周年記念式典を挙行了した。会場は神田共立講堂であった。記念事業として、戦

争で焼失した水力発電所を復興し、記念行事としては記念講演会と、法人傘下学校の合同記念運動会が行われた。

また、この式典の日に電機工業会編集、オーム社発行の月刊雑誌「新電気」の創刊号が出来上ったことも校友会の立派な活動の1つとして特筆すべきものである。その後「新電気」の編集権はオーム社に移り、今も好評を博していることはご承知の通りである。

また記念講演には、高校同窓会の先輩阿久津功氏（当時一工第一専科5年）、山崎恵三、西海静男、渡辺義明氏の3氏（当時二工機械科3年）、片岡政義氏（二工電気科3年）、姫野和映氏（二工機械科3年）等の諸氏が登壇し、立派な発表を行った。

また現在プラスバンドでよく演奏されている学園歌は、この時制定されたものである。堀内敬三氏の作詩・作曲のこの歌は詩・曲とも立派なもので、学園内の全ての教職員、学生、生徒がもっともっと合唱し合うべきであると念じている1人である。

### 《終戦直後の私の思い出》

昭和20年8月15日終戦をむかえ、その年の11月5日に本校に就職した私は、夜勤を命じられて午後1時から夜9時までの勤務であった。前述した学園40周年記念式典当時は、かけ出しの新入教員として下働きで走り廻ったわけであるが、何ととっても当時思い出されることは、誰もが同じ食糧難、交通難、電力不足である。当時の夜間の専任は、橋本健之助先生と私の2人で、私の日課は夕方になると、学校の近くにあって生徒の家の自転車を借りて、御徒町の学徒援護会に代用食のパンの配給を取りにゆき、夜になると夜間部の生徒を教員室の前に並ばせて、それを配給することであった。

授業についても、電車の遅れから講師の先

生が間に合わない旨の連絡が入ると、その教室に自習を命じたり補講するのが毎晩であった。授業中停電すると、近くにある東電の変電室に連絡して復旧の見込を問い合わせたり、学校の分電盤にドライバーをもって走るのも連日の事であった。この頃は空腹と、交通難のため、夜の授業が7時半で終りになる期間がしばらく続いた。

また、荒川の河川敷にあった学校の農場に、教師・生徒合同でサツマイモ等の野菜作りに励んだのもこの頃である。

今1つ印象に残っているのは、学業半ばで出陣した人、又電機学校を卒業した人でも再度工業学校で勉学を志す人々が終戦後に多くいた。そうした人々の中で夜間部（第二本科といった）の生徒諸氏の年令は様々であったが、私が始めて担任を受持った昭和23年の諸君の平均年令は私とほぼ同じであった。社会的には先輩の諸氏が生徒の中には沢山いたので、反対に随分と教えられた事の方が多かったし、結びつきも緊密で、その後もこの頃の諸氏に随分助けられたし、今も親しく交流している人が多いのも、当時苦楽を共にしたからこそ感慨深いものがある。

#### 《学制改革と本校の発展段階》

—昭和40年頃まで—

#### 1. 新制高校の発足

昭和23年、GHQの命により、日本に新教育制度が実施された。この時本校は、第一、第二工業を合併して新制高等学校に移行したわけである。この時下級学年の諸君は、新制中学の生徒として取扱わなければならないわけで、一時的にはあるが、併設中学校という名称が使われ、生徒の中には併設中学と同時に他の高校に進学する人もあった。

この時から普通科が設置され、当時の学校の組織と収容定員は次のようものであった。

□昼間部（全日制一修業年限3年）			
普通科	各学年2学級	学級定員40名	
電気科	“ 4 “	“	40名
機械電気科	“ 1 “	“	40名
小計		840名	
□夜間部（定時制一修業年限4年）			
電気科	各学年3学級	学級定員40名	
機械電気科	“ 1 “	“	40名
小計		640名	
総計		1,480名	

その後機械電気科が発展的にその名称が廃止されたり、電気科の中に電力課程、電気通信課程、電気機器課程の3課程が設けられ、昭和28年4月からは全国の工業高校では始めて本校に計測課程が設置され、産業界の注目を集めたものである。それも時代の要請と共に設置も改廃され、現在の普通科、工業科各学年5クラス宛の組織に及んでいるわけである。

#### 2. PTAの発足

新学制が発足するまで、学園内各校には夫々後援会があって活動していたが、高等学校設置と同時に第一、第二工業学校後援会は合併して電機学園高等学校PTAとなった。初代会長には今井勇蔵氏が就任され、同氏はまた、全国PTA連合会副会長として私学振興に尽力されたが、その後も本会の活動は日ごましく、歴代会長を中心として会員諸氏の協調と、学校への理解の深さは他校に例をみないすばらしい活動を年毎に発展せしめられた事は、学校としても深く感謝するところである。

#### 3. 文部省産業教育指定校に

工業学校として長い実績をもつ本校は、次第に社会的にも認められてきたが、昭和32年4月他校に先がけて私学では始めて文部省から産業教育の研究校に指定された。学校では全員総力をあげてこれに応えるため、特に研

究部を組織し、テーマも「電気課程における実験実習を一層効果あらしめるための視聴覚教材の利用について」とした。各部門の責任者には、角川（現本部管財部長）、角田（現電大教授）、伊藤（現高校教頭）、桜井（現電機学校教頭）の諸氏と私があたり、2年間の研究期間を経て34年10月10日に成果を発表して全国高校から来校した多数の先生方の好評を得た。

#### 4. 清里教育キャンプ

昭和37年（1964）、山梨県から県内清里村の県有地を学校厚生施設用地として特別に貸与されることになり、学園では4千坪を借入れ、39年6月山の家落成を期して本校では林間教育訓練をすることになった。その年の夏季休暇を利用して2泊3日の予定で1年生全員を参加させて教育キャンプを実施した。以降、ある年には3泊4日としたり、或年は1泊2日となる等変遷はあるが、教職員と尽力によって現在迄絶えることなく、この教育方法が続けられ、生徒相互間は勿論、先生と生徒のふれあいの場として貴重な活動となっている。

#### 《最近の15年間に思うこと》

#### 1. 小石川校舎への移転

電機大学が発展するに伴い、それまで大学、高校、電機学校が同一校舎で授業することに問題が生じることが多くなり、昭和36年高校分離問題調査研究委員会が設けられた。これは学園創立50周年記念事業の一環として企画されていた高校校舎の建設を実現するためであった。

幸にして東京オリンピックを期に、後楽園庭園に隣接した本校グラウンド（現文京区少年野球場）と現校舎敷地との交換が成立し、現在の小石川校舎の建設となり、昭和40年（1964）4月から高等学校はこの新校舎にお

いて授業が開始された。この新校舎での勉学生活は、精神的にも健康的にも生徒に好影響をもたらしたことはいうまでもない。

#### 2. 定時制の募集停止

昭和43年（1968）4月定時制の募集が停止された。この頃になると昼の高校への進学率が高まり、東京における定時制高校は、公立・私立を問わず入学する生徒が減少する傾向にあった。そのため本校においても、定時制の自然的解消にふみ切ったわけであるが、自分達の後輩が途絶えることは、定時制出身の同窓諸兄の心中を察すると胸が痛む時があった。私が夜間部出身の故もあったから、よけいそう感じるのかも知れない。その後昭和54年2月、定時制廃止を学事部に届け出たので、定時制はこれで終止符をうたれたことになった。

#### 3. 踏歩大会とマラソン大会

山の家での教育キャンプや体育祭と合せて、本校生徒の心身鍛練のための行事として、この踏歩大会とマラソン大会がある。

これは昭和26年から同36年まで行なわれていた皇居一周の校長杯駅伝大会に代えたもので、清浄な自然の中で、しかも全生徒が楽しく参加出来る会にしたものである。昭和40年1月、松戸霊園を中心に実施したのを始めとして、昭和41年には鳩山村校地を中心にして行なわれる等して続けられ、一時中止されてそれに代るものとして狭山湖一周マラソン大会が行なわれてきたが、これまた現地の開発事業によって実行不可能となり、この2年程は、また踏歩大会が復活し、三郷から国府台までの17キロを江戸川沿いに歩くことになっている。

#### 4. 電高祭

以前神田校舎において大学と共に電機展と称して本校の名物として各科、各クラブの活

動の成果を一般に公開して行なわれてきた行事であった。これとは別に文化祭があり、他校の講堂やら九段会館等を借りて文化活動が行なわれていた。この両方の活動を併せて、小石川に移転してからは電高祭と名づけて更に活動は発展している。

特筆することは、この教職員・生徒の活動に加えて、ここ数年来PTAの参加がめざましく、「父母の憩いの部屋」、学校への協力募金のためのバザールを行って、一諸に活動する姿は他の男子校に見られない光景であり、父母の皆様の熱意に敬意を表すものである。

《本校創立40周年におもう》

### 1. 記念式典のこと

昭和52年も暮の頃だったと思う。PTAとして同窓会の方々より、学園の創立とは別に、高校創立40周年を迎えて記念となるべきものを企画しようとの提案があり、当時の池田校長と同じ趣旨の話題を交した経過もあったので、それではと云う事で話はどんどん進み、昭和53年1月に高等学校創立40周年記念委員会が発足した。学校も種々の施策をもって協調体制をとることにし、丸一年間の委員会の精力的な準備と活動によって立派な式典がとり行なわれた。内輪の催しとしては誠にすばらしい学校・父母・同窓会の三本柱の協調の本領を発揮したものと、関係各位のご協力に対して敬意と感謝の表わし方もない位である。更には、記念事業として校庭の整備にまでお力添えいただき、併せて感激のきわみである。

### 2. 隣接所有地の払い下げ

式典の話の少し前のことである。当時のPTA役員藤沢邦夫氏が、同氏の友人で社会党都議会議員の安形惣司氏を紹介して下さり、隣接地の払い下げについてお願いに参上した。安形氏は間もなく都議選があるので(同年7月)

それが終わってから話を進めよう、という事であった。それには次の様な理由があった。その前年、本校講師の増子省吾先生の紹介で、公明党の文京区選出議員の名古屋氏に陳情書書式を見てもらい検討してもらう為に郵送したのだが、その書類を私共の知らぬ間に名古屋都議はそのまま隣接地の所有者である都衛生局長に提出してしまった。安形氏と共に衛生局長にお会いすると、既に局からは払い下げは出来ないと返答済みということであった。次期都議選には、名古屋氏が出馬しない故改選後この話を復活させようというのである。いざ選挙になると、今度は安形氏の当選がおぼつかないとの情報が藤沢氏から流れ、一時はやきもきしたものであった。然し、めでたく当選されると安形氏は、都庁内は自分が努力するから、君達は可能な限り署名を集め、請願の準備をすると共に、地方都議の方々が中心になって推進運動する様示唆して下さい。教職員・父母・同窓会の協力によって約94名の署名を集め、更に請願のための都会議員の署名も60名に達した。安形氏の指導を受けた間もなく、昭和26年卒の浜井実雄氏(浜井電球工業社長)が、当時社会党幹事長で文京区選出の酒井良氏を、偶然にもPTA役員会でこの問題を討議しているところにお連れ下された。それ以降は、安形氏の指示通り、地元議員の酒井氏を中心に池田校長ほか関係者が再三再四都庁に足を運び、また関係方面に出向いて次第に成功の方向に話が煮つまってきた。そして最後の詰として、安形・酒井両氏の共同体制をお願いし、遂に270坪のうち約180坪の払い下げを受けることに成功したのである。270坪の全てを獲得したい気持は誰しも同じだが、これで上々とせねばならぬ数々の都の事情があったようである。

現在その整地も完了し、生徒諸君が活動し

ている姿をみると、3年越しの疲れもふきとぶような思いである。それにしても、この話がかもち上った時のPTA会長だった荒井澄雄氏が、引き続き電大の維持会長になってからも、自業をかえりみず、毎週の如く学校や都庁その他に出かけて下さったのに、払い下げの日をまたず永眠されたのは誠に残念でならない。

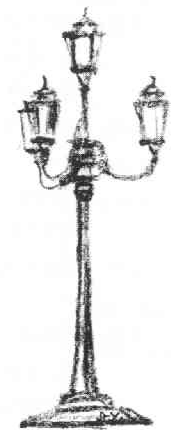
### 3. 記念講演会の開催

昭和55年1月16日、日比谷公会堂に於て、生徒対象に記念講演会を催した。生徒諸君にも40周年をいつの日にか思い出して欲しいことと、これをきっかけにして今後の文化活動行事にしたいという意図があった。講師は昭和52年4月に北極点に立った日大隊々長池田錦重氏にお願いした。生徒諸君に、根性とチ

ームワークの大切さを意識してほしいと希った人選である。最初の誠みとしては成功だったと思う。

《おわりに》

記念事業の最後の仕事が記念誌の発行である。編集委員の諸氏が原稿集めに編集に度々会合を開いて夜半まで会議を重ねている姿を思う時、胸のいたむおもいである。然し、本校の初めての記念事業が歴史として後世に伝えられ、この記念誌も長く読み伝えられることを考える時、編集委員の皆様のご苦勞も、記念委員の皆様のご尽力も長く記録にとどめられ、多くの人の感謝のまとなることを信じて、今後のご努力を懇願して筆をおく次第である。(55、2、11)



# 年 譜

( 学校・PTA・同窓会 )  
40年の歩み

	学 校	P T A	同 窓 会
明治40年 9月	広田、扇本両先生によって高等学校の母体である電機学校が創設された。		
大正13年12月	電機学校私設無線電信電話局JMYA認可される。NHK東京放送局の一般放送に先がけて送受信をおこなっていた。		
昭和14年 4月	実業学校令による東京電機工業学校（高等学校の前身）を併設。昼間部、夜間部の課程をおく。		
昭和19年 4月	校名を電機第一工業学校と改称し、別に電機第二工業学校を設置。		
昭和23年 4月	学制改革により、電機第一、同第二工業学校は合体して、電機学園高等学校となる。		
昭和23年 4月	普通科新設		
昭和24年		PTA発足	
昭和27年 5月	電検認定制度が変更され、本校は第一次試験の免除校に認定される		
昭和31年 2月	校名を東京電機大学高等学校と改称。		

	学 校	P T A	同 窓 会
昭和32年 4月	文部省産業教育研究校に指定される。		
昭和32年11月	学園創立50周年記念祝典を東京体育館にて挙行される。		
昭和34年10月	文部省産業教育指定校として、研究発表会をおこなう。		
昭和35年 1月			高校同窓会設立の援助を校友会、並びに母校に願ひ出る。
昭和35年 2月			母校より同窓会設立準備資金として76,700円下賜される。
昭和35年 3月			設立発起人会を開催
昭和35年 4月			創立総会を本館5階講堂で開催、校友会から高校同窓会設立を承認される。
昭和37年 3月	文京区後案に高校校舎建設計画決定		
昭和38年 3月	高等学校の教育課程改訂にともない、機械科、電子科、電気科と改訂する。		勤務地区別同窓会名簿を発行する。
昭和39年 3月			総会でレリーフ基金募金開始を決定、募金活動を開始する。
昭和39年 6月	山梨県八ヶ岳山麓に清里寮竣工。		
昭和39年11月			千代田地区同窓会、中央地区同窓会発足
昭和40年 4月	文京区後案に高等学校校舎ならびに体育館竣工、新校舎において授業開始。		

	学 校	P T A	同 窓 会
昭和40年 6月			第1回の全卒業者名簿の発行に協力
昭和41年 4月			勤務地区別同窓会名簿を改訂発行
昭和43年 5月	学園創立60周年記念祝典を新築7号館において挙行。		
昭和43年			レリーフ基金をもとに、“若者の像”製作
昭和48年 5月			総会を兼ねて、湯島会館にて同窓集立ち30周年記念、歴代校長を囲む会を開催。
昭和48年11月		電高祭にPTA主催の「憩いの部屋」設けられる。	
昭和49年 4月			第1回クラス委員名簿(住所録付)を発行。
昭和49年 7月			本年度より同窓会の新しい事業として、電機大学へ進学した新会員を対象とした、英語、数学の実力向上のための会員講習会を開催。
昭和50年 7月			第2回の全卒業者名簿の発行に協力。
昭和50年11月		電高祭にPTA主催の「憩いの部屋」の他にL1施設再建・基金募集のため「パザール」を開催する。	
昭和52年 6月	大学理工学部開設並びに学園創立70周年記念式典を鳩山校舎において挙行。		

	学 校	P T A	同 窓 会
昭和52年		電校祭を機会に隣地都有地買収の署名運動を開始。	
昭和53年 6月			本年度の総会で53・54年度の同窓会の事業として高等学校創立40周年記念事業を推進することを決議。
昭和54年 6月	高等学校創立40周年記念式典を「グランドパレスホテル」にて挙行。 東京私立中学・高等学校協会第四支部の支部長校となる。(任期1年)	高等学校創立40周年記念式典とともにPTA創立30周年記念を「グランドパレスホテル」にて挙行。 東京私立中学・高等学校父母の会第四支部の支部長校となる。(任期1年)	同窓会創立20周年目を記念に「グランドパレスホテル」にて総会を開催、また高等学校創立40周年式典並びに記念事業に協力。

## 「講演会・式典・祝賀パーティ」

東京電機大学高等学校創立四十周年記念行事として、六月二日（土）ホテルグランドパレスにおいて、講演会・式典・祝賀パーティーが行なわれた。

講演会ならびに式典に対しては「松の間」「竹の間」「梅の間」三室の仕切りを取り払い会場にあて、祝賀パーティーにはダイヤモンドホールが使われた。

講演会は午後一時開演の予定であったが、正午頃にはかなりの人数が集まり、控室の「蘭の間」準備室の「シルバールーム」会場前のロビーなど、およそ満員になるほどで、盛況になることが予想された。会場前の受付は、来賓用、招待者用、PTA用、同窓生用等に分けられており、受付係にはPTA役員、同窓会幹事、校友会職員、教職員が当たり、応対に忙しかった。

### ◎ 講演会概要

午後一時、松岡三夫教諭の司会によって講演会が始められた。講演に先だち、吉田宇一校長の挨拶と講演者平岩弓枝氏の紹介があり、続いて平岩弓枝氏によって「この頃思うこと」と題して、およそ五十分ご講演いただいた。

会場には椅子四百席が準備されていたが、それでも座り切れずロビーで聴く人も多かった。出席者は実に五百二十一名であった。

講演は、女系である彼女の家庭、家系の話から本題に入り、直木賞受賞に際しては、審査委員長から男性の作品と推測されていたという余談、そのような作品を書くに至った同門男性作家の影響力といったもの。さらに蔭の作家が居るのではないかと疑われることをさらって、それまで人前での講演を苦手としていたものの、とにかく大勢の面前に出て、初めて講演をすることにした経緯と、講演当日の同門作家達の蔭ながらの温かい心の支援。そして時は移り、ピラミッドで極めて困難な条件下でテレビロケーションを行なった時の、

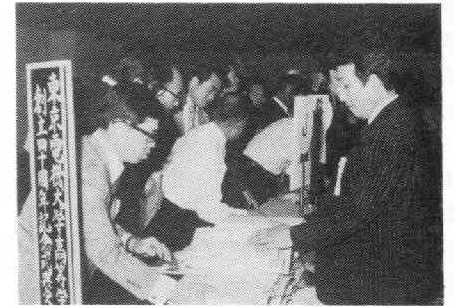


若いカメラマンに対する彼女の思いやり、カメラマンの「写す」ことへの一途な情熱、それに応える俳優達の熱演、そういう人と人の心の通い合いが、一つの仕事を完遂させる上でいかに大切か。さらに大切なのは家庭の愛情である。かのカメラマンも家族の愛に支えられて、苦難のロケを完遂したのである。笑いや涙を交えて巧みな話術で思いやりや、家族の愛の重要なことを説いて、PTAの母親の方々はじめ聴衆一同を感動せしめた。

### ◎ 記念式典概要

記念式典は午後二時より、小長谷登氏（高校三十一年卒）の司会でおこなわれた。

まず松下祐輔四十周年記念委員会委員長の挨拶、吉田宇一校長の式辞、亀井邦夫PTA会長の挨拶があり、ついで鈴木俊一東京都知事（代理として酒井良東京都議会議員）、蓮見孝雄学園理事長、阪本捷房大学学長、柴田伊一校友会理事長が、それぞれ祝辞を述べられた。



た。なお、記念式典を目前にした去る三月末に、高校隣接の都有地払下げが実現し、式典を一層盛り上げたが、隣地払下げに協力下さった酒井良都議会議員、安形惣司都議会議員はじめ、PTA、同窓会、教職員、その他関係者に対して、校長より感謝の言葉が述べられた。

### ◎ 挨拶

東京電機大学高等学校創立40周年  
記念委員会委員長 松下 祐 輔



本日は、都議会議員の酒井先生、学園より蓮見理事長先生、阪本学長先生を初め多数の来賓の方々のご出席を賜り、ここに東京電機大学高等学校創立四十周年記念式典を、このように盛大に挙げて下さることは、記念委員会委員長として、このうえもないよろこびとするところであります。高いところではございますが、記念委員会を代表致しまして厚くお礼申し上げます。

皆様もご存知のように、本高等学校は、昭和十四年四月に東京電機工業学校として、現在大学五号館のある神田錦町の地に誕生いたしました。

以来、校名の変更や校舎の移転など幾多の変遷を経て、昭和三十一年に校名を現在の東京電機大学高等学校に、そして昭和四十年に現在地である後楽園に校舎を移転し、今日の隆盛をきわめるに至ったわけであります。

その間実に一万九千余名の卒業生を世に送り出しています。同窓の諸兄は、業界のパイオニアとして、また中堅として、それぞれの分野で活躍中であり、なお在校生千六百余名は将来、日本を担う人材たるべく、勉学にそしてスポーツに努力を続けております。

このように母校は、まさに四十年代の壮年

期を迎え、歴史ある高等学校として確固たる歩みを続けております。今日における私達同窓生の活躍は、こうした歴史ある母校より授けられたものであります。

こうした歴史ある母校の発展は、教職員を初め、多くの諸先輩達によって築きあげられたものであることを考えますならば、我々卒業生はもとより、現在ご子息をお預けされているご父兄の方々にとりまして、責任の重大なることを改めて自覚して頂くと共に、さらに良き母校に発展するための協力を、おしんではなりません。

そういう意味からして、一昨年、創立四十周年を一つの区切として、先輩諸氏が少しずつ築いてきた、この学校の校風や伝統を、さらに発揚させると共に、在学生の勉学の励みになるような教育環境の整備等の記念行事を行なってはどうかと言う声が、卒業生およびご父兄の方々より湧き上り、昨年一月、高等学校創立四十周年記念委員会の発足をみたくてでございます。

## ◎ 式 辞

東京電機大学高等学校

校長 吉田 宇一



本日多数の御来賓のご臨席をいただき、卒業生、PTA関係の皆様並びに本校教職員が一堂に会しまして、創立四十周年記念式典を挙げてまいりますことは、学校と致しまして無上のよろこびとするところでございます。ここに教職員を代表しまして心から厚くお礼申し上げます。

以来本日に至るまで、多くの方々のご理解を得まして、当委員会が計画致しました、校庭の整備や植樹あるいは記念誌の作成等の記念事業も順調に進んでおりますことは、誠に感謝にたえません。この席を借りまして厚くお礼申し上げます。

学校の真価は、その建築や設備だけにあるのではなく、そこから巣立つ人材が社会に有用でなければ、学校の値打ちはないものです。

幸い本校は優秀な教職員と教育環境に恵まれ、それにふさわしい人材を多数輩出してまいりましたことは、我々卒業生にとって、大きな誇りであり、また我々卒業生は、学校が立派な学校として存在することを常に念願し、微力ながらも協力するつもりです。

終りにあたり、本日のご列席の皆様、また来賓の皆様、今後とも変らぬご指導ご協力の程をお願い申し上げます。私の挨拶にかえさせていただきます。

ここで本校四十年の歩みをまず概観いたしまして、しかる後、四十周年記念式典の意義を考えてみたいと存じます。

昭和十四年四月に創立されました東京電機工業学校が本校のはじまりでございまして、五年後の十九年四月にはもう一校工業学校が設立されまして、これを電機第二工業学校と名づけまして、先のものを電機第一工業学校と改称いたしました。この二校は、戦後の昭和二十三年に合体いたしまして、電機学園高等学校に発展したわけでございます。また同年普通科を新設いたしまして、更にひろく門戸を開放いたしましたわけでございます。そして昭和三十一年二月には東京電機大学の発

展にもなって、その名も東京電機大学高等学校と改め、更には同四十年に現在の小石川の地に新校舎を建設移転いたしました、現在に至っております次第でございます。

東京電機工業学校が募集人員昼間五十名、私が入学させていただきました夜間部百名から出発いたしました当初に較べますと、現在各学年とも普通科二百五十名、工業科二百五十名の募集定員でございまして、本年度の総生徒数は千五百八十二名でございます。

また教員数にいたしましても、専任教職員数六十六名、兼務教員六名、非常勤教員三十二名あわせて百四名という陣容でございまして、まさに隔世の感がございます。

この間四十年の歳月の中には喜びや苦しみが多々ございました。電機第一工業学校の創立が既に日支事変のさ中にありまして、第二工業学校設立の頃には、戦火がわが本土に迫るという非常にきびしい情勢の中にありました。従いまして、第一回生から第四回生頃までの同窓生の中には、予科練やら予備練習生に志願された人や、或は夜間部の諸君の中には、学業半ばにして召集令状を受けて、永遠に帰らぬ人となった方も多数おられましたし、幸にして帰られた方にしましても、種々の都合で再び教室に姿を見せることのできなかった人も多かったものでございます。戦争が終りほっとしたのもつかの間、喰べるに十分な食なく、空腹をかえ、今のラッシュアワーに倍する交通難に体をさいなまれ、加えて夜間部においては電力事情に悩まされて、十分な電気実験どころか普通教室での授業すら満足にできない学生々活で、戦後数年間は誠に言語に絶する大変な時代でございました。しかし教師は勿論のこと生徒にいたしましても、不平を云うことなく艱難辛苦に耐えて黙々と学業にはげんだものでございました。

然しながらこうした苦しみの時代に際しましても、先輩の先生方の昼夜をわかたぬご尽力と、卓越した指導力とに呼応した生徒の不屈の努力が見事に難局を切り抜けたばかりでなく、他校が範とするにたる成果も数限りなくあげてきております。一例をあげますと、昭和三十二年四月には全国に先がけて文部省産業教育指定校となりまして、二年後の三十四年十月には、その研究成果を全国の関係者の前で発表いたしました。そうして好評のうちその責務を果たしたものでございました。そうした成果と伝統をふまえて、現在におきましても工業科では電気工事士その他の資格試験の合格者数、合格率等は、他校の追従を許さぬものと自負しております。また普通科におきましても、母体である東京電機大学のご理解によること大であります。他大学等を含めて七十数パーセントの進学率を示しておるわけでございますが、今後更に質の向上に鋭意努力を重ねているところでございます。

本校の今日ありますのは、過去幾度かの難局を開き、つねに教師と生徒が一体となって努力されたたまものと存じております。こうして本校を発展に導いてこられました幾多の諸先輩に対しまして、ここに改めて敬服と賞讃の意を表わす次第でございます。また私どもは、諸先輩がつくられた偉大なる遺産、大いなる伝統を引き継いでいるわけでございまして、あらためてその責任の重大さをおしめておるところでございます。

本日の四十周年記念式典は単に以上のような本校の歴史を祝うことのみならず止まりません。次に申し上げるような記念すべき事柄が重なっているわけでございます。まず第一に、時はあたかも本年は同窓会が発足して二十年を迎える事でございます。創立以来本年までに

送り出しました卒業生は一万九千九百九十三名でありまして、それをまとめる同窓会の二十年記念ということでございます。

第二に申し上げますことは戦後に充足いたしましたPTAの三十年目の誕生日にあたることでございます。本日の式典は、このPTAと同窓会の尽力によるところ大なるものがございます。

第三に本校隣接地買収による校地拡張の記念の意味もございます。本校は都内でも交通至便として、向いに小石川後楽園の緑を望み都内では比較的良好な立地条件に恵まれております反面、校地の狭隘であることはご承知の通りであります。それがこの度、隣接部有地の一部約六百二十㎡を、本年三月三十日払い下げを受けることができたわけでございます。今日の記念式典に間に合うようになり、花を添えることができて、これに過ぎる喜びはございません。勿論教育上十分な面積とは申せませんが、現在までの校地に匹敵する効率を発揮できる広さでございますので、学園にとりましては誠に貴重なものがございます。大いなる教育効果をあげるべく努力する所存でございます。

以上申し上げましたように、本校誕生から四十周年、同窓会創立二十年、PTA設立三十年、校地拡張の四者の記念をコンパクト年併せて祝い、然も世間一般の式典のように対外的な招待者が主役となるのではなく、同窓会、PTA、本校教職員が三位一体となって、いま申し上げました四つの事柄を、つましやかに喜びがみしめ合うことをこの式典はねらいといたしまして、二年ほど前から記念委員の方々が企画進行して下さいましたわけでございます。従いまして、ご招待申し上げます来賓の方々もひかえ目に、また式典そのものも華美にわたることのないように

いたしましたのも、その為でございます。以上のようなわけございまして、特別にご案内申し上げますがご来賓の方々も含めて、本日は内輪の集りであるという風に、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

最後に今日の式典を実際に企画運営またご協力下さいましたPTA、同窓会の記念委員の皆様並びに関係されました多くの方々に心から敬意を表すると共に、厚く御礼申し上げます次第でございます。更には今日の式典の一つの柱になりました校地拡張に伴い、都用地払い下げに多大のご尽力をいただき、本都知事代理でお越しただいております文京区ご出身の都議会議員酒井良先生には、とくにまた改めてお礼申し上げます次第でございます。

また都議会議員安形惣司先生はじめこの払下げ運動に関連して八千数百名にのぼる署名運動に参加ご協力下さいましたPTA、同窓会、教職員とご家族の皆様方のご厚情に対しまして、併せて深く感謝申し上げます。

隣接地取得が成功した裏には、こうした皆様の努力が結実したものと確信しておるわけでございます。加えて校庭の整備にも、同窓会、PTA関係の皆様から手を貸そうという暖かい言葉をいただいております、これまた感謝にたえない次第でございます。早急に整備して、一層の教育効果を挙げる所存でございます。

なお本校の経営母体であります東京電機大学の歴史は、本年で七十二年を数えます。三年先の昭和五十七年には、創立七十五周年にあたりますので、学園ではその記念事業の企画検討がおこなわれているところでございます。このことにつきましても、今回同様絶大なるご支援を賜りますよう、学園に奉職する一人としてお願い申し上げます次第でございます。

す。

おわりに臨みまして、本校の前途でございますが、新時代に生きる青少年の人間形成、学力の向上につきまして益々道のけわしさを感じているところでございます。然しながら諸先輩諸先達の皆様方が今日まで営々として築かれ、私どもにおひきつぎ下さいました本

## ◎ 挨拶

東京電機大学高等学校PTA

会長 亀井邦夫

本日東京電機大学高



等学校創立四十周年記念式典に、都議会議員酒井先生、理事長の蓮見先生、大学々長の阪本先生を始めとし学園の多数の先生方、また

各界の先輩の方々の御来席を賜り、かくも盛大な式典が催されましたことを主催者の一員でございますPTAを代表致しまして、心から感謝の意を表わす次第でございます。

私PTAの会長とは申しまして、つい先月の十九日に行なわれました総会において御指名を受けまして会長の大役を任せつかった新米会長でございますが、この式典にPTA会員の皆様を代表致しまして御挨拶申し上げますことはこの上ない光栄と存じて居る次第でございます。

しかしこの四十周年の企画は約一年前から実行委員会を発足しPTAも参加致しましたわけですが、PTAと致しましては、御子息が今春めでたく御卒業されました前会長の曾我さん始め前役員、前委員の方々、また賛助会の方々のお力によって組立てられて参ったわけございまして、本来ならば就任間な

校を、更に発展向上させることは一朝一夕にしては不可能ではあります、私共は、その責任の重さを再認識しているところでございます。本日ご来賓の皆様方、ご来場の皆様方に、何卒今後とも宜敷く叱咤ご鞭撻またご指導とご協力を賜りますようお願い申し上げます。式辞といたします。

い私よりは前会長で本実行委員会顧問の曾我さんがこの場に立っておられるのが当然と考える次第です。

「曾我さん恐れ入りますがちょっとお立ち下さい」といって前会長を紹介、盛大な拍手が会場に湧く。

有難うございました。ご紹介の後に皆様より前役員、委員を含めて感謝の拍手を頂戴致したいと思いましたが先に頂戴を致し本当に有難うございました。

さて伝統ある本校に私達の子供達をお預けし教育していただいております親として本当に幸であると感じて居ります。そしてこの祝うべき四十周年行事のある時期に在学して居りましたことは子供達にも大きな印象として心に残ることでありましょう。私達PTAと致しましてもこの一つの節目を契機として今よりも更に良い校風を育て、来年、再来年と入学して参ります生徒の為にも力を惜しまない所存でございます。

校長先生は何時も学校とOBと父兄と三位一体となって学校を良くしたいと申されて居ります。ただ今も学長先生が大変良いお言葉を下さいました。私は大学は高校の兄貴分と思っております。

大学と高校と電機学校が三校一体となりこの電機ファミリーの21世紀へ向っての発展と栄光をお祈りして、御挨拶にかえる次第でございます。有難うございました。



## ◎ 祝 辞

東京都知事 鈴木 俊 一  
(代理 東京都議会議員 酒 井 良)



風薫る季節を迎えた本日、ここに東京電機大学高等学校の創立四十周年記念式典が催されるにあたり、御挨拶を申し上げる機会を得ましたことをうれしく存じ、心からお祝い申しあげます。

御承知のとおり、本学園は、明治四十年、創立者廣田精一・扇本真吉両先生の「国の発展のもとは、工業教育の振興にあり」とする理念のもとに、「礼儀・協調・自主」を教育の基本とし、深い人間愛と高い教養に根ざした人間を育成して、社会に、国家に貢献することを目的とし、本校の母体であります電機学校が設立され、その後昭和十四年には、実業学校令により本校の前身、東京電機工業学校が設置されるに至りました。

以来学園は、四十年の星霜とともに、学園関係者の方々の並々ならぬ御努力により、今日、ここにみられるように、今や男子教育界にあってゆるぎない地位を築かれ、高校・大学と一貫教育の理想をここに実現されました。

この間に、およそ数万余名に及ぶ多数の卒業生がこの学窓を巣立ち、実業界をはじめあらゆる分野で貴重な人材として活躍され、わが国の経済・社会の発展に尽された功績はまことに多大であり、関係者のひとしく賞讃するところであります。

これは偏に、歴代の理事長・校長先生をはじめ、諸先生方、諸先輩の方々がこの名誉ある学校の伝統を受け継ぎ、独自の学風に培わ

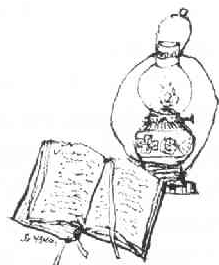
れ、学園の発展のために御尽力なされた賜物であり、まことに敬服にたえないところでございます。

今日、政治・経済・文化の各方面にわたって、めざましい進展をみせるわが国に対し、国際社会は世界の平和と繁栄のため、一層重要な役割を果すことを求めています。

このような中において、わが国の発展に貢献し、国際社会の一員として活躍するすぐれた人材を育成する教育の役割は、極めて大きいものと考えます。

本日の記念すべき日を契機に、学園がさらに建学の精神を発揚され、自主的精神に充ちた人間の育成を旨として、豊かで創造性に富んだ教育活動を展開され、この学園から広く社会に貢献する人々を数多く送り出してゆかれることを心から期待しております。

最後に、ここに御列席の皆様方の今後の御多幸と御精進を、さらにまた本学園が一層の御発展をとげられますよう心から祈念し、私の祝辞といたします。



## ◎ 祝 辞

学校法人 電機電機大学  
理事長 蓮見 孝 雄



東京電機大学高等学校は今年設立四十周年を迎えました。さまざまな苦楽の記録は「創立四十周年のあゆみ」のパンフレットに簡単に記載されてある通りです。

その母体となった東京電機工業学校は昭和十四年開設され、昭和二十四年新学制による高等学校となり、今日に至っております。この間一万九千九百九十三名の卒業生を送り出しました。

東京電機工業学校第一回卒業生のうち二人が本法人の重要な職についております。理工学部次長の片野義雄氏と本日の主役高等学校々長の吉田宇一氏とであります。学園発展上まことによい姿であると喜ぶものであります。

このような記念会に際して思うことは、単に歴史の長さを祝い懐古に耽って終るべきで

なく、心を新たにする機会にすべきだということでもあります。

近世において日本は二度世界を驚かしました。無血革命であった明治維新と第二次大戦敗戦後の奇蹟的経済発展であります。その原動力の一つとして節儉と勤勉をあげることを否定するものではありませんが、真の原動力は教育の類まれなる普及であるといわれます。江戸時代末期において全国に一万の私塾があったといわれています。中にも有名なのは広瀬淡窓の咸宜園で、一人の淡窓先生を慕って全国津々浦々から入塾者が集まり総計三千名に達し、多くの歴史的人物を輩出しています。みるべき施設も組織もなく、あるのは人と人との触れ合いだけであります。これが教育の原点でありましょう。

今や高等学校教育は義務化し、全く珍らしくありませんが、その使命は絶大であります。特色を持つことは勿論必要でありますが一見平凡であってもよい、教育の原点を見つめ地味に粘り強く前進をつまづけることを願い祝辞といたします。

## ◎ 祝 辞

東京電機大学  
学 長 阪 本 捷 房



高等学校にはこのたび四十周年を迎えられましたことを、皆様と共に心からお喜び申しあげたいと存じます。

先ほど頂きました四十周年の歩みを拝見いたしますと、四十年間

における高等学校の歴史の要点がよく示されておまして、昭和十一年以来電機学校に関係しておりました私にとりましては、一つ一つ思い浮かべられることばかりでございます。

一口に四十年と申しましても、この四十年は普通の四十年ではなかったように思われます。申すまでもなく、戦前、戦中、戦後を通じての四十年であるということは、実質的には四十年を遥かに上回るご苦心もあり、その期間の苦しみもあり、またその後の成長もあり、単純な四十年ではなかったと思います。そのことを思い起こしてみますと、それだけ

のことがこの四十年にできたのであるから、これから先ますます将来に向かって発展されることは疑いないことだと感じております。

本学の高等学校が普通の高等学校と形の上で違ふとすれば、それは、同じ学園の中に幾つもの学校があるということだと思います。思い起しますと、旧制時代の大正十二年に七年制の高等学校ができました。これは旧制の中学校四年と旧制の高等学校三年とをまとめたものでありますが、これが順次発展して、国立大学にずいぶん卒業生が入って参りました。そういうものができたのはなぜであるか、そしてその成果がどうであったのかは、当時のことをご記憶の方にはよくお判りのことと思ひますが、これに似たことが本学園についても考えられます。本学が大学と高等学校とをもっているのは、現在の制度上では一つの学校としての形は作れませんけれども、運用の面において、ある程度のこととは可能であることを意味いたします。高等学校の影響を受けて大学が良くなり、またその逆に大学の影響を受けて高等学校が良くなる。これが、一つの学園に存在する二つの学校の意味であろうかと思ひます。

それにはどうすれば良いかということをお

## ◎ 祝 辞

社団法人 東京電機大学校友会  
理事長 柴田 伊一



東京電機大学高等学校も年々発展する中で今年創立四十周年を迎える事になり、本日ここに四十周年記念式典を挙げる事は、校友会と致しましても大変

ほど平岩先生がお話し下さったような気が致します。これは一言に言えば、先生のお話の、心の通い合いであろうと思ひます。

これは実際の運営に当っておられる方々の心構えとして必要なことであると思ひます。そういうことによつて本学の大学も高等学校も、相寄り相援けて、これから将来に向かって現在より以上に進展してゆく、発達してゆく、良くなってゆくことを期待したいと思ひます。

四十年を契機といたしまして、いま私が申しあげたようなことを頭の中におきながら、将来に向かって進みたいという考えが浮かんで参ります。別に四十年でなければいけないということではございませんけれども、何事も人間のすることは何かのチャンス、あるいは起点が必要であることを感じます。本日のおめでたい四十年の日を起点といたしまして、本学園の高等学校と大学とが相寄り相援けて、将来ともに進展してゆくことを希望いたしますと存じております。

一言祝辞にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

喜ばしい次第でございます。学校の発展と同窓生一同の躍進を、心よりお祝い申し上げます。

一般に高等学校は大学をひかえての準備段階にあるだけに、勉強、勉強と、やたら青春を競争意識の中で校友との親睦の場が少なく、むしろいがみ合いの時期ではなかったかと思うのであります。今となつては、一応夫々の分野で社会人となり活躍されて居ります。高等学校同窓会はその面から言つて、学生時代の友情の不足を補い、校友の情を再燃させる

意味で、非常に有意義でなからうかと存じます。只今運見理事長先生からも、本校に於ける高等学校のウエイトの大きい事のお話もあり、大学の評価は高校の評価でもあり、年々そのレベルは向上して居りますことは誠に喜ばしい次第でございます。

戦後自由世界の仲間入りをした日本経済はすばらしい発展を見せ、今日では世界経済に占める割合も非常に高くなつて来た事は、御承知の通りであります。

これは日本産業が積極的に貿易を振興し、海外技術を大いに吸収し、平和国家建設に国民一丸となつて努力したからであります。然し一面皆様方のような若い人達の力のシグマーとも言えるでしょう。

日本の成長率が、世界のどの国より驚異的に高かつた事は

一つに、日本人の教育水準が非常に高かつたこと。すなわち教育の力

二つに、よく働く国民であつた事等ではありますが、我が国の成長企業の在り方を見ると

- 一つに、技術水準向上に非常に努力した。品質管理を身につけ、合理化に徹した。
- 二つに、メーカーの使命として、よい品物を安く作り安く売った。
- 三つに、売れる商品の開発に努力した。マーケティングを身につけた。
- 四つに、欧米の知識を日本に合った形態に日本ナイズした。組織力、管理能力を高めた。

企業発展の基礎は、外的変化を的確にとらえ、積極的に、創造的にタイミングよく行動した企業が成長している事実からして、殆んどの方々の中堅企業で活躍している事だけに僥倖ながら何かの参考になればと、私見を述べた次第でございます。

バイタリティあふれる活力ある行動、仕事勝利を掴みます。皆様方の御健康と御奮闘ならびに学校の発展を念願し、祝辞といたします。

## ◎ 感謝状授与

今年はまだ、高等学校創立四十周年のほか P T A 発足三十周年、同窓会では設立二十年を迎える年にあたるので、式典の中で関係者に感謝状が贈られた。

すなわち、高等学校に永年勤続されている四名の講師に対し校長より、P T A 役員関係五十名に同じく校長より、また同窓会の特別功労者二名と常任幹事八十五名に対し同窓会長(校長が兼任)より、記念事業特別協力者三百二十二名(五月十九日調べ)に対して記念委員会委員長より、それぞれ感謝状が贈られ、式典は午後三時に終了した。



◎ 感謝状及び授賞者

1. 永年勤続講師 4名

綱 正貫 西尾圭介 望月彦二郎  
河部貞夫 右代表 綱 正貫

感 謝 状  
(氏名) 殿

あなたは永年にわたって本校の教育に熱意をもって従事され本校の発展に大いに貢献されました。

よってここに四十周年を迎えるに当たりあなたの御尽力に対して衷心より感謝の意を表します。

昭和五十四年六月二日  
東京電機大学高等学校  
校長 吉田 宇一

2. 旧PTA役員関係 50名

奥ノ木実 秋本妙子 常木妙子 鈴木恵美子 湯山一男 高橋慶助 中島登喜代 川野一郎 木下精一 柴崎晃 古名家澄男 藤沢信子 小林富栄 芝江妙子 榎戸健治 相川静子 浅井博幸 長谷川けい子 故木村田治 森田うた子 池田福子 渡辺貫槌 宮下琴治 横山忠男 山田璋次 川上智子 山内信雄 鈴木雪雄 比企政美 小山八重子 萩原文三 白川一郎 丸山恭正 滝口泰 関口武夫 玉置秀夫 岡田佐吉 川原明治 宮崎房男 石川正之助 加藤喜三郎 荒巻義也 堀場浜太郎 土屋弘衛 小池富雄 見沢文彦 小沼淳 故荒井澄雄 曾我清 西村要士雄 右代表 滝口 泰

感 謝 状  
(氏名) 殿

あなたは東京電機大学高等学校 P T Aの(役職名)としてよくその運営と育成に努力されました。

本校創立四十周年を祝し併せて本会発足三十周年を迎えるにあたりここにあなたのご貢献に対し深く感謝の意を表します。

昭和五十四年六月二日  
東京電機大学高等学校  
校長 吉田 宇一

3. 同窓会関係(特別功労者) 2名

今田 正、鷺見 篤 右代表 今田 正

感 謝 状  
(氏名) 殿

あなたは本会の設立に多大のご尽力をされ本会設立後は幹事長としてまた常任幹事として長く会の運営と育成に努力されました

本会設立二十周年を迎えるにあたりあなたのご貢献に深く感謝の意を表します

昭和五十四年六月二日  
東京電機大学高等学校同窓会  
会長 吉田 宇一

4. 同窓会関係(常任幹事) 85名

青木仁 安藤忠 秋元定助 阿久津功 浅古庄一 井野基樹 石崎泰司 池ヶ谷道夫 稲垣恵三 印宮登 大久保英治 大塚忠克 大橋英夫 籠宮雄治 鹿島孝一 勝山紀夫 加藤栄治 亀山幸人 川口晃弘 岸昭夫 北風康男 熊倉作一 倉林純一 倉持悦久 黒田中治 小竹四郎 小長谷登 今田正 坂井孝志 佐々

木正雄 佐々島長治 塩瀬喜一 志賀富士弥 柴山茂男 白川善隆 末永紀俊 鈴木治郎 鈴木整司 鈴木勉 鈴木敏夫 鈴木洋二郎 須藤敏也 鷺見篤 染谷和雄 高橋国男 竜沢良雄 谷沢正一郎 玉島暉智 戸井田豊 戸江栄一 中田勇 中谷正弘 中林恒太郎 中村広幸 野瀬健一 野原勝二 萩原宏芳 林昭吉 日比野靖昌 平賀徹 平野修一 平野武雄 藤田明也 前嶋万人 間川清太郎 幕田俊勝 松下祐輔 丸山泰弘 美崎秀雄 見崎正行 宮城一治 宮寺美次 向芝京太 村越源一 村越清一郎 本橋敏克 山川保 山本策一 油原延治 横溝邦彦 横山真一 横山実 吉川由己 渡辺正司 渡辺敏章 右代表 池ヶ谷道夫

感 謝 状  
(氏名) 殿

あなたは本会の(役職名)として長年にわたり本会の運営と育成に努力されました東京電機大学高等学校創立四十周年を祝し併せて本会設立二十周年を迎えるにあたりあなたのご貢献に深く感謝の意を表します。

昭和五十四年六月二日  
東京電機大学高等学校同窓会  
会長 吉田 宇一

5. 記念事業特別協力者(五月十九日調) 三百二十二名

代表 小松由太郎

感 謝 状  
(氏名) 殿

あなたは東京電機大学高等学校創立四

十周年記念事業に対し多大なるご援助とご協力をいただきました。

本日記念式典を挙げるにあたり感謝の意を表します。

昭和五十四年六月二日  
東京電機大学高等学校創立四十周年  
記念委員会  
委員長 松下 祐輔

- 追記 -

記念事業の寄付金受け付けは記念式典以後も続行され、八月末日締切となった。この結果式典での感謝状贈呈に間に合わなかった五月二十日以降の特別協力者には、個別に感謝状が贈られた。





パ ー テ ィ



昭和54年6月2日(土)  
於 ホテル グランドパレス  
ダイヤモンドホール



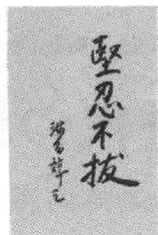
歴代の校長先生

## 「波多諄三先生」のお人柄

東京電機工業学校校長 昭和14年4月～昭和19年3月  
電機第一工業学校校長 昭和19年4月～昭和21年11月

元校長 清水 明

波多先生は昭和14年本校が創立されたとき初代校長となられた。私も先生の膝下で教鞭をとることになった。当時は大東亜戦争勃発直前のため日本は軍事色濃厚で、軍事教練が盛んでその上電気工学も学ばねばならず工業学校は特に重視されておった。そこの校長になられた波多先生は日夜大変な御心労があたりだったと思われる。服装も国防色で国民服に身を包まれ戦闘帽で通勤されておられた。頭は勿論丸坊主、先生は常に水道の蛇口に頭をつけられ、ジャージャーと水をかけ、ジャブジャブ洗ってたお姿を思い出す、これはずうっと、のちまで続いていた。軍事教練の時は配属将校の指揮のもとで、先生を先頭に生徒全員がつけ剣の銃を肩に行進するのだが、先生は若い頃からそんな経験もなかったのだろうついて行く私達教員生徒一同はサーベルを腰にさげて歩く先生の姿がさまになってないので、如何にも滑稽なので笑うと教官に叱られるので笑いをこらえるのに随分苦労した。特に軍刀を抜きさしする動作が意のままにならず、教官の号令と一致せずあわてている姿は当時の生徒諸君の忘れられない一場面であろう。訓練が終り教員室で教官から指導を受けてることもしばしばあった。私達は書類をよく先生にお見せし時に裁決して頂くのだが先生は書類に目を通しながらウンウンと、うなづきつゝ許可された。第一回生の卒業修学旅行も周囲から大分反対の声があったが、君等にまかすからと教練をかかえて、私と教官の2名で引卒することが許可条件で、三泊四日



の関西方面へ修学旅行ができたのは先生の決断と感謝している。夏には職員家族一同でよく海水浴を楽しんだ。ある年それは9月も半ばを過ぎ水泳する人もまばらな神宮プールで一人で泳いでおられる先生と共に楽しくすごしたこともある。先生は抜き手をきって若い私達に負けない泳ぎぶりを見せた。戦災で焼かれ松戸方面に一時疎開したが持物総てを焼きつくされた先生は詰襟りの学生服に相変らずの丸坊主姿、飄々として学校に勤務されていた。終戦当時、新任の某先生が教員室にこられた校長先生を小使いさんと間違ひ、後で大笑いとなったことがある。先生は温厚な方で少しも威厳らしい素振りはなく物ごとはひかえめに、柔和な感じではこらしいところを見せず社会的に立派なお友達を持っておられた。故丹羽先生、故瀬戸先生とは学生時代からの同期生、先輩でお親しかった。両先生を東京電機大学にお迎えしたのも波多先生のお力が大いにあること。今日の学園の発展の蔭の御功績は忘れることはできないものである。(ご高令のため、ご自宅にて静養中)  
(昭和55年1月清水記)

## 「具志堅実成先生」の思い出

電機第二工業学校校長 昭和19年4月～昭和21年4月

(元第二工業教務課長、現電子科教諭)

河内 正夫

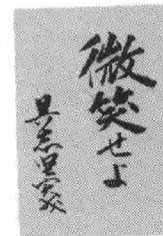
第二工業学校は、第2次大戦末期の昭和19年、電機学校昼間部が解消昇格して開校した。先生は初代の校長である。物資が極度に窮屈になってからの開校だから万時不自由で、1年生は7学級。小じんまりの学校だが、教員の意気どみはさかんで、具志堅先生は国民服に戦闘帽、ゲートル巻という姿。毎朝の朝礼には全員裸で天突き体操をしたり、明治天皇の御製を詠唱などし、必勝の信念をかためたものであった。

やがて終戦、昭和22年に先生は学校を定年退職され、工学院大学で教鞭をとっておられたが、昭和27年60才の若さで急逝されたのである。

先生は非常な勉強家で、講義の下準備は、講義時間の数倍をかけられ、数年多忙な役職につかれてもお座りの講義は決してしなかった。先生の教科書はどのページも、余白にピッシリ関連事項が書きこまれていた。だから生徒の質問にすぐ答えられるし、不明のときは、徹底して調べ後日まことに誠実な答えが帰ってくるのが、異口同音の先生評である。

その先生の名講義のただ一つの難は、声が低くかつ、小さいことで、こればかりは地声で仕方がない。

先生は那覇市の出身、熊本高から九州帝大電機工学部を卒え一時炭鋸技師となられたが、教員を志望、御自身で電機学校長加藤静夫先



生に手紙し、見込まれて本校の教員になられた。そんなわけで、加藤先生の媒酌でふみ子夫人と結ばれた。(御健在81才)

奥様の話だと、家にも専門書を読むことが何よりの楽しみで、かつ趣味で、それ以外何一つ趣味らしいことはしなかったとのことである。また大の喫煙家で、戦争中不自由していた先生を想い出す。

私は学生の頃から先生の講義が好きで、昭和7年に母校に奉職してからも、しばしば先生に質問に行った。色黒のゴツイ顔に似合わず、先生はいつも笑顔で答えられ、答えること自体がいかにも楽しそうであった。難解なことを平易にくだいて分らせることは容易なことではない。平易にしたために、本質をゆがめてしまい、かえって初学習者を誤らせることがある。先生はいつもこのことを戒められた。後年私が教壇に立つようになって、この先生の戒めをいつも思い出しては努力したものである。

先生は本当に誠実な教育者であった。

(昭和55年1月記)

電機第二工業学校校長

昭和21年4月～昭和24年3月

電機学園高等学校校長

昭和23年4月～昭和24年3月

東京電機大学高等学校校長

昭和31年5月～昭和35年3月

電機第一工業と第二工業とが合併して電機学園高等学校となったとき私は初代校長として就任しましたがその後現在の校名となり昭和31年に再び校長として四年間勤めました。当時の我国のエネルギー事情は非常に悪くて電力はほとんど水力に依存していました。たまたま私の専攻が発電水力でしたので学会や技術院などの委員会に出席することが多く国際会議で屢々海外にも参りました。

そのようなわけで校務は諸先生にすっかりご迷惑をかけました。昭和34年のPTA新聞「いなずま」に「一寸失礼」と題して筆者不明の記事が出ました。「(中略)ことポンプに関しては東奔西走、口角泡をとばして時空を超越して人を選ばない。ために諸先生は大分に閉口し流布されている伝説も数多い。

(中略)雨ニモマケズ、風ニモマケズ、何時間シャベッテモマケス、丈夫なカラダヲモチ、アメリカニ催シガアレバスットンデユキ、西ニコワレタポンプガアレバ、屑屋ニハラッテアメ玉ヲ買フノガヨイトイウ。ソウイウモノニハナリタイ、」これは当時流行した歌の変へ歌で私を揶揄(からかうこと)した一文です。ほんとに失礼しました。しかし運動会や修学旅行などの楽しかった思い出も沢山あります。昭和31年秋に修学旅行で関西に行った時は生徒の無事を祈念して旅行中は禁煙を守り通しました。東京駅で全員無事解散を見とどけてホッとして一服したことは今だに



氏名 池谷 武雄

生年月日 明治31年1月24日

住所 〒167

杉並区南荻窪1-15-19

電話(ご自宅)03(333)1830

勤務先 東京電機大学 顧問

忘れません。あれから30年。私も年をとりました。昨年3月に満80歳の誕生日を過ぎましたので教授を引退して顧問となり時々大学に顔を出しています。その外に二三の学協会の理事も致して居りますが閑職なので好きな画を描いて楽しんでいます。

博多の聖福寺の住職で天保8年(1837年)に88歳で他界した仙庵禅師が老人六歌仙という狂歌を残しています。そのなかに、「くどくなる気短かになる愚ちになる、出しやばりたがる世話やきたがる。またしても同じ話に子を營める。達者自慢に人はいやがる」というのがあります。全くその通りです。私もこれから心して人に嫌われることのないような余生を送りたいものと念願しております。30年前の私の校長時代のことを思い起しますとほんとに至らぬことばかりでしたが、私にとっては人生街道の楽しい一駅でした。当時の諸先生に心から感謝の御礼を申し上げます。

(1979-8)

## 「橋本健之助先生」を偲んで

電機第一工業学校校長 昭和21年11月～昭和24年3月

電機学園高等学校校長 昭和24年4月～昭和28年3月

現校長

吉田 宇一



橋本先生が昭和51年3月27日に亡くなられてから、はや4年の歳月が流れようとしています。「去る者は日々に疎し」とか申しますが、先生の高校経営に対する並々ならぬご尽力を今更の如く思い起している昨今であります。高校創立四十周年記念誌の発行に当り、先生の往時を偲んで私達の今後の指針としたいと思ひます。先生は昭和51年3月18日突然脳血栓で倒れられ、近親者の回復への祈りもむなしく意識の回復をみることなく3月27日朝、永眠されました。享年81才でありました。先生は「大正8年東洋商業高校英語講師をふりだしに、以後電機学園傘下の教員として、その生がいを教育ひとすじに貫き、教育者として、その情熱を傾注、温厚、実直な性格に加えて教職員並びに生徒への指導性も卓越したものがあつた、その精神と優れた性行は後進の教職員の範として今も受け継がれ、特に学内における生徒の教育のみならず家族ぐるみで教育に専念し、多くの卒業生から親しまれている姿は本人の立派な性行を実証するものです。このように生がいを学校教育に捧げ、戦前、戦後を通じて、学内外において尽した業績は大きい。また一方においては、私学における学生の就職指導が極めて重要であることを主張して、単に教室での講義に止らず、学生と親身になって接触を保ち、指導にあつた。これにより教師と学生の信頼を深め、教育効果を上げたばかり

氏名 橋本 健之助

生年月日 明治27年5月2日

ご遺族住所 練馬区貫井3-50-3

電話(ご自宅)(999)8501

でなく、学生の人間形成の上で多大な影響を与えた。

ついて学校経営に関しては、昭和21年11月電機第一工業学校校長に引き続き、24年4月からは、電機学園高校長として学園全体の経営に参画。永年の学園に対する功績により、39年3月学校法人東京電機大学参与つづいて40年3月には学資として遇せられ、今日に至っている。さらに、電機学園高校長の職にあつて、学園外においても産業教育のため活躍し、東京都高等学校進路指導協議会および私中高振興協会就職指導研究会の役員をつとめ、昭和47年3月まで同協議会の常任理事ならびに研究会長として進路指導のために力を尽された(功績調書より抜粋)

3月29日午後、練馬の御自宅にて、しめやかに葬儀が営まれ、多くの人々に見送られ、不帰の人となりました。その生涯を教育ひとすじに捧げられた先生に勲四等瑞宝章が国から贈られました。以上の記事は工学情報51年7月号に私が書いたものです。転載させていただきます。ただき先生を偲ぶ、よすがといたします。

電機学園高等学校校長

昭和28年4月～昭和31年1月

東京電機大学高等学校校長

昭和31年2月～昭和31年4月

今年、昭和54年は高校の創立40周年に当るといのは、高校の前身東京電機工業学校の設立(昭和14年4月)から数えてのことである。太平洋戦争中は生徒も教職員も様々な苦労を重ねて、終戦後の昭和23年4月に新制高校として発足した。私が橋本健之助前校長の後を承けて第3代の高校長に就任したのは昭和28年4月で、当時は電機学園高等学校と称した。31年5月、池谷武雄校長に後を頼まれた時に東京電機大学高等学校という現在の名称に変更された。私の在任当時は大学もまだ小さくて、学科は電気工学科と電気通信工学科の2学科に過ぎなかったので、高校の工業科4課程(電力・電気機器・電気通信・電気計測)と、普通科の構成に比べて規模はかなり小さかった。従って本館(第1・2・3・4号館)の多くの部屋を高校その他に占有され、大学は片隅に追われた形であった。31年10月に本館に5階が増築された後も4階以下を高校その他で占め、大学は5階の大学と呼ばれていた。私は短大学長を兼ねていたが、高校の方は校長の専用室もない状況で、現在と隔世の感がある。

秋の修学旅行を引率したことがある。大阪から関西汽船の別府航路に乗船した。其の年の夏、宇高連絡船の紫雲丸の衝突事故で乗客160名が海底の藻屑と消えた惨事があった。生徒達は遭難現場の海上に花束を投じて遺書を慰めたが、その優しい心根に感動した。それから屋島を訪ね源平の昔を偲んだ。帰りの船は会社で約束を破って、定員を遥かに越え



氏名 宇野 幸一  
生年月日 明治34年11月3日  
住所 〒152  
目黒区自由が丘2-7-23  
電話 (ご自宅) (717) 4911  
勤務先 学校法人東京電機大学顧問

る乗客を乗船させたため、高校生は客室に全部が入ることができず、強く抗議したが埒が明かす夜の甲板上煙突の蔭にぞこねする生徒も多く、私もその中に混って事故が起らない様に気を配った思い出もある。

普通科は大学の予備的性格で設けられ、本学高校出身者の優秀な者が大学の中核をなす様にとの望みを持っていたが、今日なおその目標が十分に達せられたとは云い難い。

私は昭和47年70才で大学教授を停年退職したが、その後も特別嘱託教授として週に2、3日出講していたが、今年3月末を以てそれも終了した。幸い健康もよいので、毎日庭いじりなどして、ごそごそ暮している。

永い間学園の工専、大学、短大、高校、電機の諸校にお世話になって過してきたことを感謝している。

東京電機大学高等学校校長

昭和35年4月～昭和41年3月



氏名 清水 明  
生年月日 明治43年6月27日  
住所 東京都杉並区上荻2の2の10  
電話(ご自宅) (03) (399) 3886  
勤務先 東京電機大学参与

現在の高等学校は、昭和十四年神田錦町の現五号館の地に電機学校を母体として東京電機大学の前身東京電機高等学校と同時に東京電機工業学校として誕生した。私は当時電機学校の授業をしていた。当時の実業学校電機科教員免許状を持っていたので新設された工業学校の専任に移り、初代校長波多諄三先生のもとに働くこととなった。当初電気科昼五十名、夜百名の定員に対して専任教員は十名不足であった。私は夜勤務が主で、週二日位朝から昼間部のお手伝いをしていた。専門教科の教員は私の外僅か二名しかいなかった。最初のうちは私も物理、数学を教えていたのである。私の仕事は授業の外、当時の鉄道省、通信省からの講師先生方の手配の外、電検三種の学校認定を受ける書類作成に忙殺された。時局は軍時色旺盛だけに学校も軍部からの圧力強く、軍事教練は強いられ、半ば陸海軍の予備校的色彩があり、開戦となるや戦時体制下の銃後の守りをかためる青少年の教育を支持する学校の使命は重大であった。昭和十七年には学徒動員がなされ、中等学校も軍需工場に動員されるようになった。工業学校生徒は専門的作業の工場にと警視庁の動員課からの工場名簿の中から適当と思われる工場の受入れ態勢を調べて、行き向きをきめるのである。戦争苛烈となると殆んど工場でも勉強は出来なくなり工具と変らない作業ぶりとなった。一方夜間部の生徒は、昼働いているので、夜学校での授業はできた。そのため昼は工場に夜学校に教鞭をとり、私も学校勤めは大変

だった。言い忘れたが当時は昼間部五年制、夜間部四年制であって電検三種の認定も第一回卒業生から受けられることになった。しかしこの制度は昭和二十五年で廃止となった。戦時中の思い出はつきないが、軍事教練、食糧問題、繰り上げ卒業、在校中予科練に行った生徒、戦死、病死、等々数えればきりが無い。私も終戦になる前年、召集を受けたのであるが、内地で電気初歩の教育担当兵であって割合楽な立場にあった。千葉県の中の山の中で敵機の来襲を調べる電波探知機操作をする兵の教育に当たっていた、お蔭で東京空襲の模様は電話で逐一知ることができ学校付近の被害を本部からの報告で知り学校を守って来た留守の先生方に感謝されずにはいられなかった。終戦と同時に帰り早速学校に出向いたところ、神田錦町の学校周辺は焼野原となり木造校舎は焼け、焼けこけた鉄筋校舎だけが残っている校舎を見たとき涙なくしてはいられなかった。昭和二十三年学制改革となり工業学校は高等学校となり、普通科、工業科と大発展して今日の姿となったのである。



東京電機大学高等学校校長

昭和41年4月～昭和46年4月

〈在職当時の思い出〉

私は朝礼等訓辞の原稿は十分検討して壇に起った。その原稿がファイル2冊になった。私は今でもこれを大学の道德教育の授業の参考に使っている。今そのファイルを見ながら思い出の若干を許される紙数範囲で書こう。

I. 教育理念と教育方針について

私の抱いた教育理念は次の3つであった。

- ア. 個人のもつ素質にある可能性を最大限に抽出し助長育成し、文化の創造力を養うこと
- イ. 民主的且つ平和的な社会や国家のメンバーとして役に立つ人を育成すること
- ウ. 自主的精神にみちて、世界の平和と人類の福祉に寄与する資質を養うこと

私はこの教育理念に基づいて教育方針として次の5つのことを旗印に日夜実行に努めた。

1. 正義を愛する強い意志
2. 真理を追求する高い知性
3. 自発的な人間尊重の精神
4. すこやかな心身の健康
5. 勤労と責任を重んずる誠実な人柄

II. 多数のよい部下に恵まれたこと

私は即直に話の出来る多くの部下を持ったことを心から喜んだ。例を挙げると校長就任の挨拶のとき「私に言いたい事は何をいってもよい。大いに歓迎する」といって校長室に帰った。早速A先生が来て「校長の教育方針はわかったが、本校では今迄礼儀を重くみたが、それと校長の教育方針とどう関係がありますか？」私は次の様に答へた「人間尊重の精神を形まで含めて表したとき礼儀とな



氏名 望月 直文  
生年月日 明治41年1月28日  
住所 〒166  
東京都杉並区阿佐谷北1-3  
1-37-1  
電話(ご自宅) (338) 4738  
勤務先 101 東京電機大学参与

るのですよ。」或時B先生が来て「私の月給が安い、人間を尊重してないのではないでしょうか？」私は答えた「もう少し高い次元で考えて下さい。収入は一定で、それをバランスよく分配するので、決して多くないかもしれませんがまあこれでがまんして下さいよ。」

III. 涙をのんで定時制の募集を停止した。

ベビーブームの引潮に当り高校の適令人口激減で私立高校の廃校も出て来た状況下、更に我国の経済状況により夜学生の激減に会い極めて残念ながら定時制の募集を停止した。

IV. 修学旅行で校友会支部長から喜ばれた

広島平和公園で種々の新聞社のインタビューに囲まれ、又テレビにも放送され校友会支部長松浦明孝さんから母校の発展の様子を見て非常にうれしかったとの手紙を頂いた。

V. 電大高校生之歌を作詞したこと

自分が電大高校生ならどんな夢をみて毎日を生きて行くかと考えて作詞した。持丸栄先生が作曲して下さいって生徒と共に歌った。こんなうれしい事はなかった。

東京電機大学高等学校校長

昭和46年5月～昭和49年3月



私は昭和46年、47年、48年の3年間電高の校長をおつとめました。

昭和54年には、創立40周年になることはわかっておりましたが歳月のたつのは早いものでそれが意外に早く現実の姿として本年6月2日に記念式典が盛大に挙行され、私もそれにお招きを受ける光栄に浴しました、まことに感無量のものがありました。

創業40年間に卒業されて実社会に旅立たれた方々、進んで電大その他に進学されて更に研鑽を積まれて社会人になられた方々の多数が立派に成人され、それぞれの分野において活躍しておられることは誠に嬉しい限りであります。

人生行路におきましてはよく「四十にして感わず」とか「不惑の年になった」とか申しますがその観点から学校としての電高も40才になられ、これまでに若干の紆余曲折はあったものの立派に成人されて都内において確固不拔の地歩を得られましたことは、まことに御同慶に堪えないところであります。

さて私が在職中、常に進歩改善に努力はした心算ですがいつも脳裡から離れなかった難問題は、電高から電大への進学者が他高出身者にくらべて留年率が高いという芳しくない事実でした。なんとかしてこの好ましからざる態勢を逆転させたいものと叱咤激励にこれ努めたのですが短年月ではなかなか奏効せず、困惑の中に明け暮れた3か年でありました。電高生で3か年の在学生活で仲よくなった間柄の者が電大に進学するはよいので

氏名 大原 儀作  
生年月日 明治37年4月7日  
住所 〒330  
大宮市土呂町362  
電話 (ご自宅) 0486-63-0773  
勤務先 東京電機大学工学部教授

すが、同級生になった他高出身者との知的活動での切磋琢磨が乏しく勉学に積極性が欠けていることなどが大きな原因ではなかったかと考えております。他高から受験して合格入学された人達を「他山の石」とするならば、選ばれて推薦入学の叶った電高出身者は「玉」であります。玉は他山の石で磨くことによりよい優れた資質を発揮できるのであります。電大も錦町にある工学部のほかに鳩山に理工学部が増設され、大学院も拡充されてゆくこととなり、人材の育成には間口も奥行も広くなった形です。恰も優れた電高出身者の進学を待っているかのようです。どうか電高出身の電大進学者が留年などと云う芳しくない事態に追いこめられることなく、電大学生全体のレベルの向上に役立つ模範的な存在となられ、天晴れな卒業生として実社会に巣立って行かれる様、日常の勉学に努力精進されますことを切望してやまない次第であります。

(54、8、31)

東京電機大学高等学校校長  
昭和49年4月～昭和53年3月

＜思い出二つ三つ＞

創立40周年記念式典は、本当にすばらしいものでした。大成功でした。委員の皆様方のご尽力のおかげです。有難うございました。厚くお礼を申し上げます。さて、当日の祝賀パーティーで前校長挨拶をせよとのことでしたので『本校の今日の発展は、この40年間に卒業された同窓会の皆様方、在校生を含めたご父母の方々、そして学校の三位一体の協力があつたればこそであります。今後さらに建学の精神に則って輝かしい伝統を築くには、一段と強い三位一体が大切でございますのでよろしく願い致します。』と申し上げました。それでは、思い出の二つ、三つ。

高校創立は、ご承知のとおり昭和14年4月。誕生の地は、神田錦町3丁目の第2校舎、現在の5号館の建っているところです。当時は大通りに面した鉄筋4階建と、その西および南側の木造2階建でした。木造校舎は、どういふわけか羽目板は桃色に塗られていました。

諸時万端厳格の時代。別にどうということはないのですが、木造校舎をニヤニヤしながら桃色校舎、鉄筋を灰色校舎と呼んだものです。初めての人は、奇異な感を持つようですが、この名物校舎も昭和20年2月25日の空襲で焼失してしまいました。

手前味噌で恐縮ですが、私が本学園に就職したのは昭和11年10月で、電機学校を卒業し助手見習としてでした。その頃には、学園の幹部の先生方の中で新設校について協議



氏名 池田市寿  
生年月日 大正6年8月11日  
住所 〒113  
東京都文京区本駒込2-11-6  
電話 03-942-0906  
勤務先 東京電機大学参与

されていたようです。昭和14年4月、いよいよ大学の前身の高等工業学校ならびに本校の前身の工業学校が同時に開校されたわけですが、誰が新設校へ行くかは、コンマ以下の私としても気になることでした。選抜にもれて悶々の数週間でした。突如、避けられない命令を受けました。召集令状だったのです。

1カ月の訓練を経て7月末には中国大陸へ渡り、中支に南支に幾度か砲火を潜り、生命を賭しての3年有余。多数の戦友を失いながらも、17年の暮には復員することができました。私は本当に幸運であったとともに、よい人生修業であったと思っています。しかし、若い世代の3年半は痛手でした。殆んど総てが当時のままで停滞している己の姿に驚き、不安と焦りと迷いに苦しみました。「初心にかえれ」と父に諭され、その頃私の目標であった電検二種に再び挑むことにしました。18年1月に学園に戻り8月の試験まで、周囲の方々のご理解とご援助をいただき、私はともかく懸命にガンバリました。幸運にも合格できたのです。省みて私の猛勉強の時代だっ

たようです。

時は流れて昭和46年春。望月直文先生は校長を、平野三郎先生は教頭の職を退任されることになりました。後任に、校長に大原儀作先生、教頭に不承私が命ぜられました。大原先生は本学園出身、東北大学名誉教授、結晶学の権威、勿体ないような立派な先生。一方、私は全くの浅学非才、学園の勤続は長い

ものの高校は初めての所属。校長と教頭が最新参、どちらかといえば天下り的な異動、覚悟はしていたものの攻撃目標は私の方にあつたようです。至らぬため大原先生に種々迷惑をおかけしましたが、その頃の話になると大原先生は「イヤー、随分苦労しましたね、アッ、ハッ、ハー」と。いまは懐しい思い出になりました。

..... 在 任 期 間 .....  
.....

波多諄三	東京電機工業学校校長 電機第一工業学校校長	昭和14年4月～19年3月 昭和19年4月～21年11月
具志堅実成	電機第二工業学校校長	昭和19年4月～21年4月
池谷武雄	電機第二工業学校校長 電機学園高等学校校長 東京電機大学高等学校校長	昭和21年4月～24年3月 昭和23年4月～24年3月 昭和31年5月～35年3月
橋本健之助	電機第一工業学校校長 電機学園高等学校校長	昭和21年11月～24年3月 昭和24年4月～28年3月
宇野辛一	電機学園高等学校校長 東京電機大学高等学校校長	昭和28年4月～31年1月 昭和31年2月～31年4月
清水明	東京電機大学高等学校校長	昭和35年4月～41年3月
望月直文	東京電機大学高等学校校長	昭和41年4月～46年4月
大原儀作	東京電機大学高等学校校長	昭和46年5月～49年3月
池田市寿	東京電機大学高等学校校長	昭和49年4月～53年3月
吉田宇一	東京電機大学高等学校校長	昭和53年4月～現在



# 歴代の先生

(アイウエオ順)

- ・氏 名
- ・生年月日
- ・住 所
- ・電 話
- ・勤 務 先
- ・一 言

☆ 寄稿していただけなかった先生方は氏名、住所のみとさせていただきます。

☆ 本原稿は昭和55年3月末日迄に寄せられたものです。



・青木成宗  
・大正12年1月5日生

・明星高等学校

皆様とお別れして早や25年も過ぎていました。この間の大発展をよろこぶと共に、今後の繁栄をお祈りいたします。

・青木正男



・飯島稔  
・昭和29年11月10日

・東京電機大学高校

人と同じことをしていたのでは人並以下であり、人の倍やって、はじめて人並みだという心構えでこれからも努力しようと思う。



・生熊勝彦  
・昭和28年2月11日

・東京電機大学高校

飲んで良き時代を語るより、飲んで事を忘れるより呑んで生きたい我未来。

・浅井進一

・池田益夫

・飯島茂



・石井和之

・東京電機大学高校

一刻も休むことなく続けられた教育活動。人は変われど、豊かな精神の営みが培われる場でありたい



・石川孝志  
・昭和7年4月25日

・東京電機大学高等学校

教職生活20数年になりますが、以前よりクラブ活動が盛んになり現在私も運動不足解消に自転車競技部で若返りを計って居ります。

・石塚実



・五十木基晴  
・昭和16年11月3日

・東京電機大学高校

卒業生の皆さんたまには、学校に来て下さい。  
ラグビー副顧問



・磯部昭二  
・昭和2年10月9日

・東京電機大学高等学校

[写真解説]38年赴任、数学。頭髪の垂し放しは2年前、老眼鏡は5年前、口を開けると上下とも入れ歯……これは今年から。

・板垣光夫



・伊藤克己  
・大正11年4月1日

・東京電機大学高校

学園歌の結び「心の家と、とこしえに我等は守る電機学園…」40周年のこの日ほどこの歌が実感を以て迫ったことはなかった。

・岩佐徹



・大江 康 男  
・大正12年1月22日生

・東京電機大学高等学校

当校ですでに30余年。相変らず好きなコースでストレスを解消しながら頑張っている。世の中、省エネ時代、諸兄の御活躍を祈る。

・大 橋 行 俊(旧俊三)



・大久保 芳 随  
・年令不詳

・東京電機大学高等学校

エンジニアとして活躍の諸君に、心の余裕を望みたいものです。故丹羽先生の「技術は人なり」の言葉の意味をよく考えている昨今です。



・大 田 健  
・昭和9年3月15日

・東京電機大学高等学校

昭和47年より7年間電機学校勤務をしていましたが本年より再び高等学校勤務になりましたので近くに来たおりにはお寄り下さい。



・大 湯 幸 夫  
・昭和15年4月4日

・東京電機大学高等学校

本学に務め15年、書道を始めて10年、製図室に来て5年が経ち、子供も大きく成長、自身"教学半"的精神で健康な毎日です。



・大 谷 稔  
・昭和19年1月23日

・東京電機大学高校

私は現在も中庭でテニスをしています。40周年事業としてテニスコートも整備され、尚一層張切っています。



・大 渡 正 治  
・大正1年11月27日

・東京電機大学

人間には社会生活しか無いのですから「人のお世話をするように人のお世話にならぬよう」を心懸けて暮らしたいと思っています。

・小 針 藤 男



・河 部 貞 夫  
・明治41年7月5日

細川三斎の書簡を見てその人の面目躍如たるのに打たれました「書は人なり」と云われますが三斎の書を見てその人格に深く感銘した。



・加 藤 栄 治  
・昭和11年12月5日

・電機学校

48年4月から電機学校に移り、学生と苦楽を共に頑張っています夜の勤めで卒業生とゆっくり話す機会が少く失礼しています。



・神 庭 明  
・大正14年3月9日

・東京電機大学高等学校

30年勤務して、教え子の子弟が入学してくるようになりました。休日には、庭の雑草に生命の不思議さ美しさをみて楽しんでます。



・河 内 正 夫  
・大正2年2月18日

・東京電機大学高等学校

昭和7年に勤めて以来47年。二工時代にプラスをつくった(別稿参照)今でも山に登り、山の花を撮って楽しんでいます。



・菊 地 諒  
・昭和7年5月8日

・東京電機大学高等学校

奉職以来はや20年月日の過つのは速いものです。目下電子科の教員として丁度我が息子と同じ年頃の生徒を相手に頑張っています。



・川 島 純 一  
・昭和4年3月29日

・東京電機大学電機学校

53年4月、高等学校から電機学校(夜間)に勤務が変わりましたが高校と同じ校舎ですし授業も持っていますので今後もよろしく。

・北 原 泰 彦



・木村晴彦  
・昭和29年8月18日

・東京電機大学高校

数学科に籍を置いて満三年、暗中模索のうちに時が過ぎて“気がついて見れば40年”という年月が過ぎぬ様失敗を恐れずに頑張っていきたい。

・倉持悦久



・小西吉孝  
・大正8年3月1日

教育関係は一切退職し60才から遊んで毎日暮すことにしている長女8才長男5才娘夫婦は名古屋在住健康に留意している毎日である。



・小峰龍男  
・昭和28年1月5日

・電大高校・機械科

40年の時が流れた。先人の業の大きさを感じきれずに戸惑う中で精一杯の時を継ぐ一日一年……時を継ぐ、温故知新の響き新た。

・工 一 夫



・佐藤吉称  
・大正3年2月12日

・東京電機大学高等学校

このごろ、教育ということの行詰まりを感じて、どうすれば、打開できるのか試練のような一つの壁に突き当たっています。

・小石英明

・佐藤正孝

・佐藤光昭



・斉藤成信  
・昭和14年3月1日

・東京電機大学高校

五尺九寸いたって健康と言いたいが、山で鍛えた体も多少ガタがきて、奇しくも40歳は学校の歳。今もって迷教師である。



・佐藤善慶  
・大正10年1月1日

・ギコー株式会社

40周年おめでとうございます。無性に物が造りたくなって20年近く勤めた学校から生産の場に戻り開発技術を担当しています。

・佐野雅利



・酒井勲  
・大正11年8月24日

・東北学院工学部機械工学科

20年2月第2校舎が空襲で焼落ち2階の教務室から火中の学籍簿を運び出したこと。夢我夢中でした。歴史の流転をかみしめています。



・佐川定之助  
・明治41年10月13日

・無職

記念式典に参列でき、その盛儀に感無量でした。電気工業の発展に貢献した多数の人材を生んだ輝かしい伝統は教職員の誇りです。



・斉藤広吉  
・昭和3年6月28日

・東京電機大学高等学校

「教育は忍耐なり」年ごとに新入生を迎え、そして果立っていく、この繰返しの中に、卒業生は、頑張っているかな。



・桜井倂二郎  
・昭和3年2月10日

・東京電機大学

宮城前広場や小石川の三角のグラウンドでフットボールをした頃の皆さん元気ですか小生も若い者に負けずまだ元気で頑張ってますよ。



・桜井 松治  
・大正12年2月15日

・東京電機大学電機学校

才能は海のように豊かで大きく心くばりは髪のごとく細やかで注意深くなければならぬ。

・篠村 己喜男



・白川 守昭  
・不詳

・東京電機大学高等学校

卒業生の皆さんお元気ですか。昔から「人のいく裏に道あり花の山」と言われていますが、まさに「人生到るところに青山あり」!!



・首藤 富家  
・大正5年10月14日

・錦電サービス株式会社

鳩山の理工学部で元気に仕事をしています環境がとても素晴らしいところです。是非皆さんの御来訪をお待ちします。



・下崎 和彦  
・昭和11年12月13日

・私立武蔵高校

過ぎ去った青春の思い出は、いつまでも美しいものです。



・杉野 良知  
・大正11年1月6日

・東京電機大学高等学校

創立40周年は学校にとって、1つの完成の記念すべき区切りであると考えます。卒業生の皆様のご活躍を喜んでおります。



・白井 光太郎  
・昭和3年1月1日

・東京電機大学電機学校

一升の米から一粒とって分らない。しかし取続けると何時しか減った事を認識する。努力による成果もこれと同じではあるまいか。

・杉本 賢太



・鈴木 治郎(旧手島)  
・昭和5年12月8日

・東京電機大学高等学校

本校に奉職して、30年余り。私自身変わったもの体力と酒量の減退。変らないもの気力と熱情。諸兄の弥栄を祈念いたします。



・鈴木 徳三  
・大正12年2月5日

・大妻女子大学図書館学研究室

高校から図書館に移った頃、よく卒業生が来てくれた“女の園”に移ったら途端に少なくなった。今の方がいい事?あるのだが。……



・鈴木 博  
・昭和11年1月18日

・東京電機大学高等学校

高等学校に配属になって6年余、今年4月から教務課に籍を置いて時間割の運営と電気工学の指導にあっております。

・関根 藤蔵



・田上 光治  
・昭和16年5月11日

・東京電機大学高等学校

40周年とのことですが、私自身も40の声の間近に聞えます。省りみて、しっかりせねば、良い授業をせねばと思っています。

・田崎 正

・田中 謙一郎



・田中 義明  
・大正14年4月20日

・東京電機大学高等学校

“自然は回転するが人間は前進する”このことばを知ってから社会の銘としています40年の歴史も多くの人の努力精進の賜とします。



・高木正夫  
・昭和10年10月20日

・新潟県立見附高等学校

電高40周年記念に参加し懐き先生方にお会いでき電高の発展をまさに母校以上の感激をもって帰越しました。



・角川一治  
・大正12年5月18日

・東京電機大学管財部

昭和46年高校から管財部に異動、現在にいたっています。埼玉県鳩山村に理工学部建設を担当し完成のよろこびにひたっています。



・高久広毅  
・昭和15年12月18日

・東京電機大学高等学校

小石川校舎の竣工と同時に勤務をはじめてこれまで卒業学年を5回担任しましたそれぞれにご活躍とますますの発展を期待します。



・角田秀夫

・

・



・高橋源八  
・大正6年5月8日

・東京電機大学高等学校

進路指導部で授業の外、就職担当をしています。卒業生の方も企業内での地位も上り、後輩の求人に来られるなど喜ばしいことです。



・津村栄一  
・昭和24年8月28日

・東京電機大学高等学校

勤務4年目、現在電気科の3年生の担任です。いつまでもいつでも、より多くの卒業生諸先輩が立ち寄れる母校誇れる母校が電高です。



・高村広昭  
・昭和17年2月10日

・東京電機大学高等学校

電高が「感わず」の年になったことを祝うとともに、自己批判の精神を忘れぬ体制としてもなれるように、努力したいと思います。



・寺尾功吉  
・大正10年2月11日

・東京電機大学電機学校

人間の年令で言えば「不惑」に達した訳です。現在の高校教育は曲り角に来ているが、感わずに私学の特徴ある教育をしてほしい。

・土肥健三

・



・中村圭佑  
・昭和12年5月31日

・東京電機大学高等学校

普通科2年の担当です。クラブは硬式テニス部顧問。設立4年目、今年も軽井沢で公式戦に備えて合宿をしました。皆頑張っています。

・中沢実

・

・中村充栄



・中島輝夫  
・大正12年8月4日

・東京電機大学高等学校

お蔭様で健在です。本校に昭和21年勤務以来33年経過します。ますます自重して、また老けこまず勉強して参りたいと思います。



・中村広幸  
・昭和3年5月22日

・東京電機大学高等学校

卒業生の皆さんお元気ですか。私は今も竹を放さず励んでおります。皆さんの在校中を想い起し、お便りをお待ちしています。



・中田勇  
・昭和6年9月25日生

・東京電機大学電機学校

高校をふり出しに、電機学校そして、法人本部の施設課、そして今年4月再び電機学校へと学校内をめぐっています。



・中村隆一  
・昭和13年12月18日

・東京電機大学高等学校

ユダヤ人の日常の挨拶にシャロームという言葉が使われています。平安がありますよという意味です。皆さんシャローム！





・中山 岩夫  
・明治38年1月8日

我が校だけしかできない独特なことを行うところに私学の意義がある。それを実行し続けた40年の歴史こそ貴いものである。



・早川 喜知  
・大正8年2月26日

・東京電機大学

お元気ですか。創立40周年私も年をとったなあと感じます。皆様のご健康とご成功をお祈りします。



・人見 芳行  
・昭和12年8月12日

・東京電機大学高等学校

今後ますます発展し古きよき学舎となるように、微力ながら努力してゆきたいと思っております。



・前嶋 万人  
・昭和17年3月30日

・東京電機大学高等学校

後輩の指導に当って早や15年になろうとしています。何年たっても1年目の気持を忘れないように、と思っています。



・野口 茂  
・大正10年6月9日

・東京電機大学電機学校

元気でやっていますが、簡単にオーバーホールのきかめ体ですから、アルコールと共に大切にしていきたいと思っています。



・林 幸男  
・昭和19年12月7日

・東京電機大学高等学校

相変わらず生徒とバレーボールの練習に明暮られています。最近では毎年関東大会に都代表として参加出来るようになってきました。



・平野 三郎  
・明治44年3月8日

・東京電機大学高等学校

教育の原点は、何といっても人間教育にあると思う。真の人間の道に立ってこそ、知識教育も技術教育も、その正しい意味をもつ。



・榎 将  
・昭和16年12月10日

・

クラス会参加（私の高校）太ったの瘦たの、たるんだの、薄くなったのいたが見間違えることなし20年ぶりであった。我も同じ。



・則友 克敏



・原口 喜八  
・大正13年4月30日

・時事通信社連絡局

皆さんお元気ですか。小生いまや往時を懐しむ55歳、元気です。電大高校の発展を切に祈ります。



・藤巻 有  
・昭和4年4月13日

・東京電機大学管財部建設課

私が高等学校にお世話になったのは、たしか昭和28～38年、中休みがあって43～45年、の間です。今は鳩山校地で山あるき中です。



・松岡 三夫  
・昭和10年6月3日生

・東京電機大学高等学校

袖触れ合うも他生の縁、と言い続けてきて15年経ちました。人が会うのは宿世のえにし、矢張り、大切にしたいものと思います。



・長谷川 裕一



・飛田 良雄  
・大正14年3月10日

・日本空調工業株式会社

創立40周年御喜び申し上げます。昭和26年4月より2年間御世話になりました。現在は空気調和設備の仕事に致して居ります。



・伏見 栄次郎  
・大正13年1月6日

・昭和52年1月25日逝去

盛大な創立40周年記念の御祝いの席にお招きにあずかり深く感謝いたします。今後益々学校が発展しますよう心からお祈りします。



・間辺 幸三郎

・

・



・真野 集  
・昭和28年4月5日

・東京電機大学高等学校

現在国語教員として3年目を迎えました。40年の年輪を刻んだ本高校に負けぬよう一生懸命奮闘する所存です。



・宮本 治  
・昭和24年8月24日

・東京電機大学高等学校

現在28才、青春真只中、たまには一献交え、青春を、夢を、そして人生を共に語り合おうではないか!!



・見崎 正行  
・昭和16年10月22日

・東京電機大学高等学校

俸職15年になり、自分の高校時代を思い出し迷うことが多いです。「迷わんより問え」という諺がありますがいろいろ教えて下さい。



・宮本 敏雄  
・大正2年8月22日

・関東学園大学

長い教員生活のうち、電高での15年は最も思い出の深い年月です。今後の量から質への御発展を切に期待しています。



・宮坂 亀雄  
・明治38年3月25日

・昭和54年9月27日逝去

花よ咲け、ふくいくと、電校の庭に。果よみのれ、さわに、とことわに。きらめき輝け星々よ、めぐはるかなる天空の彼方に。



・茂木 雅博  
・昭和16年12月24日

・東京電機大学高等学校

本校に奉職して早13年、相変わらず史跡を訪ねて休みになると歩いています。少しでも新しい史料を生徒に伝えられればと思います。



・宮崎 登  
・昭和10年1月2日

・東京電機大学高等学校

高校生にとって、教育環境は非常に大切だと思う。40周年を記念して、環境整備が行なわれたことは、今後の教育に意義あるものと思う。



・持丸 栄  
・大正13年11月27日

・東京電機大学高等学校

本校は将来共に栄光の学校と思われま。自粛自戒し益々の発展の為努力したい。



・山口 弘  
・昭和7年9月12日

・(有)奈良商店

御校益々の御発展お喜び申し上げます。私昭和25~31年迄物理化学実験室に居り、御校計測課程設立に籍を置いた。現在名古屋会社経営。



・山崎 与作  
・明治44年1月25日

・電機学校講師

25年前の卒業生が母校へ訪れたからと言って、立寄ってくれるのが一番うれしい良く出来た生徒出来の悪い生徒が一番思い出になる。



・横田 良次郎  
・大正8年3月18日

・中和倉薬局(自営)

退職後数十年、今は唯、ゆめ幻のかなたなりえにし結びし学園の人。最新作、著五欲菩提に遠き世の人に無量の慧光照らし給はれ



・山田 宏明  
・昭和10年12月14日

・東京電機大学高等学校

創立40周年、人間なら「不惑」の年基礎固めの後は力を合わせ大きく飛翔させようではありませんか。知節、耳順、従心、まで。



・横山 実  
・昭和5年4月15日

・東京電機大学高等学校

「誠」私はこの言葉が好きである。本当のこと。ありのままのこと。心と行動が一致していること。常に至純至清な心でないこと……。



・山路 雅一  
・昭和26年9月19日

・東京電機大学高等学校

教育とは、ひとり一人の子供のその子なりの成長を手助けするもの。あせらず、待つことの大切さを常に頭においてゆかねばと思う。



・吉田 孝俊  
・大正11年5月29日

・日経連(参事)

staple fiber製の国防色の制服。下駄ばき。風呂敷包み。薩摩芋の弁当。暖房もちろん無し。それでも生徒はよく勉強した。30年前の話。



・吉場章二  
・昭和29年6月26日

・東京電機大学高等学校

過去の歴史をみつめることは、その延長線上にある現在及び未来を考えるとときにのみ意義がある。40周年おめでとうございます。

・米山照英

・渡辺明



・渡辺太  
・昭和7年6月10日

・東京電機大学高等学校

人生は一期一会、短い一生の中でめぐり会う人々との間を大切にしたい。同じ一生ならおらかに楽しく長生きしたいものだと思う。

教職員・PTA・同窓会  
(随筆、思い出、歴史)

「先生の顔写真」について

記念誌発行の企画に際して、どんなものが喜ばれるだろうか、あるいは、現在学校に来る機会が少ないが、この記念事業に御協力いただいた方々に、どんなお礼ができるだろうか、と考えました。

父兄にとって先生とは……自分の分身のようなもの、そして卒業生にとっては……自分がいくつになっても仰ぎ見る父親のよう

なものです。

このような「つながりのある先生は、今……」ということで「近影写真」をのせることにし、更に欲張って戸籍調べのような事やら、メッセージをいただきました。

(紙数の関係で先生の範囲に一定の限度を設けてあります。)

## 〔教 職 員〕

### 「不死鳥の如く」

伊 藤 克 己

私をはじめ、電機学園にお伺いしたのは、昭和21年の6月で、前に長く電機学校におられた加藤光三先生のお世話で、引揚以来の念願だった教職に復帰できたわけである。従って私の知っている電大高校はその $\frac{3}{4}$ にすぎないし、又若輩であった私が、当時の幹部諸先生の骨を削るような御苦勞の内幕を知るよしもない。然しそれが文字通りの茨の路であったろうということは、我々から見ても充分推察に難くない。然しそれが日本の復興と共に次第に好転しさらに隆々発展を遂げた有様はさながら正に嵐に消えようとする火を苦辛を重ねてかき起し吹きおこしてやがてそれが次第に明るい一条の焰となり、やがては天に沖する紅蓮となって燃えさかる感を禁じ得ない。私が採用されたのは第一工業であったが、二学期の始めから第二工業に転属となった。当時の二工は池谷校長も正に壮年、職員は殆んど若い人ばかり、然も殆んどが技術系で何れも軍隊帰りの独身ばかりという状態で教務室はさながら梁山伯の観があった。然しあの時ほど心おきなく勝手な気焰をあげられたことはなく、あの飢餓線上にありながら一すじに教職の道を進むことが出来たのもひとえにこの時代の若い同僚の友情と若さのバイタリティに支えられたものであった。然し何分にも学校と軍隊しか知らない世間知らずの我々は、随分幹部諸先生にも御迷惑をかけたようで、今さら慚愧に耐えない。当時の最大問題は勿論食糧で、先年手放した小平で出来たサツマ芋を配給するというので勇んで出かけて満員

電車にもまれて帰って早速切って焼いて見るとこれがフルセ芋という養分は完全に吸取られた残滓で、まるで大根を焼く感じにがっかりしたことなども今は懐かしい思出である。弱り目にたゞり目というか当時はやたらにアメリカ女性の名をもつた台風がおしかけたような気がする。電源が地下にあったため濁流がどンドン浸入して来るのを泊りこみでひざまで水に浸して急ごしらえの土のうを積んで辛うじて喰い止めたが、翌日水のかい出しにたゞり一日はかかったと思う。然し次第に明るい希望が出はじめ確か22年の秋、学園創立記念祭が早稲田の大隈講堂をかりて行なわれ大運動会も同校のグラウンドで行われた記憶がある。丁度この時分に堀内敬三氏の作曲で学園歌が作られた。当時の学園は全体の連帯意識が強く、たとえば錦祭は当時の工専の自治会々長（大きな人でランニングが速く、ヒゲが印象的だった）を委員長にして、工専、工業、電機が一体となって行はれ、展示物が間に合はないで徹夜した我々が廊下で幕にくるまって仮眠をしていると委員長がコッペパンを配ってくれたりしたことを思い出す。今でも私は学園歌三番の 大地のきわみ雲のはて、京をたずねて行くとても、誓は固き幾万の、心の家ととこしえに、我等は護る電機学園の一節は胸が熱くなるように感じられる。時の流れはすべてを浮化し、老人の懐古趣味と片づけられるかも知れないこういう考え方が今の様な大きい組織の運行に適合しない点も多いと思うが、往時をしのぶ一片のよすがにもなればと思ひ出すまゝに書きとめた次第です。

（教頭・機械）

### 「生活と健康」

五十木 基晴

人生の生活は、何といても衣食住がその根本である。この三つは簡単なようで、なかなかむずかしい、ともすればぜいたくになりまた貧困でこれに困る場合もある。そしてこれらを満足に行えるものでなければ社会の交際もスムーズに行かない場合がある。いかに衣食住が足りても、健康に恵まれなくてはならず、そこで健全なる心身で健全なる生活を続けることが人生の理想であり、これを実現させるには、これに対して自制し、ある程度の身に応じた生活と、常に身体の健康に注意することである。人は衣服の悪用により風邪をひいたり、病気のもとを培い、飲食物によって病を得ることをよく聞く、健康なくして、豪家な家に住んでいても何の価値もない、四十周年を機に秩序ある正しい生活をするよう心掛けて下さい。「健全なる精神は健全なる身体にやどる」である。

（体育）

### 「私の履歴書」

大江 康男

高校の四十周年、卒業生諸兄とともに、今後の益々の発展を期して努力したい。小生、高校に御世話になってすでに32年余り、過ぎてみれば早いものでとても30余年とは思えない。記念特集号に何か書け！という命令。文才のない小生何を書いてよいか困り果てていたが、何とかなるだろうということで重い腰をあげることにした。高校ではいろいろな教科を担当させてもらった。数学、物理、自動制御のための物理（教科書なし、生徒はノートさせられてブーブー（？））、自動制御の基礎、機械応用力学などである。一時だか化

学を担当したこともある。おかげ様でつねに勉強に追いかけられながら今日に至っている。そのためもあってかなおのこと30余年とは思えない、現在は数学だけを担当している。授業で記憶に残ることはある卒業生の「数学で微積分を学んだとき、よくわからなかったが、先生の話でその意味がわかりました」との言葉である。応用ということの重要性を教えられた言葉である。四十周年で気のついたことは、小生が声楽を習い始めてからやはり40年ということである。奥田良三先生他の講習会に参加し、夜学をサボりながらこの道に入ったのが、いまでも週一回下手の横好きでコーラスを楽しんでいる。11月には故野口雨情先生をしのぶ会の集まりに、来年2月には山形への演奏旅行が予定されている。酒の呑めない小生、コーラスでストレスを解消しながら頑張っている。世の中、省エネの時代、卒業生諸兄の御健斗を祈る。

（元普通科長・理科・数学）

### 「卒業生のA君へ」

大久保 芳随

お手紙有難う。会社の命運を担って、中堅層の社員を如何に「やる気」を起させるかに腐心して居られる様子。貴君の努力の成果を大いに楽しみにしています。

学校の事、それ程までに気遣って下さって有難う。出身校の発展を願わない卒業生はいないのは当然です。貴君のたつてのお求めに応じて、その後の高校の模様をお伝えしよう。小生も在職26年が過ぎました。あの頃は「電機学園」の名称が高等学校の前にくっついていました。こんな事は、あの頃の貴君等には、どうでもよかった事で関心はなかったでしょう。それもその筈、普通科には電大推薦入学という制度もなく、がむしゃらに受験勉強に

寝食を忘れていたのですから無理もありません。

あれから普通科は五クラスにも、ふくれ上りました。クラスが多くなったからと言って喜んでばかりは居れません。内容的には、世間に誇れるようなものは、残念ながら何一つありません。貴君らの在校当時のクラスが、そのまま肥った状態ではないのです。

文部省の指導要録を、あの当時のものと比較してみればお分りの様に、スローラナーに標準を移して、および腰で教育の機会均等を「合言葉」にしているのです。ですから全体的に、学ぶ楽しさに徹し、エッセンシャルなものを、何んとか「わがもの」、にしようとする姿勢を避けて通って行く様に見えます。これが貴君等のいた頃のクラスの雰囲気とは違ったものになっているのだと思います。

われわれの高校は、私学ですので、同じ様な現象が公立高校の一部でも見られるからと言って、あぐらをかいているわけには行きません。既に、貴君等が在校中にも、職員の中には将来を考えるグループがあったのです。

詳しいデータを示して、思い切ったロング、レンジ、プランを発表したのですが、悉く無視されてしまいました。今日の状態を避けたいと念願された中心的指導者の、先見の明に今更ながら感服致しました。

その後、これと似た様な事がありました。何を言っても無駄、のれんに頭押し、やる瀬ない空気が流れ、職員の間には沈滞ムードがよどみ始め疑心暗鬼の雰囲気ではどうしょうもありませんでした。伝統の上に居座っているだけで、安泰だとする時代はとうに過ぎてしまっているのです。

26年間在職中貴君等をハッとさせる発展のチャンスが、いくらかあったのです。その機械を無為に過ぎてしまったのが悔まれてなり

ません。

今、高校は如何にして生き残るかの問題を抱えて、瀬戸際に立たされているのが実状です。

これまでのライバルだった大学、高校が、勇しく前進している姿を見て、わが法人全体も重い腰を上げようとしているのです。

高校も吉田校長を先頭にして、新しい理想を掲げその実現に着々と努力を続けています。この吉田内閣時代に、高校のあるべき姿を考えないと、もうチャンスは失われてしまう様な気がしてなりません。

幸い校長は、有能で、高校での在職も長く、行動力のある学園内でも貴重な人材なので、吾々の夢は実現の方向に、一步一步近づいて行くものと確信します。

26年以上もの間の事情や、学内に縋らす複雑な人間模様を描いては際限がありません。夜も大分更けて来ました。今日のころはこの辺で勘弁して下さい。

私立学校も一つの企業なので、会社でのいろいろな経験から、貴君にも何らかのご意見があるものと想います。貴君の愛校心に甘えて、ご意見をじっくり聴き度いものです。

小石川校舎の校庭も若干拡張され、立派になりました。近くに來られたら、気軽に寄り下さい。(前普通科長・英語)

## 「OBの皆様へ」

大谷 稔

電大校も40周年を迎えたそうですが、私もほんの12年一諸に歩みました。卒業生の皆さんが「先生いまでもテニスをしているのですか。」とか「後輩をしばって下さい」等と私を激励してくれる度に、頑張らねばと思うのです。やはり教師生活の中に卒業生との結びつきというものが大きくしめていると感じら

れます。逆に皆さんも自分は電高卒であることを胸を張って仕事に勉強に打ち込んでもらいたいものです。この紙面をお借りして私も現在数学に、テニスに頑張ってやっていますことをお伝えいたします。

(数学)

## 「クラブ活動の思い出」

加藤 栄治

37年春、横田先生から卓球部の顧問を引き継ぎました。卓球はもとよりスポーツには、まったく縁の無かった私でしたが、全日制と定時制の両方をみることになったしだいで、部員達のクラブ作りは意欲的で、昼夜の区別なく合同合宿を行ったり、本当に良くやってくれました。中でも思い出に残ることは39年から定時制高校の地区大会、東京中央大会など本校体育館で何回も開催したことです。これは全日制部員の全面的協力があって、なし得たもので部員達にとって、私にとって、とても貴重な体験でした。

(電気・電機学校助教授)

## 「ブラスバンドを創った頃」

河内 正夫

電高ブラスは今日たいへん隆盛で、人数もレパートリーも広い。これは指導の持丸先生やバックアップするOBのおかげだと思う。このブラスも創設の頃は淋しいものであった。それは31年前の昭和23年頃にさかのぼる。その頃、学園には電高の前身の第一、第二の2つの工業学校があり戦時中は軍事教練の課目とともに軍隊ラップの練習があった。これは音階のド、ミ、ソの三つしか出ない。昭和20年終戦となり不用になったラップがまだ校内にころがっていて生徒がいたずらに鳴らすこともあった。その連中が吹奏楽器が欲しい

といい出した。世の中ももっと平和になりアメリカから軽音楽がはやり出し、他校でもブラスバンドがチラホラでき始めていたから無理もなかった。その熱意に私の心も動いた。しかし、まだ世の中は食糧と衣料に追われている頃で、楽器などの生産にも手が回らない。第一学校の財政にも余裕がない。それでPTAの役員に保谷の農協の関係者がいて耳よりなニュースを伝えてくれた。東京から疎開してきた人が戦前ブラスの指揮者で楽器一とそろいを持っていて手放してもよいというので、早速出向いてひとそろい1万5千円で話がまとまった。一校では出しきれないので第一工業学校にも相談し共同購入ということになった。みんなで農家はなれに取りに行き喜び勇んでブラス気取りで持ち帰ったものである。つぎは指揮者の問題だ。人件費などは出ない。それで物理の大江康男先生は以前コーラスの心得があるのでぜひにと無理にお願いをし、先生も初めてだし、多分クラリネットか何かで自分もあやしげな音を出しながら屋上で指揮をとって練習をしていた。人数も十人前後しかしみんな熱心で空腹ガマンで遅くまで頑張っていた。やがて両校は合体して現在の新制高校へ移行した。ブラスも楽器が盗難に合ったり、部員の消長があり、時を経て今日の隆盛を迎えたわけである。何事も創設の頃は苦勞が多い。技術面では現在が数段上位だ。部員の諸君も先人の苦勞を忘れず努力してください。

(元東京電機第二工業学校教務課長・電子)

## 「電高七不思議の一つ？」

川島 純一

何事によらず時を経てくると、伝説や、いわゆる七不思議などが生れてくるものです。電機大学高等学校も創立以来40年を経過しま

したが、校舎は新築してからまだ15年程しかたっておらず、はたして電高七不思議なるものがあるのかどうか定かではありません。

数年前まで地階の廊下の隅から水がこんこんとわき出したり、地下の計測実験室で、ガス栓をひねったら水が出てきたりしたことは、七不思議の候補にあげられそうですが、校舎の整備がゆきとどいたせいか、現在ではそのようなことはなくなってしまいました。

ところで鳴き竜というのをご存じのことと思います。手を打つと竜の鳴き声が聞こえるというもので、日光の東照宮が有名ですが、これに似たものは他にもあるようで、例えば東京日野市の高幡不動には、「なり竜」とかいうものがあるそうです。しかし、この鳴き竜が高校の校舎内で聞かれるところがあるのをご存じの方は少いのではないのでしょうか。

鳴き竜はかしわ手の音が、天井と床の間で反響して、竜の鳴き声のように聞こえるのだそうで、天井と床の間隔とか広さとか平行性、あるいは材質などに関係があるようです。高校の校舎の廊下は、ご存じのように左右の壁が平行して続いておりますので、もしやと思って、あちこちとためしてみましたところ、2階電子科前の廊下で聞こえることがわかりました。残念ながら日光の鳴き竜はまだ聞いたことがありませんので、比較はできませんが、本校のもかなりはっきりと聞こえます。これで左右の壁に竜の絵でも画いてあればなお結構というところですが。ただ最近この廊下にロッカーなどが置かれたため、鳴き竜の聞ける場所が狭くなってしまいました。これからは、これ以上この廊下には何も置かないで欲しいと思います。

(前工業科長・電子・電機学校電機、電子科長)

## 「暖房ことはじめ」

神庭 明

昭和20年代、それは何もない頃でした。学校では冬になっても、勿論暖房などありません。生徒達はオーバーを着たまま授業を受けていたと思います。そのうち事情もだんだん良くなって、一日中座っている事務の人達には「足温器」なるものが支給されたりしました。

石炭ストーブが入ったのは何時の頃だったか、さだかには覚えていませんが、とにかく嬉しかったことは忘れられません。煙突工事がはじまってくると、ワクワクして「今年から暖くなるだろうな」と満ちた気持になったものです。教室によっては教段の上を黒板と平行に煙突が渡たされていましたが、少々無細工だと思ふ位で余り気にもなりません。煙突があるだけで暖さを感じるのですから……。

いよいよ寒くなって石炭が焚かれると、考えてもみなかった事実が悩まされました。教段の上に煙突が横たわっている教室では、何分煙突が熱くなっているので、輻射熱は満ちなく教段に降りそそぐ訳です。その教段の上で、熱源のすぐ下で話しをしていると、頭の Teppen が熱くなってきて、だんだん顔はほてってくるし、頭はガンガンするしきながら焦熱地獄に入った思いをしたものです。教段と黒板に執着する限り避けようはありません。

後年、科学同好会の生徒達がプラナリヤを飼っているのをみた事があります。光をきらうプラナリヤは、水槽の中を逃げまわりますが、器壁を這い上っても、水面裏側を逆さになって這って行き、結局器壁へと付いて堂々巡りをしているだけで、大そう哀れな奴

だと思いました。考えてみると、煙突下のわれわれもプラナリヤと同じだった訳です。教段の上を、行きつ戻りつしながら、予約されている闇魔の庁での試練の予習だから我慢我慢と思ったりして、大変な1時間に耐えたものです。今は、招いてもかえらない懐しい想出です。

(教務課長・理科)

## 「私の奉職時代」

菊地 諒

昭和32年、私が電機学園高等学校に奉職した当時は、神田錦町の現在本館と呼ばれているいちばん古い建物ひとつを、大学、高校、電機学校の三校で共用していました。確か高校は三、四階を専有していたのではなかったかと思ひます。間口の広い教室もあり、奥行の長い教室あり教材、器具にしてもいまのように便利なものはない、そのなかから送り出した古い卒業生がいまではいちばん懐かしく、個々の人の名前を全部ここへ書き上げたいような思いに駆られます。それぞれの分野で活躍されておられる皆さん、いつまでも元気で頑張ってください。

(電子科主任・電子)

## 「なつかしい思い出」

小島 節子

四十周年、今更のように月日の流れをなつかしく思い出しております。昭和二十六年、橋本健之助先生のお嬢さんと友人であった所から学校にお世話になるようになりました。桜咲きはじめる三月青春の血をもやしてちょっと張り緊張と期待をもって学校の門をくぐった事が昨日の事のように思い出されます。あれから幾星霜、私も早や中年卒業生もたくさん送り出し、四月になれば、かわいらしい一

年生を迎えて又若があっております。仕事も年々複雑になり世の中も騒がしく、人情はとみに薄れてみにくい浮世になっても学校とは卒業生にも職員にもなつかしい所です、いつの日か私も五十周年、六十周年のお祝いの時笑顔でまねかれる人になるよう今日を生きて行きたいと願っております。

(事務)

## 「神田錦町時代の思い出」

斎藤 広吉

高校が小石川校舎に移ったのは昭和39年で、今から15年前になる。小石川校舎に移る前の神田校舎時代について思いのままのことを話そう。

当時代は大学と同居で、正に、学園としてまとまっていた。当時、小生は地下の強電実験室に籍が有ったが、強電実験(現在の電気科実験室に似た実験室)関係は総べて、この実験室で一括して行なわれていたから、電機学校も高等学校も、大学も実験の内容以外は区別がなかった。だから、朝から晩まで毎日のように実験ばかりやっていた。つまり、実験室に籍が有っても、特に決められた学校には所属していなかったから、今で言う無所属であったことになる。

後に、高校に所属するようになったのは昭和33年頃で、小生が結婚した年にあたる。この年に、初めて、電気機器課程の組主任を持たされた。当時は、昼休みの時間は外出自由であったから、神田の本屋街や、歩道に並んだ露天商なども見て歩くことの出来た時代でもあった。勿論、喫茶店や、パチンコ店等の出入禁止の規制はあったが、外出自由だからといって別に問題を起すような生徒もいなかったように記憶している。

吾々も、時折、神田の本屋街を中心に校外

補導のようなことをやっていた。外出自由ということは返って生徒にとっては自分自身の責任行動を持たなければならぬという自覚がささえになっていたのかも知れない。しかし、一部には、規制をやぶった生徒もいたが、新聞ざたになるようなことはなかった。その点現在の生徒は自由外出は出来ず、気の毒のような気もするが、現在の小石川という場所から考えれば、あまり意味がないのかも知れません。

将来に向かって環境良き自由な学校にしたいものである。

(工業科長・電気)

### 「修学旅行の思い出」

桜井 松治

1ヶ年ぐらい前までの高校生は学校の思いでは何かというと、学校行事を筆頭に挙げる。特に修学旅行は最たるものであると。振り返ってみるといろいろのことが思い出される。

小石川校舎に移ってきてまもなくの修学旅行での出来ごとを記す。

そのときのコース(工業科)は1日目広島市内見学宮島泊、2日目高浜から松山、高知見学、高知市内泊、3日目龍河堂、大歩危、小歩危、栗林公園見学、屋島泊、4日目奈良京都市内見学、京都泊の4泊5日の行程で実施された。

屋島泊のこと、22時点呼時各部屋に一人一人確認し廻る。ある班で一人いない。どこへ行ったのだと聞くとトイレに行きましたとのこと。それでは帰ってきたら教官室に来るように指示し、他の班の点呼を終り明日の打合わせ等をして二度目の見廻りに出る。その班に行くと本人がいない。班長に尋ねると先ほど帰って来たが又出掛けたとのこと、先生心配しなくとも大丈夫ですよ。必ず帰っ

て来ます。安心して下さい。それではと、こちらも班長のいうことを信じ寝ることにした。

翌朝、食事に行くと本人がいるので昨夜はどこへ行ったのだとたずねると、友達の手前はっきりしたことを言わない。教官室につれて来て聞いて見ると、おどろくなかれ屋島のうら山で毛布にくるまり一夜を過ごしたとのこと、それでは高知ではどこへ寝たのかということ、屋上のペントハウスに、宮島では布団部屋に寝ました。何故皆と一緒に寝ないでそのような所で寝るか? 皆と一緒に寝るといざ知られるから、また変わった所に寝る方がスリルがあっておもしろいからとのこと。まったく変わったものもあるのだとおどろきあきれもしたが、事故がなくてほっとしたしだいである。

(元教務、生徒課長・電子・電機学校教頭)

### 「古いピアノ」

佐藤 吉弥

生徒の練習用に、芸術教室に置いてあった古いピアノを、今年の春に、とうとう廃棄した。鍵盤がぼろぼろに壊れてしまって、どうにもならなくなっていた。神田の校舎の実演室に置いてあったもので、大学の五号館の体育館が出来る前は、そのピアノの伴奏で卒業式の歌をうたっていた。小石川の校舎に移って、新しいピアノを備えつけたが、古いピアノも、片隅に置いて生徒に使わせていた。ある日、古いピアノは、業者の手で、ダンボールのようにたたみこまれてこわされているのを目にした。移転の時、何脚かの机も運んだような記憶があるが、いまはそれもない。机と椅子が一つになっている、二人用のせまい机で手あかがしみこんでいて、それはそれで、何かを語りかけていた。古い卒業生は、自宅には訪ねてくるが、新しい校舎には、なかな

か訪ねて来ようとしな。四十年をさかいにして、一つの断層のようなものがあるかもしれない。よその学校のように、ポプラの並木があるわけではなく、時計台があるわけでもない。校舎はすっかり新しくきれいになった。古い卒業生たちは、何に対して愛着を持つのだろう。そんなことを思うたびに、二人用のせまい、ほこりっぽい木の机を残して置けばよかったと考えることがある。しかしそれは私だけの感傷で、新しい卒業生とても古いピアノに対するように、実習室や体育館に愛着を持っているとはかぎらないかも知れない。とすると、やはり心のかよいあうものは、教えを受けた先生方が、私学であることゆえに、今でもたくさん居られるということであろう。これこそかけがえのないことだ。

(元生徒課長・国語)

### 「若き日を惜しみなく」

佐藤 喜美子

高校創立四十周年、この道一筋にはげんでこられた教職員の方々に心から敬意を表します。振り返れば私もこの道三十数年、青春の大半は中国の内戦に参加させられました。茜さす空が地平線とけむる大草原を北から南へ何千里、蒙古黄塵の中を馳せて長沙まで転戦して歩きました。漢口に駐屯中は、洋々たる揚子江のほとりを若い戦士と共に早朝かけ足して鍛えたものです。幾年月を野起え、山越え、果しなく命をかけてかけめぐる若き日を思い出します。学校では各クラブの生徒が放課後の校庭で汗にまみれ、それぞれのスポーツに躍動しています。いつの世にも若いということはかけがえのない宝物だと、つくづく思います。しかしこの若いひとときも只一度だけしかありません。人生の原点にたつて、心の迷いや、不安、押し寄せる劣等感等の自

己との葛藤の中で成長している若者達、医務室に安らぎを求めて集る生徒たち、若い時にしか出来ないことが沢山あります。年を重ねて今、私が思う事は、あれもこれも、若いうちにやりたかったという心残りです。新しい時代に生きて、新たな希望にもえて旅立ってゆく君達、自分の個性、適性をよく考え、それぞれに持っている可能性を伸ばし、失敗しても立上る勇気と、自信を持って最良の道を開いてゆくことです。ところが、もうこゝまででいゝやと低い次元の自分に妥協してしまったり、考えてはみたけれど、いざとなるとやめてしまうのが常です。「生きがい」とは努力です。与えられたレールの上にどっかりとのっているだけではだめです。目に見えぬ壁にいどんで苦闘し、打勝つことです。「何事もやれば出来る」の信念の下に、あらゆる事に挑戦してゆけば必ず道は開けてゆくものです。人は苦しみを乗り越えるたびに大きく育ち、予期しなかった別の自分を見出します。それが人生の味であり、今まで歩いてきた道で様々な事と出合って知り得た私の実感でもあります。二度とこない若き日を惜しみなく、たくましくはばたいて、炎の如き青春をむだに過すことなかれと、願って止みません。

(医務室)

### 「初心」

白井 光太郎

幼き頃、誰しも箸の持ち方から靴の履き方まで、いろいろの事を時に厳しく、時に優しく教えられたことと思う。その頃はそれを素直に聞き、また自分でも考えて次第に成長して来た。それが何時の間にか他人の言葉を疎かにするようになり、われ成長せりと思うからだろうか。

どんなに成長しても、他人の云う事に耳を

傾ける心を失ったなら、それはもう自分を失うことにもなりかねない。初心に帰るとは、幼い日、人に教えられ人に導かれていたあの頃の、あの素直な心を取り戻すことではあるまいか。

(電子・電機学校教授)

### 「創立40周年に思う」

杉野良知

私は学校の評価は卒業生の評価と表裏一体をなすものであろうと常々考えております。私が本校に奉職させていただいたのは終戦後間もない昭和21年でしたから、当時は、初期の卒業生の方でも20才台の半ば過ぎの年齢であったわけですが、今では年齢幅が10才台から50才台あるいは60才台になり、各職場で活躍されておられるわけです。ですから、社会の働く人々の年齢構成と卒業生の年齢構成とが一致するようになり、社会に対する貢献度も次第に大きくなっていると云えます。この意味で、創立40周年のもつ意義は重いといえます。今年も間もなく、明治40年9月11日電機学校開校を記念する法人創立記念日を迎えますが、高校も独自に開校記念日を設け、この日は教職員、在校生、卒業生、父母の皆さんが一堂に会してお祝いをしたり楽しいのではないかと考えたりしています。昭和14年4月19日に東京電機工業第一回入学式が行われたわけですから、この日を記念日とすればよいと思います。どんなものでしょうか。学園には電機学校、高校、大学の3つの学校があってお互いに助けあって発展してきたわけで、このことは高校にとって大変ありがたいことではあります。反面、独立の精神が薄れやすい弊害もないではないと思います。開校記念日を期して独立の精神を奮い起こすことも大切ではないでしょうか。6月2日の記念式

典には多数の関係者が参集され、遠い四国や東北の地からも旧教職員の方々がお見えになり、懐かしいお顔に接することができたことは大変幸せなことであったと思っています。

(普通科長・数学)

### 「一生徒の思い出」

鈴木治郎

30年近くになる教員生活は、出会いと別れの繰り返してありました。笑顔の出会い、涙の別れ、その笑顔、涙にも種々あり、苦々しい笑い、悲しい涙、うれしい涙もありました。この30年間数多くの忘れ得ぬ思い出から、その一つを振りかえってみました。

昭和33年頃のことだったと思います。私が担任していたクラスにA君という小柄で元気の生徒がいました。彼はいつも素行のよくないといわれていた数名のクラスメートの尻にくっついて行動していましたが、これといって悪いことをするではないのです。明るく性格だったので、皆に好かれ、誘われると断りきれない生徒だったのです。その生徒が1年生の秋だったと思いますが、数名の連中と他校生とのけんかに連座するという事件がありました。学校では当然よく調べて、それ相応の指導をすることとなりました。例にもれずA君はこの時、その場に一緒に居合せたのです。前記数名のものは退学、彼は停学処分となりました。もともと余り勉強が好きでなかったのでしょうか、その学年の終りには成績も落ち、進級もむずかしい状態となりました。ここに至る迄には再三にわたり学校生活面や学力向上について父兄との面談が行なわれたことは勿論でした。私もA君が余り電気関係に興味がないようでしたので、他校の普通科への転校を進める指導を本人並びに父兄と何回となく相談しました。父兄は「折角お

世話になった学校だから、1年遅れてもこのまま続けさせてもらいたい」との再三の懇願でしたが、A君の「現在までの勉学態度」と「将来への本人の進路希望」とを勘案して、(A君が心機一転やり直したいという意志が強かったので)結局父兄も納得して他校へ移ることになりました。もともと陽気な性格であったのでそう決まれば、爽やかな表情で親子ともども、感謝しつつ本校を去って行きました。(その時S高を紹介幹旋いたしました)数日してS高への編入が決ったことを両親が来校され、謝意を述べられたときは、私には複雑な気持ちが去来しましたが、「本人も新たな気持ちで一生懸命頑張るといっておりますので今後とも御指導をいただきたい」といわれたとき、やっと気持ちがほぐれるのを感じました。

数年が流れて、時には「A君は今頃どうしているかなあ?」と想い出すこともありましたが、日々の忙しさに追われて、A君のことを忘れかけていました。ところがある冬の日、朝のラッシュアワーに、赤羽駅で「先生お元氣ですか」と駅員の帽子をかぶったA君が昔と変わらない笑顔で来客の尻押しをしおわったフォームに立っているではないですか。別れて数年過っています。国鉄に就職でもしたのかと思って尋ねたところ、「いゝえお陰様でS校に転校後、頑張り、都内のC大学の法学部へ進み、就職も決って来春卒業の予定です。大学最後の冬休みを、社会勉強を兼ねてのアルバイトです。本当に先生のおかげで自分に合った道に進めてよかったです。ありがとうございます」と。「本当によかった」と一言。私にもそれ以上の言葉はありませんでした。再会を約して、あわただしく別れました。結局彼の再会はありませんでしたが、明けて5月頃、一通の手紙をもらいました。それには感謝の意と、社会人としての決意が

克明に記されていました。A君は本校の中退者ではあるが、私には卒業生の一人であるように思えるし、また今後も、そのように対応していきたいと念じております。

(生徒課長・電気)

### 「健康に自信を」

鈴木博

卒業生のみなさん健康体の持主になろう。ある会議の席上「最近の生徒達は体力的に無理がきかなくなったように見受けられる。」と言ふことが話題になった。人間生来持っている能力がどんなに立派であり、意欲があっても健康でなければその活躍は長続きしないことは周知の通りで、病気、けが等で長く職場を休むことは周囲の人々に迷惑をかけるだけでなく企業全体の利益に反することになる。規律ある生活を通して身体をきたえ健康に自信を持てるよう心がけて貰いたい。

(電気)

### 「三十五年の思い出」

高橋源八

一工へ、昭和十九年四月、私はニューギニア戦線より浜松へ帰還、兵役解除、今までの電機学校より高校の前身、ちょうど校名が改まった電機第一工業学校勤務となった。五月頃より数ヶ月はマラリアの発作に襲われ、勤務中に悪感帰宅までにはもう発熱、帰宅後布団をかぶって震えたことたびたび。工場動員三、四、五年の上級生は工場へ、そこで軍用機器の製作に、月に数回工場で授業、また学校へも来て仕事と勉学に励んでいた。十九年の終りから二十年にかけては空襲が烈しくなり工場では倉庫がやけ、大事な材料と米がこげた。そのため毎日の楽しみは半焼け米が暫らく続いた。婦子の足都電も空襲で立往生、帰宅も暗くなってから。学校近くの生



徒諸君は夜間、早朝の空襲にはいち早くかけつけ、火を吹いている焼夷弾を片付けて学校を守った。登校しても警報下は地下室へ避難、東部軍情報に耳を傾けていた。終戦直後、直ちに授業開始、仙花紙でGHQの検閲を受けた薄っぺらな、お粗末な教科書で昼まで、弁当の多くはサツマ芋、放課後はお徒町付近まででかけ焼け跡整理、防空壕から醤油樽などの食料品が発見されたときは歓声があがった。都の世話の食糧作り、荒川、江戸川の河川敷で芋と小麦の収穫を待った。ところが九月台風の襲来、皆でかけて刻々増水のなか足を使って丹精こめて育てた芋を探しあてた。欠席が目立って増える。翌日理由を聞くとリュックを背負って田舎道を歩いてきたとのこと、いわゆる食糧の買出しであった。第二本科（夜間）では米軍よりの脱脂牛乳とパンの配給、お徒町までリヤカーで取りに行き、さて整列ところが停電、ローソクの灯で作業これは毎日のようにあった。おわりに、新旧の級会が各所で催されそこではいつも学校時代のことが活発な話題になる。各位それぞれの分野で大いに成功活躍されている方々である。ここで古い小学校の卒業式に歌った「身を立て、名を挙げ、やよ励めよ」の歌詩が思い出される。皆様のご幸福を祈る。

（元教務課長・電気）

### 「原点から」

高村 広昭

今年は、本校「40周年」であると同時に、'70年代が終わりをづけ、'80年代を迎える年でもある。'70年代は、今までプラスの価値とされていた科学や文明や教育などが根底から問われてきた時代でもある。しかるに、ぼくを含め本校も、この時代と真摯にむきあえたかというとはなはだ疑問である。まず、

ぼくとしては、自己の持っている価値観のすべてに疑いを持ち、検証することから出発しながら、'80年代を迎えたいと思う。

（社 会）

### 「思い出すこと」

田 中 義 明

高校に入って、三月で入試を迎え時計係という大役を御せつかったのには驚きもし、緊張もしました。会議室のブザーのボタンを時間表によって押すだけ、といわれたものの入試を動かすキーでもあるからです。当日、ブザーの具合が悪く、急速吊鐘になり、無事打ち終えましたが、まさか時計係となり、吊鐘を打つことになるとは思いもよらぬことでした。しかし、ここで得た緊張感、今更ながら持ち続けている気がします。祇園精舎の鐘の声でないが、複雑無常に、緊張の私自身に響いたのかも知れません。（今はチャイムです）

（国 語）

### 「講師生活をふりかえって」

綱 正 貫

昭和27年9月1日付で「本校数学科時間講師を委嘱する。」という簡単な辞令を頂き何となく自分に与えられた担当教科を無難に生徒に指導して今日に至りましたが、今回の高校創立40周年式典には、高校の発展に大いに貢献したという理由で、はからずも感謝状を頂き、何とも面映ゆい気持ちでした。

私自身が専任教諭として学校の発展のために盡してきたのならばそれなりの理由で表彰を受けるという事は考えられますが、ただ教科だけを教えるだけで、生徒との本当に親しみある交わりといったような訓育面での仕事、特に人間形成の一番大事な時期にある高校生とのふれあいの場をもたなかったという事に

ついては、今にして思えば少し淋しい気が致しております。さて、何となく、と先程も申し上げましたが、やはり28年間の記憶の中で、いきなり3年普通科（当時は1クラス）の授業を行なったときの思い出は、私としても始て一人前の教師として、17、8才の生徒に対して教えるという不安感と緊張感から教壇に立った瞬間に、こきざみな足のふるえを感じた事を今も思い出すと、おかしさがこみあげてまいります。また当時（昭和29年頃）としては他の工業学校に設置されていなかった電気計測科（いまは廃止）はかなり高度の専門的な教科内容を教えていたようで、数学も他の工業科で教える内容より非常に高く、当然、数学にも強い生徒が多く、高校の数学指導要項をはるかに越えたいぶ高い問題の質問攻めにあい、新米の教師としての私はかなり苦しんだ事も、いまは懐しい思い出として残って居ります。

昭和38年頃からの所謂戦後ベビーブームの波が高校生の増加となって押し寄せ、本高も昭和40年の4月から現在の小石川の立派な校舎に移ってから既に14年以上を経たわけですが、私には何故か、今でも神田錦町で大学や電機学校と同居していた頃、狭い教室や、やけに広い教室等で授業をしていた当時の事が思い出と残っております。

最後となりましたが、私にとって大変御世話になった伏見栄次郎先生の姿が40周年式典に見当らなかった事は本当に残念でした。心から御冥福をお祈り致します。

（講師・理科）

### 「憶いおこすまに」

寺 尾 功 吉

高校創立40周記念誌が発行されることになり、まことにめでとございます。私に

も何か書いてほしいとのことですが、お心づかいは感謝いたしておりますが、私の勤続34年のなかで、高校で教鞭をとったのが7年間です。従って記念誌に相応しいものとなりませうかどうか、また、40年もたてば自分のことでも忘れてしまいます。つたない記憶をたどり憶いおこすまに書かせて頂きます。

開校当時のスナップ

私が大学の前身である東京電機高等工業学校に第一回生として入学したのが昭和14年の春でした。この年に東京電機工業学校が同時に創立され、第一回生が入学した訳です。場所は神田錦町三丁目の現在の五号館のあるところ。校舎は今の建物の位置に四階建てのコンクリートの建物と裏手に中庭を挟んで二階建ての木造の教室と裏手の道路の向う側に運動場と体育館がありました。余り立派とは云えないものでしたが、ここが両校の勉強の場でした。私共も一回生、工業の生徒も一回生です。人数も少なく、お互いどこに居るのかわからないような気がした。しかし朝だけは別で、工業の生徒が学校の入口に立って、登校者の服装の点検をしていました。12～13才の可愛い坊主等が腕章をまいて、私等が学校に入って来ると「お早よう」と声をかけてくれたのが、今でも目のあたりに浮んで来ます。この中に吉田校長もいた訳です。

あれから40年の歳月が流れ、学校制度も変り、社会も想像も出来ない程変り、校舎も立派になりました。しかし変らないものがあります。卒業生と母校のつながりです。私学の発展には卒業生の力をおかりすることが必要欠くことのできないものです。創立40周年を期に、更に卒業生と学校とが強い絆で結ばれ清々発展することを望み筆をおきます。

（電子・電機学校校長）

## 「貴重なひととき」

手島喜美子

図書館が1日のうちで、最も生き生きとしているのは、お昼休みです。比の時間は、何時も満席で、座って読書している人。書架で本を探している人、窓辺でおしゃべりしている人……、様々です。閲覧室にゆとりのないのが残念ですが……。青春時代は人生にとって大切な時期だと云われています。それは、自分がどの様に生きるかについて思い感うことにあると思います。その時に、読書は自分の漠然たる悩みに、一筋の光を与えてくれるものと思います。図書館において、一人でも多くの人が、それぞれの形で良書にめぐり逢って下さることを願って居ります。

(図書館)

## 「40年の中の15年間」

中村圭佑

39年の夏に八ヶ岳山麓の電大寮が開設されたと記憶しているのです。当時は大きな石がゴロゴロとしている潤道のような道を辿って寮に着けたことを思い出します。寮前の庭は切り株がそのまま、生徒と一諸に堀りおこしの作業をしたことを思い出します。私が学校に来たのが39年ですからよく覚えているのですが、今受持っている二年生が大体この頃生れた子達です。その間に1年生のキャンピングで8,000人程の人が、又クラブ等を含めると1万人位の人たちが利用したのかと15年間の時の流れを、この夏清里に行った時に思い出したものでした。40周年それはもっと前の創立なんですネ。丁度私が生れた頃になりますか。

(図書館)

## 「とっておきの思い出」

中島輝夫

昭和21年10月に本学園に勤務した。色々思い出があるが、特に印象に深く残っていることについて記してみたい。第二次大戦後の間もない頃なので、すべての物資が極度に不足していた。勿論、実験用の薬品も配給である。その中で或る日、酒精(エタノール)が配給されることになり、私の担当なので私が行くことになった。配給量は、たしか石油カン一本分だったと思う。切符をもって、リヤカーを引いて小伝馬町まで行った。今でもおぼろげながら覚えているが、大きな倉庫みたいな所だった。問題は、その後の使用用途である。何分当時、アルコールは貴重品扱い、その頃新聞にもでたが、メチルアルコール入りの酒をあやしげな街の屋台等で飲み事故を起した者が結構あったのである。中には命を落すハメになった者もいたようだ。さて、学校の実験室に持って帰ったアルコールは、かねて配給申請書に記入した通り実験用に使っていたのであったが、……その頃、某年某月、新旧校長の歓迎迎会が企画された、場所は伊豆、勿論宴会用の酒はふんだんとはいかぬ。そこで私は重大な使命を仰せつかった。「酒を用意せよ」と、困った、無理難題というもの。何故私が調達せねばならぬのか。私が管理しているのは実験用のアルコール、それも純度は96%のもの。さんざん無い智慧をしばった揚句、人体実験に使えば良いではないか。あとは明快。早速調合。処方はずい分いいかげんなものだった。カラメルで色をつけ。グルタミン酸ソーダ(味の素)、サッカリンを入れて、最後に二、三倍にうすめた。それを一弁ビンに入れて持参。宴会はいやはや盛大だった。なにしろ96%を二、三倍にうすめたも

のだからその効率の良いこと。忽ち皆さん愉快になり一晩中踊りくるった。……品質保証の責任上私もさんざん飲んだのは云うまでもない。残念、ここで紙面がつかた。今は昔

(前生徒課長・理科)

## 「雑感」

中田勇

高校の教壇に立った時、特に実験実習の授業で生徒諸君が、レポート等の計算で苦労をしているのを見て、これではいけないと思い計算尺の指導を始め、放課後遅くまで練習をした事が昨日のように思い出されます。

あれから十年もたないのに計算尺は消え、我々の机上にはより精巧な小形の計算機があり、すっかり計算も楽になりました。

真実、時代の進歩はめまぐるしいものですね。

戦後の食料休暇のあった頃と、省エネ時代とは云え現在のこの繁栄とのギャップを考えると、これから先の時代の変化には想像を絶するものがあります。我々も時代に遅れないよう常に頑張らなければなりませんね。

(電気・電機学校教授)

## 「20年間の思い出」

西尾圭介

私が本校に講師としてお世話になってからもう20年になりました。昨年はその事で表彰をうけうけだけが取柄の私として只々恐縮の至りでした。

あの頃は校長が池谷先生の頃でしたから、現在の吉田先生まで6人変わられました。当時は校舎も古めかしい錦町校舎で大学と共用していました。古い建物でしたが生徒達は皆真面目で現在の生徒より意欲もあり欠席も少

なく授業態度もはるかに良かったように記憶しています。やがて3、4年後に大きくはないが施設設備のよくなった現在の校舎へ移転しました。新しい校舎になり職員室にいても廊下を歩いても教室に入っても雰囲気非常に明るくなったような印象が残っています。

私は講師ですから専任の先生の人事はよくわかりませんが20年の間には多数の先生方が本校を去られました。元気が良く茶目気のある吉田羽先生、学者肌の宮本先生、故人になられた伏見先生等々、当時の人柄がしのばれなつかしさが一杯です。

又卒業した生徒達も社会に出て活躍しているようです。私は埼玉県の大宮にいますが私が授業を受持った生徒に思わぬ所でしばしば会い当時の話もし教師という職業の広がり根の深さというものをしみじみ感じています。

昨年の夏日産プリンスのセールスマンが私の家に来てプリンスの車を買ってくれないかと言うのです。私としてはさし当り金もないし乗っていたブルーバードをまだ2年は乗るつもりで一応断りました。ところが彼氏が云うには私は電大高校電子科に在学中先生に教わりましたと云うのです。そこでむげに断わるわけにもいかず有や無やしているうちに遂に金を工面して新車を買うことになってしまいました。教え子と教師という大きなものではありませんが、かつて教えた生徒であらうとみればどうせ買っただけで一面倒をみてやるうという気持ちになるものです。他にも本校で教えた生徒で電大を卒業してある学校の教師になっているのを二人知っています。うち一人は去年の暮に結婚し元気にやっています。学校を巣立ち社会に出て着々と根を張っていく生徒達を目のあたりに見て私自身今更の様に教育というもの、奥深さを感じ日頃

の授業とか生徒との触れ合いというものを決しておろそかにしてはいけないと痛感しています。

とり止めない事をだらだらと書きました  
が本校の発展と卒業生の活躍を祈ります。

(講師・理科)

## 「戦後の思い出」

野口 茂

月日のたつのは早いものである。高校の前身東京電機工業学校設立似来40年が過ぎたという。戦後34年である。

戦後の教育の場にも強烈ないろいろな戸惑いや苦勞があったはずであるが、今これらの思い出は歳月の厚い霧にさえぎられて定かでない。朦朧とかすんだ記憶は、その頃のことを系統的に組み立てにくい、思い出すまゝに記して、“高校40年のあゆみ”のよすがとしたい。

私は召集から、昭和20年8月下旬に復員してきたが、東京は住む家も食糧もないというので、僅かの間郷里で静養してから、電機第一工業学校に勤務するようになった。当時の東京は一面焼野原で、コンクリートの建物だけが僅かに点々と残り、学校も今の神田錦町の本館とこれに隣接する校舎のみで、電機学校、電機工業専門学校、電機第一、第二工業学校が同居で授業を行っていた。

戦い終って、生徒達は勤労働員から学校に戻っていたはずであるが、疎開や退学のためその数も大分減ってしまっていたようであった。

爆弾や焼夷弾は投下されなくなったが、長い間の戦争からの疲弊、敗戦による虚脱感から生活物資の配給組織は円滑さを欠き、闇物資が横行し、配給物資は益々不十分となり、殊に食料は極度に乏しく、生徒も教員も勉強

どころではない、生きていくのが精一杯の頃であった。

学校の中庭は、焼夷弾の落下で舗装に無数の穴があき、焼けたまぐれて、でこぼこになっていた。教室は本館の2、3階の電機学校時代の教室を2つに仕切って、黒板を廊下側につけてあり、電力事情が悪いから、当然、日中は電灯をつけぬためもあって教壇の方からの生徒はシルエットとなり、顔はよく見え、外の光はこちらの眼に入らず、授業のしにくいことこの上ない。巷の青空教室を思えば、いたくはいえないが、現在の高校校舎と対照すると雲泥の差である。

教室も、昭和20年秋頃は授業に使われることは少なく、点呼に使われる程度で、そのあとは直ちに焼跡整備に駆り出され、たしか上野末広町から黒門町辺の整備をしたが、食料不足の体は思うに任せず、おぎなりで、余り長くはやらなかったように思う。しかし、誰が播いたか焼跡のあちこちに咲く、鮮やかなそばの白い花は印象的であった。

配給世帯では雑炊の食事が続き、勤労働業も、授業も午前中で終る場合が多かった。

当時学校では江北橋そばの荒川放水路河川敷と江戸川区の江戸川河川敷をそれぞれ8000㎡、5000㎡程度であったらうか、借受けて、小麦、さつまいも、大根、ねぎ等を作っていたので、先生が休んだという、天気がよいからという、生徒と共に農耕作業によく出かけた。何せ河川敷という立地条件から台風や土砂降り続きには農作物の冠水をおそれて、一刻の余裕もなく出勤し、時には濁流の中でのいも掘りをするこももあった。

このような農耕作業は暫く続いた。そして夏の暑い日には、作業の合間に荒川放水路や江戸川で水浴びをしたものである。

教務室では、配給たばこをたばこ巻器で巻

いて吸う先生、配給きざみをキセルにつめて吸う先生、焼跡から捨ててきた板や銅板で作った流体抵抗器様のパン焼器で焼いたカステラのような色をしたパンを食べる先生、空腹はこうでもしていなければ治らなかったのである。

寒い冬ともなれば、特製角形火鉢に、こわれた机、椅子、焼跡から捨ててきた焼残り材木をくべて暖をとっていた。煙突がないから部屋は煤で黒く、うまく燃えないときは部屋中煙だらけで、狸のいぶり出しみだいである。

学校付近のあちこちにバラックが建ち始め、疎開先からの帰京者が増える頃、復学者、転校者、編入者などで生徒は徐々に増えてきた。

街には、露店、外地からの引揚者マーケットが至る所で店を開いて、物資は豊富にみえたが、盗難が頻繁で、教室の窓ガラス、電球、教務室の鞆やオーバーを盗まれたりして安全では補充がつかず困ったものであった。

戦後何年間かは、マッカーサー元師を長とするGHQ(連合軍総司令部)の指令で、かつての日本軍物資やアメリカからの脱脂粉乳粉末卵、グリーンピースなどの放出があって多少なり飢を凌ぐ足しになった。

一方、教育については、日本教育制度に対する管理政策が出され、戦前の教育の支柱となっていた教育勅語体制は改められて、今日の教育制度の基礎となった“新教育”の根本方針が打出された。そして教育の機会均等や民主主義教育が盛んに叫ばれ、学制は6・3・3・4制度となり、新教育の指導要領について、高校がスタートした年の残暑のきびしい頃、教員再教育講習会が実施され、すべての教員が何日間か授業を休んで終日この講習会に参加させられて、GHQの教育担当将校の通訳付教育論を聞いたのもこの頃であった。その後、教員再教育が盛んとなり、あちこの

公開講座、こっちの講習会で、ルソーの“エミール”やペスタロッチの“隠者の夕暮”についての教育論などの講義をきいたものである。

あれから31年、この間に高校の学習指導要領も何回か変り、“期待される人間像”の答申があったり、高等専門学校や専修学校ができてきたりして、学校教育は単線型から複線型となり、以前の袋小路に似たものができつゝある。

高校の義務教育化に伴い、今度また「ゆとりある充実した学校生活」を基本方針に、多様化、弾力化された新学習指導要領へ移行しようとしている。

しかし、他方で、21世紀に向けて新エネルギー、海洋資源開発などの巨大科学充実のための英才教育の体系作りのためか、歴代の首相が、英才教育の必要性を発言したり、時代に即応する教育の整備を示唆したりしておりこれからの学校教育は、どのような多線化の傾向をたどるのであろうか。大いに期待したいところである。

(元工業科長・製図・電機学校教授)

## 「あの頃のこと」

松岡 三夫

もう15、6年も前のこと、東京でオリンピック大会が開催された年の4月、私は本校に勤務することになった。まだ高校は大学と同居していて錦町にあった。

生徒達ちは現在のように長髪ではなくみな丸坊主であった。本校に入学したいが短髪はいやだから他校を志望するという受験生がいたとか。清水明校長先生が朝礼のたびに礼儀作法についてやかましく説諭されていた。戦後ベビーブームの子供たちがようやく高校に入学しようとする時期に当たっていた。

最初の2年間は定時制勤務であった。定時制の専任は、昨年退職された美術の河部貞夫先生、現校長の吉田宇一先生、武蔵に移られた下崎和彦先生と私の四人であったように思う。吉田先生が主任であった。当時定時制は各学年3学級、合計12学級あった。この定時制も時代の趨勢には勝てず昭和46年春の卒業生をもって募集中止の憂き目をみたことは、なんとしても残念なことである。

はじめて受持ったクラスは4年C組の60名。(ちなみに4年A組は吉田先生、4年B組は下崎先生、夜間の専任が4年を担任することになっていた。)現在オーム社の編集部にいる鈴木健君たちのクラスだった。なにしろ定時制なので私と年令のさほどちがわない生徒もいて、教師1年生の私は大いに不安であった。しかしまたそれまで何年か実社会での経験もあったので肚をすえて体ごとぶつかって行ったようにも思う。新学期始まってまもなくの頃、4時限目の英語の授業にクラスへ行くと灯は消えて教室はしんと静まりかえっている。はて面妖な、今日は打ち切りと連絡しておいたのかなと訝りながら灯を点けて見ると、今まで息を殺して待機していた生徒一同、ドッと大笑い。主媒者は石丸了君だった。当時東京YMCAに勤務していた石丸君は年も食っていたがなかなか面白い人物でよくクラスをまとめてくれた。独断専行型で人を食った所もあるのだが不思議に憎めない人柄で皆んなからも慕われていた。とにかく愉快な教師生活のスタートであった。他に、生徒会長をやった宮寺美次君、自分で徳世電気商会をやっていた徳世勇次郎君、当時から国鉄にいる榊田勇君や大明電話の塚本寿恵彦君、まことに多士済々であった。神津牧場に遠足に出かけて道に迷い随分と余計に歩いて疲れはて、茶店で休憩し、茶店のおばさんに

トラックを調達してもらい、やっとなりに送り出すことができたあの苦労も今は楽しい思い出である。

現在も、海老原勲君(労働省)石丸成行君(富士電気)竹内一忠君(東京消防庁)石塚黒司君(石塚自動車商会)などとは毎年暮れに一泊旅行を実施している。昨年も12月1日に富士電気熱海寮に例年通り集まった。宿に落ち着き一風呂浴びたあと、酒汲み交しながら往時のこと、また現況について談笑するとき、つくづくと仕合せを感じる。教師になって以来英語以外には首尾一貫して、「袖触れ合うも他生の縁」と云い続けてきたように思う。人が出逢う事が前世の宿縁ならば大切にしようではないかと主張してきたことが彼らの中に生きていることは本当にうれしい。

翌昭和40年4月に、高校は現在地に移転した。本年度は高校40周年の記念すべき年であるが、その歴史のなかで高校が独立して小石川に校舎を建設したことはひとつの大きなメルクマールであったと云ってよいと思う。爾来15年の春秋を閲した。その間、私は高校職員の一員として、6学級の卒業生を送り出し、今春7番目の卒業生を送り出そうとしているところである。

(教務課次長・英語)

### 「定時制を担任して」

見崎正行

昭和39年4月、錦町本館二階会議室で辞任をもらってから早くも16年を過ぎようとしている。当初定時制3年の担任を命ぜられて、教室に入って一瞬びっくりしました。それは、年令が小生より上か、または同年令の生徒が数名おり皆一様にきちんと着席しているではありませんか。夜学生だから当然年令の差は多少あるなどは思っていたが、いざ自分のク

ラスということこれからどのように生徒の中心に入って行ったらよいのか迷ってしまいました。年令だけは当時を振り返って見て、一人前になったのだなあと思ってます。

始めて自分のクラスで教壇に立ち確か、自己紹介をしたような記憶があるがどのように喋ったかいまだに思い出せない。後でI君(現在和光電設自営)が小生のところへ来て、「先生、声が震えていましたよ」と言ってくれたことが昨日のように思い出します。卒業後I君を中心にしたグループで集まり美酒に酔い皆大声で歌ったことが数回ありました。このような雰囲気になれたのも定時制だから出来たのではと思ってます。

当時の我々は、昼間正規授業を担当し、その後定時制のクラス担任ということで週に3、4日残っていましたが、今思うとよく出来たなあと思う。授業においては、中央無線に勤務していたM君などとは、立場を逆にして勉強したこともあったが、大変楽しい思い出の一つでもあった。

また定時制では、学業のみと思っていた小生にとって感心したことは、生徒会活動や課外授業などにも皆積極的に、生徒の方から自立的に計画し実行していました。休日を利用して小金井グラウンドでのソフトボール大会や、遠足、そしてクラス対抗の球技大会(5号館体育館)などもそれぞれ思い出されます。

さらに山陰方面への修学旅行では、放課後10時過ぎまで残って作業をしてくれたA君(現在日本女子工業高校)やT君(八洲貿易)などがいつも浮んできます。しかし経済的な事情により参加出来なかったK君のことも又思い出されますが彼とは年賀状の交換は今まで断たれずに続いています。彼と同級生であったやはりK君の弟さんが、現在本校の教員として2年ほど前から勤めており、近日中

に逢いましょうと計画しておられる様で、14年ぶりの対面を楽しみにしています。こんなことを思い出せるのも教員だからでしょうか。

現在2年生を担任していますが、当時とついで比べてしまっていますが、いまの子供は物質面に恵まれ、我がままなところが多いなあ。もう少し我慢や勇気があったらなあいつも思います。

定時制も現在は、募集停止となっていますが卒業生は無論、小生にとっても寂しいことである。

(電子)

### 「山の家の思い出」

宮崎登

40周年にあたる年に一年生の担任として、清里山ノ家キャンピングを生徒と共にすることができた。山ノ家に行くたびに昭和39年に入学した1E組の生徒のことが思い出される。昭和39年から始まった清里山ノ家キャンピングは、現在も教育の一環として、有意義に続けられている。山ノ家が開設されて初めて、1E組の生徒を引率し、相互に貴重な体験をした。物理的にも物質的にも不自由ななかで、不平不満の声もなく、よく耐えたことが教育的には意義深かった。我々には耐えて、考える力を養う環境が必要であることを痛感する。

(電気科主任・電気)

### 「思うこと」

人見芳行

創立40周年……冒頭より私自身のことを申し上げて失礼ですが、40年の才月となりますと、ほぼ私自身の年令と同じになります。このような学校に奉職出来ましたのも何かの縁

があったものと思いますと感慨無量のものがあります。それ故今まで諸先輩先生方が培われてまいりました伝統をふまえて、今後共ますます隆盛にして、皆様から古きよき学舎としてののちのちまでも愛し慕われる電高となってゆきますように私自身微力な人間ではございますが、これからの学校教育に従事してゆきたいと思っております。

(英語)

## 「追 憶」

平野三郎

本校四十周年を迎えて思い出を書くという、何から書いたらいいか解らないほど、いろいろと経過があった。私は戦争前の人間であるが、この学校に入ったのは戦後直後で、まだアメリカ進駐軍から配給など受けていた時代である。私は校務のいろいろの面に関係したけれど、PTAとも長い間深く関わっていた。いつの頃かPTA新聞に、この学校の歴史を連続連載することになり、それを私が受持った。その必要上、電機大学二十五年史を通読する機会に恵まれ、創立者広田、扇本先生始め、加藤先生、服部先生などの偉さや功績を、おぼろげながら知ることができた。これらの方々のお苦勞は並々ならぬものがあって、例えば加藤先生が錦町の校舎を非常に高価な金を借金して買いとる決心をし、その契約を済ませた時はこれからどうなるのかと自分の責任を思うと一晩眠れなかったということである。しかしこれが本校発展の端緒になっていることを思うと、あの昔の古い汚れた校舎が、光り輝く感じがしたものである。私は橋本校長、清水校長の下で微力を尽してきたが、昔のこの学校を支えて来た方々の苦勞や歴史は、「二十五年史」を読むまで何一つ知らず、又関心もなかった。現在若い先生方

が多く校務についてられるが、丁度私が昔の先生方の苦勞に何の関心もなかったように、古い諸先輩の御苦勞はご存知ないと思う。又それでもよいのではないかと思う、学校も社会も人生も、大きな河の流れのようなものだ。毎年生徒や御父兄は次々に学校を去り、又新しい生徒諸君が流れ込んで来て、河流のように止ることなく、次から次に移ってゆく。その変化交替中に、学校という一つの人格が変りなく続いて存在してゆくが、その学校の中も知らず知らずの間に移り変わり流れてゆく、深い感慨を催さざるを得ない。

(元教頭・国語)

## 「ある歴史」

山田宏明

ある結婚披露宴での時のことである。新郎のK君は本校の卒業生である。両家の紹介、祝辞、挨拶と型通りの進行たのだが、何かもの足りない。何か盛りあがりに欠けるのである。厳肅な中にも華やいだ和やかさが生じて来ない。私も次第に沈んだ気分になって来るのだが何とも手だてがない。進行役の焦りも伝わって来る。そうした雰囲気はしばらく続いていた時、ひとつのテーブルを囲んでいたK君の七、八人いたクラスメートの中から、N君が起ちあがり、「何だか、淋しいなあ。皆さんでもっと楽しく二人の門出をお祝いしましょうよ。」ずばりその場の雰囲気指摘したのである。決して巧みな話術でも、美辞麗句を並べるでもない。しかし、N君の飾り気のない、そして臆することのない卒直な一言が参列者の心を一瞬に和ませてしまったのである。N君の即応の妙と勇氣とに私は心から快哉を叫んだ。それまでの重苦しい雰囲気は払拭され、笑いも緊張の中で進行されたことは言うまでもない。

N君は高校在学中、人前で話をするのを特に得手とする生徒でもなかった。しかし、あの時のN君の心境は友を思う心でいっぱいだったのであろう。彼の友を思う卒直な気持ちに彼に勇氣を与えたのに違いない。あの時の素晴らしい友情の交歓の場を私は今も忘れない、K君はいい友人を持った。そして私もいい卒業生を持ったと誇らしく思っている。

本年は高校創立四十周年、人間に喩えるなら、言うところの「不惑」の年に当るのであろう。基礎固めが完了し、完成に近づく前の今まさに「知節・耳順・従心」に向けての飛翔の時と言えよう。

思えば戦前の草創期、そして戦中戦後と世の中の変遷に伴い、その時々のお苦勞に感謝すると共に、前述のような素晴らしい多くの卒業生のいることを心の支えとして、学園の一員として本校発展のため微力を尽したいと思う。

(生徒課次長・国語)

## 「私の近況」

渡辺太

昭和47年4月、法人本部に移り、施設、及び嶋山校地開発、理工学部建設に関係し、昭和52年4月より卒業生の団体である校友会に出向しています。お陰で今まで広範囲の人々と知り合うことができ、人間の考えの種々様々なこと、又同じ事柄でも立場により見方が異なること等、更めて認識しました。特に校友の諸先輩からは教えられることが多く、一層の勉強と精神修業の必要を感じています。最近ヨーロッパを廻ってきたが概してヨーロッパ人は質素で歴史に富み田園ムードであり、テレビ等は殆どなく、日本より落ち着いた感じがする。しかし、水が自由にタダで飲めるこ



## { P T A }

### 「四十周年に想う」

P T A初代会長 今井 勇 蔵

回顧三十年彼の錦町学舎に吾が電機学園高等学校P T A会長としての思い出の一端をとの事三十年前の幾多の事例髣髴として往来するまほろしの数々何れが先かいつれが後かも判らぬ過去である。想起すればとりわけて農地法による小平の学園農地の回収こと（農地法による収容）今日も明日も時の副会長秩父氏等を帯同して日参しては耕作者と畑の畦で一杯傾けては学校が大切か教育がはた農耕が大切か食料が、種々懇談を重ね学校電機大学建設の青写真計画趣意書等を携へて説得相つとめ数ヶ月にして漸く愁眉を開いた事が出来たのである。学校内部P T A本来の使命達成のための運営育成協力開発の活動は勿論学芸会などで生徒の演技夕鶴を觀賞した事も昔を偲ぶ事である。外部的には産業教育振興案については非常に努力を傾注し全国産業教育（商工農水産）高校学校連合大会を開催学校側より北豊島工業高等学校長佐藤孝次郎氏P T A側より電機学園高等学校P T A会長今井勇蔵の代表とし半蔵門の東条会館を根城として衆参両議員に關係議員を歴訪百余回陳情説得戦後の今日産業なくして日本の生命なし、遂に戦後教育の第一着手として産業教育振興法案が成立国会通過を見るに至り大に気をあげて全国大祝賀会を催し各位より全国区参議院議員立候補徳意を受ける一幕もあった。尚申請によって卒業生は三種技術者認定を受ける事が制定の最後の年であったので申請に努力して効を奏した。思い出は次々に数あれど紙面の関係上其の端を詠るしこれに止めます。

幸に各位の御発展と御健勝を祈りて筆を擱す。  
九十才になりました。

### 「バザールの思い出」

51年度 副会長 川上 智子

電高祭に父母参加のバザールが開設されるようになりまして本年度は5年目になります。昭和50年度でございましたが当時P T A会長の見沢文彦さんが「学校の努力に対してP T Aとして何か応援する名案はないか」と種々頭を痛めておいでになりました時、ご提案申し上げたのがバザールの企画でございました。ただ申し上げましたあとで私にはいくつかの不安がありました。

第一に小、中学校におきましては通学範囲が決っておりますのでご父母からの物資の提供が比較的便利であります。電大高校の場合は都内全域はもとより近県を含めて殆んど全部の生徒が電車またはバス通学でございます。

第二に学校が男子の高校であるということでございます。女子校の場合はそういうことではないと思いますが、男子の高校生の皆さんが果して品物を学校まで持参して下さいか。

第三に以上のような理由もあるためでしょうか。他校男子高校の実例を見聞きしないことでございます。かけ声をかけたものの、品物は集まらない、となったらどうしたものかと心配でなりません。このことは役員会でも実行委員会でも皆様同様な不安をお持ちでございました。見沢会長さんとも夜中にお電話で打ち合わせをしたことも何回となくございました。今、ふりかえてみますと大変な生みの苦しみがあったことが思い出されます。そうした結果決断されたのが「L L教室再建バザール」でございます。

当時学校当局は他校に比べて安い学費の中

で、L L教室の再建を計画されておりましたので、そのご努力に対してP T Aとして多少なりともお力になれればという心がこめられた計画でございました。当時の会長さんをはじめ役員の方々のご苦勞も大変なものでございましたが、さて活動がはじまりますと、会員のご父母の皆様のご協力もまたご立派でございました。また生徒の皆さんもはじめに心配したよりもよく協力して下さいました。予期したよりもたくさんの品物の提出をいただきまして当日のバザール会場も見映えのある、また活気のあるものでございました。また、一般の方々の人気も上々で、二日間の会期の初日で目ぼしいものは売り切れになってしまいました。その為急遽品物を補充して下さいました役員さんもあるほどでございました。こうして第一回のバザールは成功のうちに終わることができました。

それにいたしましても電大高校P T Aの、はじめての企画であり、他の男子校では例のないこの催しが果してどういう結果になるだろうかと、見沢会長の陣頭指揮のもとに、役員、学年委員の皆様のご苦勞は今もまざまざと思い出されるものがございます。私どもの活動は金額にいたしましては微々たるものでございましたが、学校側では立派なL L教室を作して下さいました。

それから第三回までは私も直接この活動に参加させていただきましたが、年を追うごと衆知が集められ、「憩いの部屋」とともに、P T Aの活動の大きな行事の一つとして軌道にのりまして、今日ますますさかんに受け継がれておりますことは、最初の提案者として感慨深いものがございます。これからも学校のご発展とともにこの催しはもとよりP T A活動が益々活発になりますようお願い申し上げます。

### 「電高祭 父母の憩いの部屋のあゆみ」

昭和49年度 副会長 曾我 尚 義

昭和47年、当時一般学校に学生運動が盛んな時で本校も様々な問題をかかえ頭を悩ませておりました。P T Aとしてもこの伝統ある学校を守り通すために一層の団結力を高め、これを防ぐ方法を色々考えておりました。当時はP T Aと言っても役員集りは、何回かあっても一般会員との顔が合うと言うことはほとんどなく、入学時から卒業式まで学校に来たことがない会員がたくさんおられました。

今迄学校まかせであった父母達にもっと学校に関心を持ってもらいたい。父母と先生、又父母同志の肌を合せた協力が一番と言う意見がまとまりました。時も折り第10回電高祭が11月に開かれましたが、男子校のせいもあり他校に比べて父母を始め一般の人の集りも少なく、淋しい学園祭でしたが生徒達は一生懸命。何かたりない感じでした。

この電高祭にP T Aで父母達も参加出来合せて先生方と親しく話し出来たのなら、もっと人の集りも多くにぎやかな、楽しい学園祭となり一石二鳥ではないかとの案に翌年の11回電高祭に何らかの形で参加することにまりました。昭和48年学生運動は、その後だんだん下火になってきましたが、全部の父母達ももっと身近に集り子供のために、学校のために意見を持ちより、よいP T A全体で電高祭に参加することを目的に第11回電高祭に、「父母の憩いの部屋」が誕生しました。11月10日、11日、306号室、まわりに先生の作品、清里山の家の写生画による紹介、又父母の作品並びに展示品等をかざり中央にご休憩の席と、心づくしの茶菓を用意いたしました。現在の規模とは程遠い質素なものでしたが、ほとんど会うことのない父母同志、又先生方

と親しく話し合える場として、多数の父母のご利用をいただき大成功でした。又この部屋でとりましたアンケートにより以後も憩いの部屋を在続することにきまりました。多数の父母達に自分達の日頃の成果を見てもらいたいと一生懸命説明する生徒達の目の輝きは、今までの電高祭には見られない生々としたものでした。

憩いの部屋も年ごとに規模が大きくなり、部屋の空気もさわやかなメロディーの流れるなかで、ご父母の皆様のごやかな会話の場となり、展示品の即売を願う一場面も見られる様にかわってきました。目的も父母と学校との結びつきに加え、建設的なバザールの併設までに発展し、この基金が呼び水となって「L.L教室」も完成しました。

電高祭のPTAはこの憩いの部屋とバザールによって電高祭と共に変身して来たと言っても過言ではないと思います。今後共皆様のお力で益々よりよい部屋に育って行く様に願うものです。

### 「成果のあった隣接地買収運動」

昭和53年度 会長 曾 我 清

この度、東京電機大学高等学校は創立以来ここに、四十周年を迎えることに成り、誠に御同慶にたえません。この記念すべき年に本校の隣接する東京都所有地の払い下げが実現を見るに致り、本当にすばらしい年に成った訳で御座居ます。

この隣接所有地の話は、前池田校長先生の在任中の時に話題に登り、具体的には東京都衛生局予防部車庫の移転問題が表面化されました昭和五十二年秋頃からであります。そこで先生方並びに、賛助会員及びPTA実行委員の中から委員を選出致しましてこの問題に取り組み、払い下げ請願活動PTA小委員会

を設置致しました。委員長には、今は故人になられました元PTA会長の荒井澄雄氏がなられ、中心となって進めて参りました。

その間、東京都議会議員安形惣司先生の御指導と御尽力を頂き、東京都衛生局と折衝を持ち併せて東京都に隣接所有地払い下げに関する請願書を提出する計画を立てまして、東京都議会議員先生方五十九名の署名を頂きました。又、父兄、卒業生、教職員、賛助会等の方々約八千名の署名も集まりました。しかし、その間度々、前池田校長先生をはじめ委員会の役員の方々が東京都庁に副知事及関係の局に出向き交渉を重ねて参りました。

そして年度も変わり、前池田校長先生が勇退をされまして、現吉田宇一校長が引き継ぎ、校長先生のお骨折により、地元文京区選出の都議会議員酒井良先生のご指導とご協力を頂くことになりました。そして酒井先生のご指導により請願書の提出はひとまず見合せ、関係部局との話し合いにより、本校の要望を伝えて行く運びとなりました。

その後、酒井先生には、田坂副知事をはじめ関係部局に対しまして説明する機会を設けて頂き、更に知事宛に割愛要望書等の提出をする様にご指導を頂くなど、格別のご尽力を賜った訳で御座居ます。

隣接所有地の利用をめぐる本校の他、幾つかの要望が有りまして、とりわけ清掃局の強い希望があることを酒井先生から伺いました。後日、清掃局の局長さんも本校周辺の環境を見て、本校に立寄っていかれました。

こうして、全面払い下げではなく、東京都内部の調整も出来、都管財部としては、小石川清掃局と本校の双方で所有地を活用してはどうかと云う事に成り、現在の敷地面積に決定した訳でございます。

今日の祝福すべき新校地の実現を見るに至

った事は、東京都議会議員の安形惣司先生並びに、酒井良先生の並々ならぬご支援と、種々のご指示の賜ものと攻めて心から御礼を申し上げます。また、父兄卒業生、諸先生方をはじめ多くの有志の方々のご協力、お力添えを下さいましたことに心より感謝する次第であります。

この実現致しました新校地により、より一層の教育効果の向上を計ることができ、すばらしい人材が育ってゆくことと思います。

今後、益々本校のご発展をお祈り申し上げます。

### 「創立四十周年に想う」

学年委員 森 山 繁 夫

東京電機大学高等学校が創立四十周年を迎えられたことをお喜び申し上げます。

広田、扇本両先生によって電機学校の創立、昭和14年東京電機工業学校創設以来四十年いろいろな時代の波をくぐり抜け、多くの有為の人々を育てあげながら今日に至った東京電機大学高等学校の力強い歩みに深い感懐を禁ずることができません。ことに学校に職を奉じ教育にうちこみ伝統の火を燃やしつづけてこられた歴代の諸先生方、PTAの皆様のご努力に心から敬意を捧げたいと思います。

大戦により荒廃の極みと化した我が国も見事に立直り戦前にまさる繁栄をとりもどしました。それは国民個々のもつ勤勉、えい知、技能等の総力の結集された結果によるもので、そしてこれ等を培い支えたものこそ、ほかならぬ教育の力です。

学校のあゆみを拝読し「温故知新」「ふるきをたずねてあたらしきをしる」と云う言葉はまさに真理です。1年生が学校の歴史やそれを取り巻きはぐくむ環境の歴史や変遷を知ると云うことは即ち母校を愛することです。

都会に生れ都会に育つた者には「故郷がない」とよくいわれます。都会には発達した機械文明が近代化と称して古い姿を蹴散してしまふためではないでしょうか。その都会にあって珍しくも長い歴史と尊い文化を消えようとするのを守りつづけてきた名苑後楽園を隣接に学校は同窓生、在校生の青春時代の心の故郷となるでしょう。

人は誰でも自分の故郷がたとえさい果ての地であっても故郷を愛し故郷を慕い少しでも良い所を探して誇りとします。

故郷を遠く離れて他国にある者には紙面の片隅に見つけた故郷の活字にも父母を兄弟を友を惟うでしょう。

記念すべき四十周年に入学できた1年生も学業はもとより教育キャンピング、体育祭、電高祭「ふれ合いを大切に」の記念行事に参加し努力したと思います。

未来への力強い前進発展を期待し東京電機大学高等学校の伝統と校風の長所と美点をこの創立四十周年を契機に愈々高め向上されることを願うこと切なるものがあります。

### 「創立40周年に想う」

学年委員 青 木 勇

創立四十周年、PTA発足三十周年、同窓会創立二十周年と本校にとって節目の年でした。私も微力ながら学級委員を仰せつかり準備のお手伝いをさせていただき乍ら、記念式典、電高祭等の行事に参席させていただきまして、校長先生はじめ来賓の方々、そして皆様のお話を聞き感動することや教えられることが多く、亦多勢の父兄の方々とのお知り合いもふえて、校長先生が、常々語りかけておられる「心のふれあい」が機会ある毎に増してくる様に思われます。

来年は1980年学校の外にあっては世界

的にも大変不安定な昨今です。本校創立の四十年前も平和とはとうてい云いがたい不安定な時でした。島国にあって一見平和そうで、ニューファミリーのもてはやされた今年も、八十年代は本物が求められるようになると予見する人が多いようです。

創立五十周年、六十周年を迎える将来、そのとき親である自分と社会に出た我が息子が共にこの四十周年をふりかえり、どんな感慨にひたることでしょうか。先頃も家中で将来世の中がどんな様になるだろう、いろいろ科学が進歩して楽しい世の中になるだろうと未来の夢を語りあったことでした。

今年もあと一ヶ月余り「心のふれあい」を大切に気持を引きしめて八十年代を迎えたいと思っております。

### 「創立40周年に想う」

学年委員 神 保 健 三

電大高校も、早や40周年を迎られたと云うことは、諸先輩方が社会的要望に答え、大変意義のある仕事に御活躍された結果と思えます。

この電大高校は、日本全国を始め、海外にも進出し、電気関係の仕事では日本一の自負出来ることではないでしょうか。

小生も子供の事では全面的に家内まかせて居りましたが、今年度初めてPTA関係のお手伝いをさせて戴き約半年経過致しましたが、先生や諸先輩方達の御尽力には誠に敬服致して居ります。

最近の生徒は体力を使うことが少なく、学校側には特にスポーツ関係に力をそそいで戴きたく思っています。通学時間や運動場等、それぞれ異り学校及び御父兄の皆様方の御理解により出来得るかぎり活発な部活動を期待致します。

尚、電大高校の先輩に当る卒業生と現在々々中の生徒達の交流が少なすぎる様な感じも致しますが、諸先輩方々が築いた伝統ある、電大高校、我母校と、前途ある生徒諸君の良き指導者として、諸先輩達と皆んなでこれからも末永く継続して行く事を願望する次第です。

### 「創立四十周年に想う」

昭和54年度 副会長 米 山 俊 彦

創立四十周年。考えてみると四十年の歳月は私共父母の年代でもある、無論若さと美貌の伝統を誇る、我が電大高校PTA、女性軍にあっては、三十代の方もかなりおられると思うし、又子供が次男、三男等の場合は五十代の方もおられることだろう。

しかしいくらインスタント時代の昨今と云っても、まさか二十代は皆無であろうし、六十代も又、しかりと思う、もしおられたなら御壮健、誠に羨まじきかなである。

もっとも十七、八年前のことであって現在は昔日のおもかげは？である。

まあ大勢は四十代が締めておる事は間違いないだろう。かくゆう自分も、大勢に従え四十代（一桁上に近いが）であるが、幼児時代、学業時代、青春時代、結婚、そして人の親となり、やがて子供が成人に達しようとしておる今日まで、自分の四十数年を振り返ってみると、とても永く感じ、歳月の意識より、世の中と共にズーと生きて来たような、錯覚をおこす。その間、両親、兄妹、祖父母をはじめとする身内、隣、近所の人々、幼な友達、先生、先輩、後輩、又、商売を通じての知人、等々どれ程多くの人々との出会いがあったことであろうか。

人間の一生は人との出会いであると云って過言ではなからう。

それ故、一年、一年膨大な人々の出会いによって、はじまる学園は世に大切であり、電大高校四十年の歴史は大変な重さがある。

創立当時は無論のこと、今日に至るまでのことは私共に知る由もないが、戦前、戦中、戦後と永い時代に亘って多くの人々の出会いがあり、そして時には戦場や、兵器工場へ、又戦後の復興期には、その礎となられた人達を、或るいは又、経済大国に成長を遂げた時期にはその中核たる人材をと、どれ程多くの有能な人々を育て、世に送り出して来た事であろう。

しかし此の偉大な母校も、自身では意志を持っておる訳ではなく、その四十年の歴史のなかで、その時代、時代に先生方を中心としてそこで学んだ人達、関係のあった方々、これら、多くの人々の出会いに始まり、その人々の愛校の精神によって偶像が生まれ、伝統が築かれて来たものと思う。

此の先五十年、六十年、百年と更に輝きを増し乍ら電大高校の歴史は続くであろう。

永い歴史のなかでみれば三年間は、わずかな一コマに過ぎないが、どんな永い歴史も一年、一年の積重ねによって成立っておる事を考えれば、校長先生をはじめとする諸先生方、先輩、生徒達、そして私共PTA、それぞれの立場を踏え、皆んなの出会いを大切にしながら、意義ある三年間として過ごしたいものである。

### 「電気技術者を目指して進ませた三年間」

学年委員 青 木 久

現在は、日本国中油漬けと云われるが、実は電気漬けなのです。身のまわりを360度見まわして、電気に無縁な品を探して見ると、良く解ります。大空は無縁だ！とんでもない電気屋的に見ると、磁力線の束を見上げてい

る。と云う訳で、電気漬けが正しいと思いません。三ヶ年の基礎的知識を与えられ、各々がこの与えられた知識を各々、進みながら増しつつ進んで行くことが、社会に役立つと表現されるのです。三ヶ年を振り返り、教育の二文字を分割して「育」について考えるとき、育は家庭に於ける負担が多い部分ですが、精神的肉体的に最も不安定な時期を、男子専門校であるため、異性との距離が大きく、倫理問題で頭をいためる機会が少なかった事は幸事と申せます。都心と云う立地条件の中で、体作りの点では、残念ながら他校に及ばないのですが、室内での体育部門も同様におつきあいの感があり残念です。教の部門は、自分も同じ電気の世界を歩いている故か、常に一定の巾を持って見守って来ました。時々、父子の技術的交流はありましたが、我子だけに解る迄、しつこく説明したりしがちなために避けて居たようでした。学校での授業内容を垣間見る機会として、ノート等覗く事があり、実感として、巾は広くなったけれど底は浅くなったなあとと思われる部分が多いようでした。

勉強を続けている本人達は、学校の意図する電験や、電気工事が社会でどのように遇されているか知らないのではないかと疑いたくなる程欲がないように見えます。昭和7年に電験、昭和35年に電気工事士法と、国はこの検定により、技術の向上を計る一方、この制度を大切に育んでいます。この有資格者に、学校を卒業し、三ヶ年の経験を経て、申請すれば簡単に有資格者となれる等、安易に考えるのは、大きな間違いで、国がこの制度を大切に以上、わずかな欠格理由があっても、受理されない事は銘記しておくべきです。現在、電気界では、多数の諸先輩が活躍されていますが、大部分の方々は、学校卒業後に、技術の展進を得ているようですので本



格的勉強は、これからと云う事になります。

先日、若人と歓談するうちに、その若者が何気なく、学校で習った事は、今の自分に全く役立たないとボヤきましたので、何を専門にしたのかと問いますと、彼曰く、冶金工学を専攻したとのこと、実社会では、これを活用せず、スーパーマーケットで働いている訳ですから無理からぬ話と思いながら、この若人に対する肯定と同情と反感が顔の中で交錯してしまっただけがありました。進路を定めた以上、単純明解にガムシャラに突き進んだ方が電気の世界は広だけに、展び易いと思われれます。これからの電気の世界は、省エネルギーと云う、大変な課題を乗り越えなければなりません。電気屋の夢は、全ての道路から電柱を無くし、発電所も無くし、「オイ、そろそろ、電気缶が無くなって来たよ、スーパーへ行って、30入一缶買ってこい」なんて云うことになれば、電気の世界も電機学校も私自身、不要、原稿などもっとも不要………息子はスーパーの電気缶売場志望。

### 「間近になった別れの日に」

学年委員 瀬賀 ハツ

電大高校に決める。と、子供に宣言され、どんな学校か気になり出したら仕事も手に付かず、訪ね、訪ねて見に来たのはもう三年前バット目についたのが広い、広いグラウンド、夜間照明迄も立って居る。運動好きの彼の為に一も二も無く気に入った。学校の前は小石川後樂園、環境も最高々々合格発表の日、お母さんは行かなくても良いと再三子供に言はれたが、何で我慢が出来ようか……一時間も前に学校へ行ってしまった。グラウンドは学校の物では無かった、狭い校庭に失望したものだ。受験番号が447なので不合格ではないかと不安だった。入学当時を想い出すと悲

喜こもも色々な事が有った。「僕電高を選んで良かったよ。僕に合ってるんだ。」と、眼を輝やかせて登校する姿に、主人とも嬉び合いました。過剰な程クラブ活動に励んだ彼に好ましさをさえ感じて居たのも事実でした。成績より健康第一に考えて居たからです。三、四才の頃弱かった彼を神様、仏様無事に育ちますようにと祈り乍ら育てたのです。柔道やボーイスカウトで身心の鍛練を願いました、テストの点が気になったのは高校入試直前と、そろそろ大学入試を語り合うようになってからです。遅過ぎる暢気親子です。某大学へ行く、と言っては居るけれどろくろく勉強もして居ないもの、ムリだ！其の時、ショックを受けないでくれ、世の中そんなに甘くは無い、……電大高校では、良き師、良き友にめぐりあえた幸せを心から感謝して居ります。創立四十周年を迎えた栄え有る母校を世に誇り得る立派な男になって欲しいものです。四十周年記念事業にはPTA会長様細い体に似合ず凄く、バイタリティーに頑張りました。改めて敬意を表します。又多くの御父母、OBの方々のお力添えが記念事業成功への推進力となった事も忘れる事は出来ません。会長、副会長、学年委員長のお苦勞は大変でした。私達ももう少し苦勞を分けて載せても良かったと思います。本当に皆様御苦勞様でした。

### 「高朗夢」

かきびとしらず

時は20世紀の終り近く、日本の国の都に、電大校という男が居りました。年令も40才となりますと男盛りと申しましょか勢いいよいよ盛ん、心ますます優しく氏を知る人をしてその円満闊達さに皆一目おく様子でございます。

氏つれづれなるままにふとまどろまれました折、沸々と熱き血の燃え上らばかりの夢を見られ、醒めてもなお夢か現かと戸惑うばかりにはっきりとして居りましたので忘れぬうちにと紙等捜す間もどかしく有り合わせの紙片に書き止めておられました。

### 春

季節は春なのでしょう蒼蒼とした古木の門を入ると一転して明かるい庭園に出ます、芝の築山、笹でおおわれた築山に副って遊歩道はやさしく皆を案内してくれます。そうすいつの間にか氏のそばには澄刺とした少年達が、おや、その少年達は毎日教室や廊下で話し合い笑い合っている顔々々です。その少年達に混ってアメリカの紳士が、その横にはやさしい微笑を浮かべた婦人とたくましい笑顔の少年達が庭園の鯉に餌を与えたり、そこに咲く染井吉野やしだれ桜に見とれているではありませんか、お互の少年達ははにかみながらも話しを始めました。若者特有の心のふれ合いを感じたのかやがて喜々として何処かへ行ってしまい後には氏とアメリカの親達がやや戸惑った恰好で顔を見合わせてはニコニコしながら少年達の去って行った方を見ているのでした。

### 夏

氏はアメリカ西海岸のヨットハーバーで、すばらしい夕日に向けて立ちつくして居ります。それはまさに大輪の黄金の輝きです。あの光の一部でも地球に触れようものなら一瞬にして地球全体が炎と化してしまうであろうと恐れさえ抱かせるエネルギーです。氏は哀しささえ感じさせる静かな日本の夕陽を思い浮かべながら止宿先のA氏宅へ足を向けました。ここには氏が毎日共に過している日本の少年達がB氏宅、C氏宅、D氏宅へとそれぞれ止宿して兄弟校の契を結んだこの市のハ

イスクールのサマースクールに通っているのです。寝食を共にし、学問、スポーツを通じて生じる心の触れ合いから日本人、アメリカ人としてだけではなくお互いが理解し合い真の平和が生じる事を氏は信じて居ます。そしてこれは単にアメリカだけの問題ではなく世界中の国々との結びつきも同様であると氏は心に深く噛みしめるのでした。

### 秋

紅葉映える清里の山の家、朝夕の肌をさす冷気も日米の少年達にとっては逆に体を激しく動かせる喜びに変わるのでしょうが、その声は木々をくぐって霜で赤茶気た周囲の野草や石ころにまで若さと熱気を配っている様子です。アメリカ西海岸からの遠来の客を迎えて日本でのオータムスクールです。夜は冷徹なまでに冴え渡る月光の下キャンプファイヤーの炎に照らされた頬は赤く少年達の元気な歌声がいつまでも続いております。

目覚めて氏は

目覚めても氏は未だ現とも夢とも決しかねられ部屋の様子などとく見回されますと、明日の晴天を約束されたかのように窓は茜色に染って居りその神秘的な美しさに又しても夢の続きかと思直されるばかりでありました。

その夜改めて書き清められる折、あまりにも心楽しい夢でありましたので中国の紅桜夢になぞらえられ、高朗夢と名付けられましたとか………

かきたし

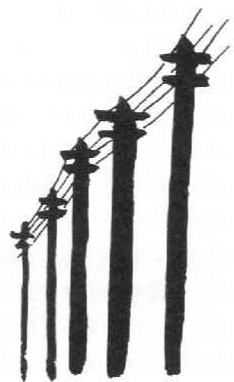
人類は昔から夢を見続けて来ました。そしてその見果ぬ夢は良きにつけ悪きにつけ、好むと好まざるとにかかわりなく幾年か幾10年が経た後に必ず実現して来ました。40周年を終えた電機大学高校も50周年に向けて夢を見ようではありませんか。実現に一歩一歩近づいて行く夢を。どうでしょう現在行なって

いる夏期休暇のアメリカ語学研修旅行を発展させ、アメリカの高校と兄弟校としての交流を図る等は……、その巾を広げて相互の生徒の交換と共に先生方の交流も考えられます。

国際の場に出ても直ちに通用する語学、世界の共通語である英語を生徒全員がマスターして、学校の英語がそのまま社会で役立つ事が出来る英語教育を受けられる高校、すぐれた学力と技術、すぐれた英会話を身につけて通訳をつけなくても堂々と技術について又各分野の話題に対しても討論が出来る社会人を生み、又大学へ送り出して行く高校になって行ったら、そしてこれらの夢は50周年まで待たなくても、もっと早い時期に実現するかも知りません。又そうさせたいものです。

電大高氏はどうもその先だりの夢を見られたものらしく、まさしく正夢を見られたものでございましょう……。

おわり



## 〔 歴代会長・副会長 〕

年 度	会 長	副会長	昭 和	年 度	会 長	副会長
昭和24年度	今井 勇藏	秩父万次郎 吉田 文子	昭和41年度	宮崎 房男	岡田 佐吉	
昭和25年度	今井 勇藏	稲垣 秋平	昭和42年度	石川正之助	加藤喜三郎	
昭和26年度	徳丸 久吉	進藤 豊作	昭和43年度	加藤喜三郎	荒巻 義也	
昭和27年度	川上 芳淳	小川 克己	昭和44年度	荒巻 義也	堀場浜太郎	
昭和28年度	小川 克己	福井竜一郎	昭和45年度	堀場浜太郎	土屋 弘衛	
昭和29年度	福井竜一郎	荻原 文三	昭和46年度	土屋 弘衛	西村要士雄	
昭和30年度	荻原 文三	前田 宗松	昭和47年度	西村要士雄	石川正之助	
昭和31年度	前田 宗松	佐藤 拾	昭和48年度	石川正之助	宮下 琴治	
昭和32年度	白川 一郎	丸山 恭正	昭和49年度	小池 富雄	高原 尚義	
昭和33年度	丸山 恭正	滝口 泰	昭和50年度	見沢 文彦	横山 忠男 山田 璋次	
昭和34年度	滝口 泰	岡田 佐吉	昭和51年度	小沼 淳	荒井 澄雄 川上 智子	
昭和35年度	関口 武夫	玉置 秀夫	昭和52年度	荒井 澄雄	山内 信雄 鈴木 雪雄	
昭和36年度	玉置 秀夫	岡田 佐吉	昭和53年度	曾我 清	比企 政美 小山八重子	
昭和37年度	岡田 佐吉	川原 明治	昭和54年度	亀井 邦夫	中村真珠子 米山 俊彦	
昭和38年度	川原 明治	渡辺 貫楯				
昭和39年度	玉置 秀夫	宮崎 房男				
昭和40年度	宮崎 房男	岡田 佐吉				

## 〔 同 窓 会 〕

### 同窓会設立の前後

今 田 正 ・ 鷺 見 篤

はじめに

先日、九段のホテルグランドパレスで、母校創立40周年式典が開かれ、併せてPTA発足30周年、同窓会設立20年式典が行なわれましたことは、誠に喜ばしいことでございます。

ところで、式典後、同窓会の松下幹事長から、私どもそれぞれに、私共が同窓会幹事長を勤めていた当時の同窓会組織、活動、同窓会の役割と学校との関係、思い出などを書いて頂きたいという依頼を受けました。しかし私共は、同窓会設立の地下作りから共に仕事をして来ましたので、二人が個々に書くよりも、連名で一つにまとめた方がよいということになり、ここに筆をとる次第でございます。

#### 1. 当時の状況

高校同窓会が設立された昭和35年頃は、日本の社会が敗戦の混乱期をのり越えて、豊かな社会作りを目ざして、活発に動いておりました。校友会では、戦争の痛手を受けたり、兵役や、空襲や、敗戦やで離散していた卒業生が、再会と再建をめざして活動していた時代を過ぎ、次の発展をめざして、新たな活動期に入った時代でした。大学同窓会は当時独自の活動を続けておりましたが、大学同窓会を校友会の組織に組み入れる動きが出たのも昭和34年でした。

高校同窓会とは申しますと、古い校友会（電機工業会）の会報（昭和21年）には、高校の前身である電機第一工業学校同窓会の会員向けの文章や、会費のことが掲載されてい

ますし、昭和24年の号にも一工同窓会々費のこと、二工同窓会々費に関する記事がありますので、高校の前身二校の同窓会は、何等かの活動をしていたことが推察されます。

しかし学制改革により、一工・二工が高校になってからは、古い卒業生から新しい卒業生への引継ぎが不十分であったためか、同窓会活動がいつの間にか休止状態になっていたのです。

#### 2. 起点

こういう状況の中で昭和33年、私共と高校卒業生の川原崎由夫氏とが、共に校友会の理事を勤めたことがありました。はじめのうちは、いわば互に見知らぬ者同志であった三人が、理事会で知り合い、機会を見ては話し合っているうちに、互に気心の通じ合う者となって来た訳です。こういうことから推して、同窓会があれば、会合を通して卒業生の和が広げられるという自信もでき、同窓会設立の話は益々はずみがついてきたのです。

私共の考えた同窓会は、はじめから校友会の下部組織として、しかも同窓会独自の活動も可能となるような新講想のもとに、昭和35年4月17日に発足したのですが、およそ1年半以上の準備期間中にいろいろな苦業があり、人と人の連繫もできたのです。この間協力して下さった方々の中には、母校の池谷武雄校長、後継の清水明校長、校友会の三村操理事長、後継の松本豊太郎理事長、校友会事務局の宮島政信局長、中川弁造氏、池田重蔵氏、森茂氏といった方がおいでになります。

#### 3. 組織の骨子

同窓会を、活動している状態で永續させるには、しっかりした組織・会則を持たねばなりません。そこでまず同窓会を校友会の一部分として認めてもらおうと考えました。始めの頃は名称も、東京電機大学校友会何々支部

になぞらえて、東京電機大学校友会高等学校同窓会としました。

一方、同窓会の内部組織としては、会員相互の親睦という主目的が実現できるよう、会員同志顔を合わせやすくすることを狙いました。総会・同期会・クラス会といった縦の系列のほか、横の系列として勤務地区別の同窓会を考え、いつでも、どこでも接触できるという構想を、今田は電話交換器にたとえて、クロスバー方式と呼び、鷺見は布地の縦糸・横糸と呼びました。

#### 4. 母校との関係

同窓会の目的の一つとして、母校の発展に協力するというのを掲げるべきか、否かを論じたことがあります。卒業生は、おそらく誰でも母校愛の心を持っているでしょうから、母校から呼びかけがあれば、同窓会の有無にかかわらず、呼びかけに応ずる人は多いと思います。卒業生の団体である同窓会も、母校からの呼びかけがあれば、善意をもって応じるのは自然の姿であると思います。だから会則に、ことさらに協力をうたわなくてもよいということです。さらに大事なものは、同窓生が、母校在学中に得た知識、技術、社会観といったものを基に、各自の道に精励して行けば、回り道でも、それが母校の発展に繋がっていくという考えです。

ですから会則には、どの学校の同窓会にも共通の、会員相互の親睦をうたい、校友会の下部組織としての一文を入れ、母校に対しては連繫を密にするという表現にとどめることにしました。

#### 5. 同窓会長と幹事長

同窓会設立当時、卒業生の年令は第1回生でも30代半ばでした。今田の場合は、長く軍務に服し（それによって勲位を受けました）が）晩学であった関係から40才は過ぎてい

ましたが、鷺見は20代でした。だから1回生であれ誰であれ、会長という名を冠するには若すぎる感じがしましたし、第一に同窓会は役員がバリバリと実務をこなさなければ、運営不可能と思いましたので、会長に相当するポストは、働く幹事の中心ということで幹事長という名称にし、母校からの協力と指導を仰ぐ意味を込めて、会長には母校々長を推戴することにしました。

#### 6. 事務所

同窓会事務所をどこに置くのか。母校内か、幹事長宅内か。校友会事務局内か。母校があるから同窓生があるのですし、先生中心に卒業生が集まるということは、私共も経験していることです。先生の一声は、卒業生を集めるのに、大きな力になります。こういうことから、事務所を母校内に設けるのも一理あります。一方会務の中心は幹事長、したがって諸連絡の中心は幹事長ということで、幹事長宅も便利です。

しかし母校に甘えるのではなく、特定の人を中心の同窓会にするのではなく、校友会組織の一部分として、しかも自主性、独自性を失わずに、同窓会の力で同窓会を盛り立てていくには、同窓会としての事務所を持ち、それを校友会事務局内に置くのがよいということになりました。

#### 7. 会費

同窓会の上部団体である社団法人東京電機大学校友会は、電機学校の卒業生、電大とその前身校の卒業生、高校とその前身校の卒業生全体の結社ですから、高校同窓会員は校友会会員になれる。高校同窓会員に校友会費を納入してもらい、校友会からの援助を同窓会の運営資金に充当しようと考えました。したがって、同窓会費と校友会費を二重に徴集せず同窓会費は取らないことにしました。（10

項関連)

### 8. 設立資金援助の願い出

話しが滑り出した頃は、打ち合せ、諸会合すべて自弁、手弁当でしたが、具体的な形で同窓会を出発させるには、相当な資金が必要でした。そこでまず校友会に資金援助方を願い出しました。その時の文書は次のようになっております。

東京電機大学校友会高等学校同窓会（仮称）設立について御援助方御願の件

かねてより校友会組織の一部としての同窓会設立について数回にわたり会合を重ね準備を進めて参りましたところ、きたる三月五日に母校において設立総会を開催することになりました。

私共東京電機大学高等学校（電機第一工業、同第二工業学校を含む）卒業生は六千余名に達しますが未だに財政的基盤も無く同窓会設立に伴う通信費の捻出にも事欠く次第であります。この苦境を御賢察の上高等学校同窓会設立のためによく御援助方を切に御願い申し上げます。

東京電機大学校友会高等学校同窓会（仮称）設立発起人 一同  
昭和三十五年一月十六日

社団法人東京電機大学校友会  
理事長 三村操殿

◎高等学校同窓会総会  
および発起人会費用

- |                |            |
|----------------|------------|
| 1. 総 会 71,000- | 合計 76,700- |
| 2. 発起人会 5,700- |            |

内 訳  
〔総 会〕

趣意書印刷費 1.50 × 5,000 = 7,500-

私製はがき印刷費	2.- × 5,000 = 10,000
総会通知送料	10 × 5,000 = 50,000
返信はがき（着払）	7.- × 500 = 3,500
諸雑費	500
小 計	71,000

〔発起人会〕

官製はがき	5.- × 40 = 200-
はがき印刷費	5.- × 40 = 200-
趣意書印刷費	5.- × 100 = 500-
送 料	10.- × 40 = 400-
会議費	60.- × 40 = 2,400-
諸雑費	2,000-
小 計	5,700

また母校に対しても支援をお願いしました。

### 願 書

謹啓 酷寒の御益々御健勝の段御喜び申し上げます。

さて私達の母校高等学校も東京電機工業学校創立以来二十年を数え卒業生も六千余名に及び益々発展致して居りますことは私達卒業生にとりまして非常に力強く思います。

しかしながら卒業生の親睦団体であるべき同窓会につき願ひまするにいまだ有名無実の状態であります。

これは私達卒業生にとりましてまことに淋しいことで強力なる同窓会の再健が各方面から切望され其の気運いよいよ熟して参りました。

こゝに私達世話人は微力ながらも高等学校同窓会設立に尽力いたしたく存じます。しかるに皆無の状態から設立致します関係上財政的にも運営上にも多々悩みもありませんので何かと御力添えを頂き度く御

願い申し上げます。

つきましては同封いたしました会則案にもとづき設立発足致し度く念願致して居りますので何卒意のあるところを御留意下されまして御指導御支援を賜りたいと存じ申し上げます 敬白

昭和三十五年一月三十日

東京電機大学校友会

高等学校同窓会（仮称）

設立世話人 川原崎由夫

（高校二十五年卒）

今田 正

（一工二十四年卒）

鷺見 篤

（二工二十三年卒）

東京電機大学高等学校

校長 池谷武雄殿

こういう働きかけに、校友会も母校も理解を示され、次のような誠に感謝すべきお返事をいただきました。

昭和35年2月27日

東京電機大学校友会

高等学校同窓会設立発起人殿

社団法人東京電機大学校友会

理事長 松本豊太郎

高等学校同窓会設立準備金

補助申入れについて（回答）

昭和35年1月16日付で願出がありました首標については理事会にはかり学校当局えも御援助方をお願いしましたところ校友会を通じて全額補助する旨の回答を戴き、2月11日に全額受領いたしました。つきましては必要の都度責任者を通じて御申出下さるようお願いいたします。

### 9. 設立世話人・設立準備委員会・設立発起人会・設立実行委員会

私共と川原崎氏3名の個人的な話の輪が広がって、具体的な形をとるようになりましたので、私共3名は設立世話人となり、有志を集めて設立準備委員会を結成しました。

準備委員会を数回開いたのち、次の段階として設立発起人会へと発展させて行きました。

設立発起人には61名の同窓生が就任を承諾して下さったのですが、第1回発起人会々合は37名の出席によって昭和35年2月12日に校友会々議室で開かれました。当日出席の先生は高橋源八先生、佐藤吉弥先生、角川一治先生、吉田宇一先生であったと思います。

この発起人会では、会則の中で、同窓会を校友会の下部組織とわかるようにしてあれば、名称は東京電機大学高等学校同窓会でよい、という修正案が出され、以後名称をそのようにしました。

なおこの頃になりますと、益々準備に多忙となりましたので、当時校友会事務局に勤めていた青木仁氏を世話人に誘い、協力して貰うようになりましたが、川原崎氏はご榮転のため本会の結成にご協力いただけなくなり、誠に残念なことであります。

第2回発起人会は3月5日に開かれ発起人の中から設立実行委員を立て、実行委員会委員長（今田）、副委員長（鷺見）はじめ会計、渉外、書記、会場係などをきめました。第3回目は、総会2日前の4月15日でした。

### 10. 校友会での同窓会事務取扱いと会費に対する考え方

設立総会も迫って来た段階で、校友会での同窓会事務取扱いと同窓会費に対する校友会の考え方を文書でお伺いしました。

拝啓

春暖の候益々御清栄の事とお慶び申し上げます。

さて高校同窓会も各方面からの御協力を得て来る四月十七日(日)に創立総会を開催することに決定いたしました。

同窓会成立後は校友会の一つの下部組織として校友会の発展のためにも活躍したい所存で御座います。

ついては御多忙中とは存じますが別紙事項に対し御意見をお伺い致し度く御願ひ申し上げます。

昭和三十五年三月十八日

東京電機大学高等学校同窓会  
(仮称) 設立実行委員会  
委員長 今田正

東京電機大学校友会  
理事長 松本豊太郎殿

別紙

一、高校同窓会事務取扱について

本高校同窓会は会員数六千余名におよびその事務繁多であり且つ校友会の下部組織でありますのでその事務所を校友会内におくことが一般事務、会員相互の連絡と会勢拡張の面で最も便利で有効と思われます。(本会則案第二条) 従って本同窓会事務取扱者を校友会にて雇用して頂く事が理想的と存じます。

二、会則案第十三条の解釈について

(一)同窓会は校友会の下部組織であり同時に校友会員なので二重の会費を取らない。

(二)支部電機会に所属する本会員は現にそれらの機関を通じて校友会費を納入しているのだからこれによって本同窓

会員の資格を保有し得る。

(三)学校法人東京電機大学が経営する高校および他の学校を卒業した者は校友会費納入により本会員の資格を保有し得る。

(四)本同窓会は特に未組織の高校卒業者を吸合し専らその親睦を深めるため活動をおこない以て校友会の会勢拡張をはかるのが主目的で本会員は校友会の行う事業の恩恵をも受ける(五)本同窓会の運営は校友会定款第四十七条の規定による費用および寄附金等でまかなう。

但し四十七条の規定は支部電機会に所属しない本会員が校友会費を納入した場合に適用されたい。

六、其の他

以上の理由から第十三条のように表現するのが適切であると思う。

以上二項で御座います

これに対し、次のようなご回答をいただきました。

昭和三十五年四月八日

社団法人東京電機大学校友会  
理事長 松本豊太郎

東京電機大学高等学校同窓会  
設立実行委員会委員長 今田正殿

高校同窓会の質問書に対する回答について

前略毎々本会のため御協力を賜り感謝に堪えません

尚高校同窓会の発足に当り並々ならぬ御尽力を傾注されつゝあることに對し深く敬意を表します。

就いては三月十八日付貴翰による質問事項に付左記の通り回答いたします  
記

一、高校同窓会事務取扱について  
同窓会の連絡事務が輻湊することは勿論予想されますが現在の校友会の財政状態では専属の事務取扱者をおくことは困難な事情にありますので一般校友会事務扱いの一環として同窓会事務も取扱いたいと存じますので何分の御協力をお願いする次第です  
尚校友会事務局の整備については理事会に計り成案を得て今後充分活動出来得よう整備に努力いたします  
表札の掲出については他の部門も含めて学園当局と接させていただきます

二、会則案第十三条の解釈について

(一)校友会費以外に同窓会費を徴集するか否かは同窓会が自主的に決定されたい(大学同窓会、支部電機会等では別途会費を徴集している例もある)

(二)項については異議はない

(三)項の高校及び他の学校を卒業したものとあるのは高校(一工、二工を含む、以下同じ)及び高校卒業後他の学校を卒業したものと意味ならば差支へない。

(四)項については異議はない

(五)項については次の事項を契約の上ならば差支へない

イ 支部、電機会に所属しその会を通じて校友会費を納入する会員の分に対しては第四七条の規定を同窓会には適用しない

ロ 第四七条適用による校友会費の二割は毎会計年度終了直後に支給する

六以上のことを諒解の上ならば第十三条の表現によるも差支へない  
三、同窓会設立に当っては定款第四六条第二項により届出で承認を得られたい

以上

このような手順を踏んで、総会開催へと進むことになりました。

11. 総会案内状と趣意書の発送

校友会の支援を頂きながら、設立実行委員会の手によって総会開催に向けて準備が進められました。B5版を縦に2倍した大きさの紙に、会則案、総会案内状、設立趣意書を印刷し、約5000名の同窓生に郵送しました。趣意書は、次のとおりです。

### 趣 意 書

母校東京電機大学高等学校は昭和十四年四月一日「電気工業に従事しようとする者に必要な知識と技能を授け、兼ねて徳性のかん養と体位の向上につとめる」ことを目的として、東京電機工業学校を設立してからすでに満二十年余を数えるに至りました。

その間、第二次大戦による戦災そして終戦とたゞならぬ混乱期を経て現在に至りました。ゆゑ、充実した同窓会をもつことができませんでした。しかし、平和にして安定な時代を迎えました今日、同窓生の友情と親睦を深めるため、充実した同窓会を作りたいという熱心な希望が多くなり、また幸い社団法人東京電機大学校友会の定かんが改正されて、同窓会は校友会の一つの組織として正式に認められるようになりましたのでこれを機会に電機第一工業学校、電機第二工業学校と

各併設中学校そして現在の東京電機大学高等学校の卒業生を一体として強力な同窓会を再発足させる気運に至りました。

この上は同窓生各位の熱心な御支援をいただき、確固たる同窓会を再発足させたい所存でありますので、何とぞ御賛同下さいませようお願い申し上げます。

昭和三十五年三月二十六日

卒業生各位

東京電機大学高等学校同窓会(仮称)

発 起 人

青木 仁 浅古庄一 安齊英夫 稲垣恵三 今村芳輝 浮田勲 内山忠剛 江川正司 江袋林蔵 榎本九二雄 大橋英夫 大森雄一 荻一郎 荻野宏泰 籠宮雄治 加藤正樹 勝山純夫 川田喜久男 木城忠雄 木村孝雄 木村敏雄 草川喜正 態倉作一 倉林純一 小池和男 小久保兼保 今田正 今野宏昭 桜井勝行 塩瀬喜一 下坂昭男 柴山茂男 杉田五郎 鷺見篤 竹内四郎 多田省三 谷沢正一郎 中野英夫 中谷正弘 野崎恒雄 野瀬健一 荻野幸三 林郁夫 平野武雄 星昭一 増田稔 松井博 松尾泰元 丸山恭弘 本橋栄一 本橋敏克 山岸和男 山崎登 山下晃史 柳町陽造 油原延治 吉川由己 吉田悦郎 渡辺和正 渡辺正司 渡辺仙

20年前の発起人の方々を、今このようにして書き連ねてみますと、大層懐かしい方もありますし、現に共に同窓会・校友会・母校関係の仕事をしている方もあります。が、思い出せない方も相当数あり、20年の年月の長さを実感しているところです。

## 12. 設立総会の開催、設立認可

同窓生、母校、校友会その他多数の方々の

御援助があって、昭和35年4月17日母校(当時は錦町の本館)5階大講堂で開かれました。当日は映画上映後に総会を開き、実行委員長(今田)、清水校長、松本校友会理事長、竹川大学同窓会長、池谷前校長から挨拶や祝辞があり、議長選出、経過報告、会計報告、組織説明、会則審議決定、常任幹事承認等の議事がありました。

また承認された常任幹事に、つぎのような書状が、同日附で出されました。

拝啓 益々御清栄の段お喜び申し上げます。此のたび諸君の御尽力により同窓会も無事新発足いたしましたことは、誠に御慶に存じます。

貴殿は常任幹事に推薦され満場一致承認されましたのでお知らせと同時に今後の御活躍をお願い致します。

なを常任幹事氏名は次の通りです。

青木仁(23年卒) 稲垣恵三(21) 大橋英夫(31) 籠宮雄治(34) 勝山紀夫(35) 態倉作一(22) 倉持悦久(21) 今田正(24) 坂井孝志(31) 塩瀬喜一(28) 鷺見篤(23) 谷沢正一郎(24) 中谷正弘(35) 野瀬健一(27) 丸山泰弘(26) 本橋敏克(29) 油原延治(32) 横山実(23) 渡辺正司(28) 以上19名(50音順)

敬 具

昭和三十五年四月十七日

東京電機大学高等学校同窓会

会長 清水 明

(氏 名) 殿

また翌日の日附で、幹事長から校友会に設立申請書を提出いたしました。

## 高等学校同窓会設立申請書

今般東京電機大学高等学校同窓会を左記の通り設立いたしましたので東京電機大学校友会定款第四十六条に依り別紙の通り会則及び名簿を添え申請致します。

記

設 立 昭和三十五年四月十七日

名 称 東京電機大学高等学校同窓会

事務所 東京都千代田区神田錦町二の二

社団法人東京電機大学校友会内

昭和三十五年四月十八日

東京電機大学高等学校同窓会

幹事長 今 田 正

社団法人東京電機大学校友会

理事長 松本豊太郎殿

承認書は次の通りです。

## 承 認 書

高校同窓会設立の件

右は所定の手続を了し之を承認いたしました。

昭和三十五年四月二十日

社団法人東京電機大学校友会

理事長 松本豊太郎

高校同窓会

幹事長 今田 正殿

このようにして、同窓会が動きはじめました。

## 13. 高等学校卒業生名簿

会員相互の親睦をはかるには、まず会員相互あるいは会員と同窓会との連絡が必要ということで、同窓会では発足当時から、総会通知の返信、母校や校友会の資料を整理して、名簿編集に備えておきました。しかし費用の関係で、同窓会での単独発行は困難でした。

一方上部団体の校友会は、事業の一つとして卒業生名簿の発行を担っており、先に昭和28年版を発行してありましたが、さらに昭和38年になり、新名簿発行の計画をたてることになりました。

同窓会はこの計画に協力するために母校・校友会・同窓会三者合同編集体制の一環として、昭和38年11月に、同窓会側は青木仁氏を委員長に、坂井孝志氏、籠宮雄治氏ならびに今田の3名を副委員長に、また各クラスより1~2名を委員に立て、「高等学校卒業生名簿編集委員会」を構成しました。

こういう体制で努力した結果、2年後の昭和40年11月25日に、東京電機大学高等学校卒業生名簿(昭和40年6月版)を刊行することができました。

## 14. 勤務地区別名簿

勤務地区別に同窓会を作ると、会社や工場 の帰途にでも、時には昼休みにでも会合が開けるし、勤務先あるいはその周辺に同窓生が居るとわかれば、何かにつけて便利であり、特に新卒業者にとっては、心強いことであります。しかし勤務地区別同窓会を作るにしても、基礎となる地区別名簿がありませんので、地区別名簿作りに取りかかりました。

地区別名簿は、総会案内の返信はがき1500名分、母校の生徒募集案内を兼ねた調査(返信)カード1000名分、校友会の資料を分類整理し、都内は23の区毎と都下に、その他は大都市別、道府県別に組み立てられました。

この勤務地区別名簿は校友会の御援助もあり、2回発行することができました。名簿の体裁は、1回目は鉄筆の、いわゆるガリ版刷りB5版横綴じ、2回目は、その後の卒業生の分も加えて、タイプのガリ版刷りB5版横綴じで、厚手の黒い紐綴じファイルをつけ、金文字で勤務地区別会員名簿とし、社団法人

東京電機大学校友会と東京電機大学高等学校同窓会と連名で刻されています。

#### 15. 勤務地区別同窓会

地区別名簿を見ると、同窓生は中央区と千代田区に最も多く分布している上、この地区には同窓会事務所にも母校にも近いとあってとりあえずこの2地区に同窓会を設けることにしました。このため母校の吉田宇一先生、鈴木治郎先生を世話人をお願いし、今田も世話人の一人となり、昭和39年10月28日、両地区有志の打合せ会を開きました。その結果、中央地区に発起人19名、千代田地区に発起人22名を得、同年11月21日(土)6号館食堂で出席者70名によって、中央、千代田両地区同窓会を開催しました。

席上、千代田地区幹事に小竹四郎氏、中央地区幹事に染谷和雄氏、同補佐に木村勝治氏と石島正治氏が選出されました。

#### 16. クラス委員会

クラス会は同窓会組織の中核ともいうべき大切な部分ですから、同窓会はクラス会を支援すべきだということになりました。

クラス会の支援と言っても、当初の同窓会は財政的にも貧困で、助成金を贈るといったことは不可能でした。せいぜい校友会の助力でクラス会の通知状印刷とか、宛名書きをするといった程度でしたが、せめて有志にクラス委員を引受けて頂き、その方々の協力を得てクラス会を盛り立てたいものと考えました。それで、簡単なものでしたがクラス委員名簿をつくり、昭和40年11月20日(土)小石川校舎でクラス委員会を開きました。

この日は小石川校舎での最初の電高祭とあって、昼間かなりの賑わいでした。クラス委員会は電高祭閉門後5時30分より開始され、23クラス委員の出席を得、クラス会やクラス委員に関する説明をして、協力をお願いしま

した。ただしこの時の開催案内状は、クラス会幹事会という名称で印刷しました。

#### 17. 地区幹事会

中央・千代田両地区同窓会の次の段階として、都内の城東、城西、城南、城北、三多摩、それと川崎、横浜に、地区同窓会を設置することを考えていました。ただし、千代田、中央地区の場合、世話人を中心に地区同窓会設立の準備をし、地区同窓会(会合)を開いて地区幹事を選出したのですが、今度はまず地区幹事になる人を定めておき、その方の協力を得て、地区同窓会結成まで漕ぎつけようとしたのです。だからまずそう云う意味の依頼状を出したのち、趣旨説明と協力依頼を兼ねた地区幹事会を、昭和40年11月21日(日)小石川校舎で電高祭終了後開く予定にしておりました。ところが前日(クラス委員会終了後)の夜半に、小石川校舎の一部に火災があり、地区幹事会は流会となってしまいました。出席という返信は、12名あったのですけれど……。

#### 18. 若人の像建設基金

小石川校舎玄関右手、植込みの中に元気潑刺たる青年のレリーフ像があります。この像の建設の話は昭和39年3月28日(土)の総会において湧き上がったのです。

当日は100名の出席を得て議事も終了し、懇談会に移ったとき、母校からおいで下さった清水明校長、平野三郎教頭、佐藤吉弥先生から、建設予定の小石川新校舎の構想・環境・規模などについて説明がありました。その後佐藤先生から、「新校舎壁面に、若人を象徴するブロンズ像があればよいと思います…」という話が出ると、校友会の長沢三一郎常務理事が「昔、一銭銅貨を集めて銅像を造った話があります…」と引き継ぎ、これを受けて籠宮雄治氏が、「新校舎壁面に若人を表現するブロンズのレリーフを、僕等の10円銅貨で

造ろう…」と呼びかけました。それですぐに募金をしましたところ、5円、10円の銅貨その他計3,165円が集まりました。

つぎの募金は昭和39年11月、前述の千代田、中央両地区同窓会の会場でおこなわれました。

そのつぎの募金は、昭和40年5月22日の総会でおこなわれました。当日は小石川新校舎体育館2階で懇親会がおこなわれ、来賓、先生を含めると250名の出席があり、8,515円が集まりました。これらの醸金は、レリーフ基金と呼ばれ、後に学園の御援助と、在校生(生徒会)の醸金と合わせて、学園の60周年記念として、河部先生作の「若人の像」が実を結びました。

同窓会・学園・母校・生徒会の四者協同で出来たこのレリーフは、四者の心を結ぶシンボルであって欲しいし、小石川で学ぶ生徒には、科学する青年の像として、前途に明るい希望を抱かせる像であってほしいと念願しております。

#### <おわりに>

私共と川原崎氏3名の、「同窓会が無いと淋しいね」といった会話がもとで、輪が拡がり同窓会ができました。私共が幹事長を勤めていた時代、会員諸兄のご協力と役員のご努力に支えられ、学園・母校・校友会のご援助を戴きながら活動を続けて参りました。お蔭様で同窓会の基礎もでき、さらに発展して会員相互の親睦、母校との連繋に少しは役立つ同窓会に育ちました。あらためて、これらの方々に御礼申し上げます。

私共以後幹事長は、三代青木仁氏、四代小竹四郎氏、五代柴山茂氏、現在の松下祐輔氏と引継がれ、役員がそれぞれの時代、それぞれの任にあたるという中で、今日の同窓会が築かれて来た訳ではありますが、現在の同窓会の運営は、私共よりかなり若い世代の役員が

中心になっております。私共はこれを力強く思い、喜んでおります。

以上同窓会をご支援下さった皆様に、心から感謝申し上げますと共に、今後も会員諸兄が同窓会に関心を寄せられご協力下さいますよう、また学園・母校・校友会の御支援が戴けますよう、切にお願い申し上げます。

未筆ながら、会員諸兄、学園、母校、校友会が、時代と共に益々発展されますよう念願いたしております。



## 最近の同窓会活動の状況について

柴山茂男  
松下祐輔

昨年（昭和54年）は私達の母校である東京電機大学高等学校が創立されてから40周年にあたりと共に、高等学校同窓会が生れてから20年目という記念すべき年であり、PTAと同窓会よりなる“高等学校創立40周年記念委員会”が結成され、学校が協力する形で数々の記念事業が行われました。

昭和35年4月、同窓会結成当時約6000名であった会員も現在では20000名近くにも達し、社会の各方面で活躍しております。

私達同窓会役員は、こうした多くの会員相互の親睦と、大勢の先輩により築きあげられて来た良い伝統を持つ母校の増々の発展を図るべく、微力ながら同窓会活動に努めてまいりました。会員の中には最近の同窓会活動について御存知ない方もおられると思いますので、最近の活動の主要点を御報告したいと思います。なお同窓会に関する活動の状況や会員への連絡は、目下のところ校友会（社団法人東京電機大学校友会）の発行する会誌“工学情報”に頼っております。従って校友会々員である方々には、同窓会の活動の状況や同窓会からの連絡が届き、会費切れ等の理由で校友会より退かされている同窓生の方々には、こうした情報が伝えられておりません。このような連絡方法は同窓会本来の姿ではないかも知れませんが、活動資金の制約等から現状の方法にならざるを得ない状況にあります。私達同窓会役員としても会員全員に情報が行きわたるよう検討を進めておりますが、当面の対応策としては、クラスの代表者を集めて毎

年1回行はれるクラス委員会へ、貴クラスの代表を出席させて頂き、情報の中継者となってもらうこと、あるいは校友会に加入され、工学情報をお読みいただくことが近道と存じます。

### (1) 同窓会総会

同窓会では、いろいろな会合を持ちますが総会は最も主要な会合です。総会は毎年一回開催され、事業報告、会計報告、事業計画、予算、役員承認などの議事が行なわれます。

総会は同窓会の最高決議機関であり、役員は総会の議決に従って会の運営にあたります。最近の総会は5月下旬あるいは6月上旬に設定されることが多く、毎年3月頃から資料の作成や会場の選定をはじめております。また総会終了後に行なわれる懇親会は、同窓会の目的の一つでもある、会員相互が旧交を温め、又恩師との再会に親睦を深めあう恰好の場ともなっております。

最近の総会開催日と場所は次のとおりです。

- 14回総会 昭和48年5月26日（土）  
午後5時30分より 湯島会館  
会員 108名出席
- 15回総会 昭和49年6月8日（土）  
午後6時より 小石川校舎  
会員 84名出席
- 16回総会 昭和50年6月7日（土）  
午後3時より 小石川校舎  
会員 28名出席
- 17回総会 昭和51年6月11日（金）  
午後6時より 湯島会館  
会員 39名出席

- 18回総会 昭和52年5月21日（土）  
午後5時より  
東京電機大学7号館会議室  
会員 37名出席

- 19回総会 昭和53年6月3日（土）  
午後5時より 小石川校舎  
会員 34名出席

- 20回総会 昭和54年6月2日（土）  
午後2時30分より  
グランドパレス ホテル  
会員 119名出席

特に第14回総会は、“同窓生が巣立って30年そして、歴代校長先生を囲む総会”と銘うち、生存されている歴代校長先生をはじめ、多数の教職員及び元教職員の方々をお招きし盛大に挙行されました。また20回総会は、高等学校創立40周年記念式典終了後、同会場内で行いました。

### (2) クラス委員会

クラス委員会は、クラスのまとめ役となって活躍下さっているクラス委員より成る同窓会の一機関です。同窓会結成後数年間は毎年定期的に開かれておりましたが、一時期休会が続き、昭和50年9月の電高祭当日小石川校舎の図書館で40名のクラス委員及び常任幹事が出席して再会されました。また当日は多数の先生方を交え「卒業生にお願いすること、学校に望むこと」と題して青木元幹事長の司会で討論会も行なわれました。

翌年の51年のクラス委員会は、12月5日に会場を学外の国電田町駅近くのレストランに設定し、クラス委員のご協力により出来上がった全卒業生名簿の完成祝いを兼ねて行う

予定で、多数のクラス委員の方々より出席のご返事を頂きましたが、8日間にわたる国鉄ストのあおりを受け流会になってしまいました。また53年度の場合は、定例の53年11月の電高祭当日のほかに、創立40周年記念事業を控え、記念事業への協力要請や連絡等もあり54年2月に幹事・クラス委員懇談会という形で年度内に2回の会合を持ちました。

### (3) 教職員連絡会

高等学校の先生方と常任幹事の皆さんとは普段直接会う機会も意見の交換をする事も少いので、相互の理解と親睦を図る交流の場として毎年9月中旬から10月上旬にかけて年1回開催されています。

### (4) 会員講習会

大学々生の会員のうち、新しく同窓会々員となられた方々を対称として、東京電機大学の会員を主に呼びかけ、希望者をつのって一般教育科目のうち数学、英語を中心とした実力養成講習会で、サマースクールと名づけられ、第1回は昭和49年7月12日より20日までの1週間開かれました。その後は夏休みを利用して期間は1週間とし毎年定期的に行っております。なお大学の夏休み期間が8月より9月中旬と変更されましたので、52年からは9月上旬に開催されるようになりました。

### (5) 準会員説明会・新クラス委員懇談会

毎年3年生の終業式の日に、特別に時間を頂き新会員となられる方々へのPRとして、全員に同窓会の歴史、組織、活動をわかりやすく書いたパンフレットを用意し、その概略



を説明して理解して頂くと共に、同窓会活動に積極的に参加するよう呼びかけております。また同日の説明会終了後、特に新しくクラス委員になって頂く方々と常任幹事の懇談会を開催し、クラス委員の役割とか、同窓会のあり方や学校との関係、同窓会の運営方法等に関し意見交換、討論を行います。

#### (6) 卒業記念品

同窓会では新しく同窓会々員になられる方の卒業と、その前途をお祝して有意義な記念品を贈っております。最近お贈りした記念品は

昭和52年度卒業生

同窓会名入り南部鉄製栓抜

昭和53年度卒業生

同窓会名入り南部鉄製扇釜台

昭和54年度卒業生

同窓会名入り南部鉄製栓抜

このほかに卒業証書挟みも毎年お贈りしております。なおこれらは校友会と協同で実施しております。

#### (7) クラス委員名簿の発行、全卒者名簿の整備

クラス委員の名簿の作成は毎年5月に、各クラスや卒業時のクラス担任の先生より推選されたクラス委員候補者に対し、総会案内状(クラスの方々への連絡依頼の形)と共に、クラス委員への就任依頼状を発送し、本人の承諾を頂いた方々を卒業年度別に整理して名簿を作成し、クラス委員のみにお送り致しております。クラス委員会が再開された前の年の昭和49年4月に第1回が発行され、その後毎年改訂発行しております。

また全卒業生名簿につきましても、同窓会が全卒業生名簿を整備することは同窓会の最大の事業であると同時に卒業生(同窓生)に対するサービスとして当然のことであり最も基本的な重要事項であるとの考え方にたち、同窓会ではクラス委員の重要な援助(クラス会開催毎に住所を調べ同窓会本部へ報告等をお願いしております)をもとに可能な限りの努力を払い名簿の整備を行い、名簿の改訂発行に備えております。名簿の改訂発行は5~7年毎に行はれることが通例となっております。現在昭和50年に発行されたものが最新版であります。

#### (8) クラス会活動の振興

及び校友会事業への協力

54年4月現在、卒業クラスは335クラスに達しており、同窓会では、それぞれのクラスにおける自主的な活動が、同窓会が大きくなり充実していくための基本であるとの考えから、クラス会活動に対して補助金の交付を行っております。補助金は少額ではありますが、クラス委員からクラス会が開かれることを同窓会宛に報告して下されば、年1回に限り2,000円が支給されます。そのほか校友会から通信費の一部として、クラス会開催の連絡のための往復はがき代の実費支給や、お祝金として5,000円が贈られます。さらに先生が出席される場合は、学校法人東京電機大学より5,000円が贈られますので、会員の方々は、これらの補助金やお祝金を大いに活用してクラス会を活発に行ってください。

同窓会の行う事業の中に校友会事業への協力があります。校友会とは学校法人東京電機大学が経営する全学校(大学院、大学、短期大学、高等学校、電機学校)の卒業生で校友

会費を納めた会員によって組織されている、社団法人東京電機大学校友会のことで、高校同窓会も校友会の一組織団体として、高校同窓会々員の中から現在87名の評議員と7名の理事を送り校友会の行う諸事業の運営に協力致しております。

#### (9) 常任幹事会

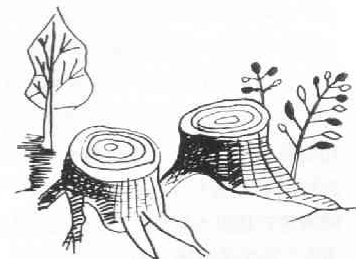
同窓会の執行運営機関として25名の常任幹事をもって組織され、毎年8月、12月、1月は休会とし、そのほかは毎月1回定期的に行われております。幹事の任期は2年で、毎年半数が総会の承認を得て改選されます。改選された新任幹事を加えて正副幹事長が互選され、幹事長が中心となって議事が進められます。

昭和35年4月に設立されてから現在まで活動の牽引役を果してくれた歴代幹事長は次の方々です。

- |      |                |
|------|----------------|
| 第1代目 | 今田 正           |
|      | 一工 II E 昭和24年卒 |
| 第2代目 | 鷺見 篤           |
|      | 二工 I E 昭和23年卒  |
| 第3代目 | 青木 仁           |
|      | 一工 I E 昭和23年卒  |
| 第4代目 | 小竹四郎           |
|      | 一工 II E 昭和23年卒 |
| 第5代目 | 柴山茂男           |
|      | I C 昭和30年卒     |
| 第6代目 | 松下祐輔           |
|      | I M 昭和34年卒     |

議題は各種事業を円滑に行うための諸事業のほかに、学校法人の評議員の推選や校友会評議員、理事の推選等が主なものであり、校友会の会議室で2~3時間の討議を行います。以上が最近における高等学校同窓会活動の状況ですが、同窓会活動をさらに活発化、発展

させるためには、会員皆様積極的に同窓会に参加されることを希望いたします。



## 吹奏楽部記念公演

東京電機大学高等学校創立40周年記念演奏会が去る54年11月24日東條会館のホールにて本校の吹奏楽部により、御来賓多数御来場して頂き盛大に行なわれました。持丸先生の作曲された当校歌が含まれているユーグントアーフにより幕が上がり伊藤（教頭）先生により祝詞が述べられ持丸先生とOBの浅見君の司会により演奏が繰り上げられました。曲目はドボルザーク「新世界」、シューベルトの「未完成交響曲」、そして持丸先生がジャズ風に編曲された「スターダスト」、そして最近ヒットした映画音楽より「スーパーマンのテーマ」他に10曲、シンフォニーからジャズ、映画音楽と幅広い内容のプログラムで、構成され観客と演奏者が一体となった素晴らしい演奏会となりました。

さて当吹奏楽部も昭和22年に結成し、この間歴代の校長先生をはじめ多くの方々に見守られ今日まで発展して来られました。そして現在OBも200名を越えようとしております。また昭和40年には、OBと現役の親睦をはかり電高吹奏楽部の育成に資する事を目的としOB会が発足致しました。私も幸か不幸かOB会の会長を務め今年で8年が過ぎてしまいましたが、現役当時を振り返ってみますと現在の様に立派な楽器は少なくメッキがはげた楽器で演奏活動をしていた頃が懐かしく思い出されます。そして特に印象に残っているのは、私立学校の音楽会にて上野の文化会館でOB合わせて総勢80名という大人数で演奏し盛大な拍手を頂いた事、重症身体障害者の施設へ慰問へ行き大変に歓迎された事など今でも忘れられません。



こうした感激を後輩達にも体験して貰いたいと思い以前より演奏会を企画しておりましたが財政的にもまた多くの人力を要し、なかなか実現するには至りませんでした。そしてやっと幸運にも、私どもOBと現役が協力し昨年母校の創立40周年記念演奏会を開くはこびとなりました。これも諸先生をはじめ皆様のご支援のお陰と心より厚くお礼申し上げる次第でございます。そしてこの演奏会により更に先生、OB、現役と親睦を深めご父兄をはじめご来賓の方々にも歓心して頂いた事と思います。また現役にとっても高校生活の中で良い思い出となった事でしょう。この感激をいつまでも忘れずに伝統あるクラブを育てていって貰いたいと思います。

今後の母校の発展を願ひ私も今一層後輩の育成に力を注いで行きたいと思ひます。今後とも皆様のご支援をたまわります様お願い致します。

吹奏楽部OB会々長  
伊藤靖夫（45年度卒業）

## 記念講演「北極点への旅」

高校創立40周年記念講演会が55年1月16日日比谷公会堂で、在校生を対象に催された。

昨年6月2日には創立記念式典、それにもなう記念事業として、学校、父兄ならびに卒業生諸兄の協力ののもとに校庭整備と記念植樹が完成しましたが、何か生徒諸君に直接40周年を意義づける行事はないものかと種々熟慮された結果、上記の講演会が計画、実施されたわけです。

「北極点への旅」と題して極点踏破の隊長として活躍された、池田錦重氏（日大北極点遠征隊長）を講演者としてお迎えし、講演とスライド映写による説明、質疑応答という順で進められたわけです。

吉田校長の挨拶、講演者の紹介に始まり、池田氏の講演に入る。

『1967年に最初の北極点への志向がはじまり、いく度となく計画がたてられ、今回の計画は丁度3度目の計画であった。過去における我々の計画の挫折は、現地における輸送問題と資金面での計画のいきずまりがあった。

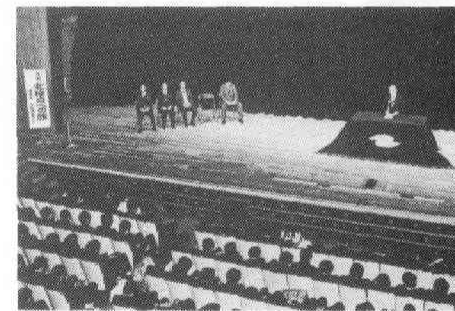
これも近年になって民間の小型航空機が自由に使えるようになったことから、極地遠征計画は一変して広範囲に動けるようになった。

こうした過去の総決算としてカナダの最北の島、エルズメア島から犬嚮で海氷上を航空機のサポートを受けながら北極点まで旅したあと、島の内陸氷床の端にあるユナイト・ステート・レンジと呼ばれる山岳帯に入り、登山活動をしたあと、西のユーレカまで氷床を横断し、あわせて寒冷地における人体医学、気象、雪氷、海氷を含む学術調査活動を行

なうという事で計画が進められた。

隊は我々の組織（日本大学山学部と、そのOB会である桜門山岳会）のほか医学部、歯学部の先生、OBが参加、さらに読売新聞社、NTVと北グリーンランドの11名のチューレ、エスキモーが加わり、合計32名で組織された。

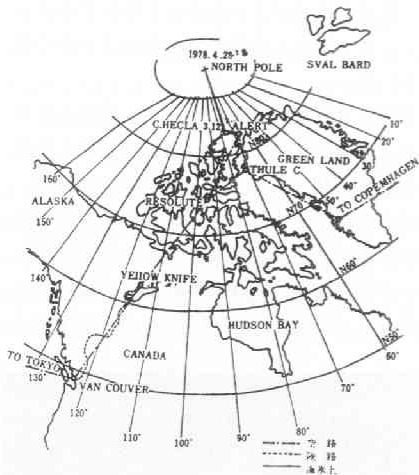
1977年9月30日すでにチューレ地区にエスキモーと共に住んでいるO隊員のもとにH隊員を送る。装備の調達、エスキモーの雇用、一組の犬嚮チーム作りと、エスキモー語の勉強のためである。11月に入るとすぐS隊員をカナダへ（荷物の輸送経路の調査と補給と緊急用フライトのための航空機会社の選定のため）。



こうしているうちに今年から必要になったカナダ政府の遠征許可書が届き、新年を迎え中旬には、発注した荷物の一部がカナダに集結しつつあった。このためS隊員とT隊員がバンクーバーに先行した。グリーンランドにいるO隊員のもとより、「今年のグリーンランドではトナカイの毛皮が不足しているため調達不能」との電報が入り、O隊員をカナダ

側で調達すべくリゾートに送った。

本隊は2月2日羽田を出発、カナダバンクーバー経由、今回の出発点であるカナダの北西準州の首都イエローナイフにむかった。ここで先行隊と合流、別送中の荷物を受けとり飛行場の格納庫を借り、荷の開梱と再梱包作業をする。このあと隊員は定期便でリゾートに移動。残った1隊長他数名は大形飛行

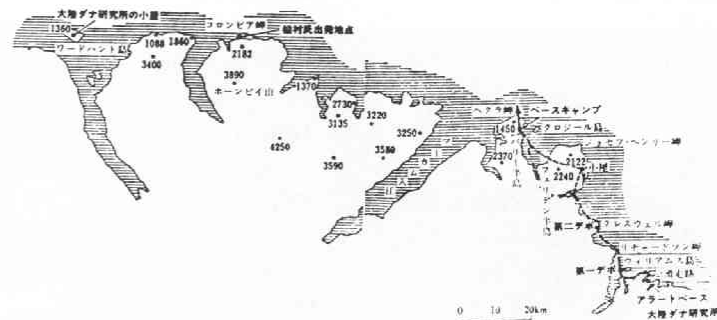


機ハーキュリーに荷をのせ2月15日未明にカナダ北極諸島の最前線飛行基地リゾートに飛んだ。全員で荷の積みかえをしたあと、直接エルズメアー島のアラートに飛ぶ組と、グリーンランドのチューレにエスキモーと犬を連れていく組にわかれる。2時間の飛行後北緯80度のチューレの飛行場に到着、真昼というのにこの地まで来ると太陽は一日中水平線下に沈んで夜ばかりの世界であった。ここで先行していたH、O隊員と11名のエスキモーと185頭の橇犬の出迎えをうけ、1人1人の紹介と、この遠征のために大切に調教されて来た犬達との出合いにしばし感激の一

時を味わう。

すぐに犬の積み込み作業が開始され、飛行機の中の狭い箱の中に静かにおさまる。犬を管理するエスキモーが輸送機(ハーキュリー)に乗り込み飛びたち、4時間後真暗なアラート基地に降り立った。他の隊員達はDC-3でその後をおう。ここで予期せざる事故がつかれる。それはハーキュリーが飛び立つと同時にパイロットが機内に暖房をかけたため、それまで $-30^{\circ}\text{C}$ 以下の寒さの所にいた犬達が暑さのため狭い箱の中で暴れだし、すぐ暖房を冷房に切りかえたものの、犬達は空気の入りに殺到し、互いに自分達の体で入口をふさいだため中にいる116頭の犬が酸欠のため死亡したのである。突然の事故で一時は自失茫然となり「遠征中止」が頭の中を横切り絶望的な状態になる。とにかく生き残った犬と荷物を機内から降ろし、亡くなった犬達を箱に納め、リゾートコートで焼却処分するため、一部の隊員と共にもどる事にした。残った隊員とエスキモーは滑走路脇にある大陸氷棚研究所の一室に全員入り、簡単な食事と休養をとる。翌日降ろした荷物の移動が残った犬と2台のスノーモービルではじまる。日中とはいえ真暗で気温 $-37^{\circ}\text{C}$ のもとの作業である。今回の事故の善後策を協議、かわりの犬を集め、新しい犬橇チームを作り、あらためて極点に向って出発しようという意見におちついた。すぐにエスキモーの中から代表を選びグリーンランドに送った。1週間後に2台のDC-3機で新しい100頭の犬をつれエスキモー達がもどってきた。そのときの感激はいまでも忘れることが出来ない。

やがて極点踏破に向って、すべてが再開された。3月1日にベース・キャンプ建設、BC週辺では動物が多く、移動中ジャコウ牛の群、ウサギ、オオカミを見ており、白熊が歩

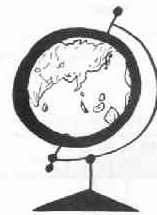


きまわっているとの報告をエスキモーからうけ、この日から鉄砲をもたない隊員の1人歩き禁止。気温は $-42^{\circ}\text{C}$ 以下と寒い。3月5日温度計の水銀が切れているのでよくみると $-49.5^{\circ}\text{C}$ あった。この日、太陽が水平線にはじめて顔をだす。BC週辺の整理もほぼ終り無線用アンテナに日章旗、デンマーク、カナダ、大学旗の順で旗をつけ祝う。3月12日いよいよ北極点に向う日である。気温 $-42^{\circ}\text{C}$ 無風快晴、12台の各犬橇に500kgの荷物と人間同乗、毎日10kmから20kmほどしか進めない。

4月19日の夜の定期連絡では永上キャンプから今日1日で41km進んだと報告入る。

4月28日天幕を張り、天測を行う。結果午前3時30分、 $N89^{\circ}59'$ 、 $W125^{\circ}$ と出た天測誤差を考へても極点である。かくて北極点を確認す』

以上、講演ならびにスライド映写説明からその内容を記しました。実施に至るまでの準備、実行時における諸々の労苦、予期せぬ出来事とその対応、人間関係の問題点、食事気象現象等々。興味深い講演でした。3時30分校長の謝辞で終了。(鈴木治郎記)



◆ 記念事業のあゆみ ◆

昭和53年 1月

東京電機大学高等学校

創立40周年記念委員会準備会発足

昭和53年 3月

東京電機大学高等学校

創立40周年記念委員会準備会を改組。

東京電機大学高等学校

創立40周年記念委員会 発足

昭和53年 12月

創立40周年記念事業寄付金募集趣意書

発送。

昭和54年 4月

創立40周年祝賀広告(記念誌)募集

昭和54年 6月

創立40周年記念式典挙行、記念講演  
(平岩弓枝先生)、パーティー開催  
グランドパレスホテルにて

昭和54年 10月

校庭整備及び記念植樹完成

昭和54年 11月

ブラスバンド 特別演奏会開催  
東条会館ホールにて

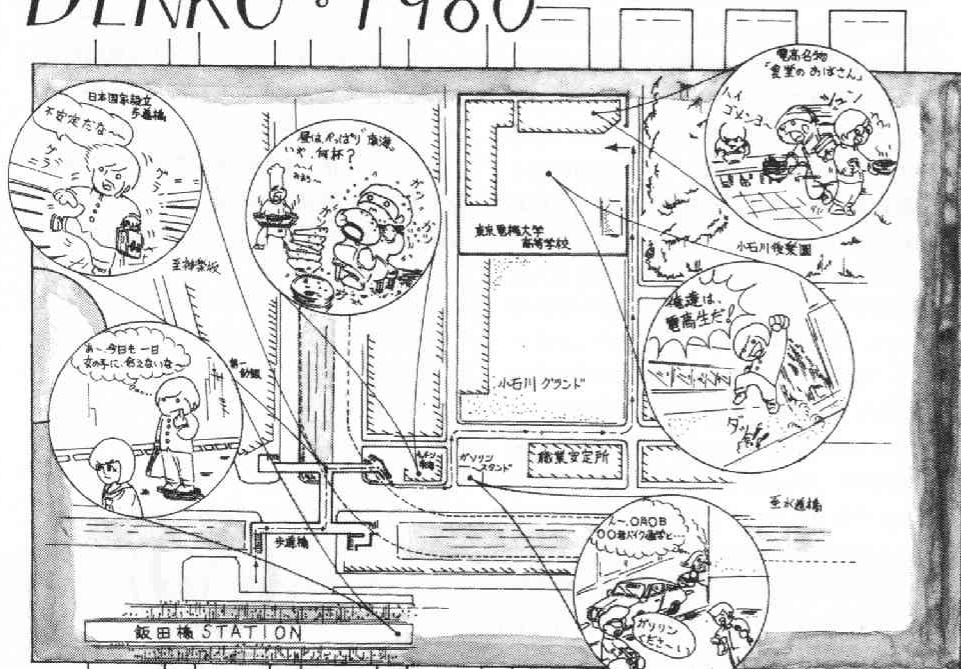
昭和55年 1月

記念講演会「北極点への旅」  
池田錦重先生、日比谷公会堂にて

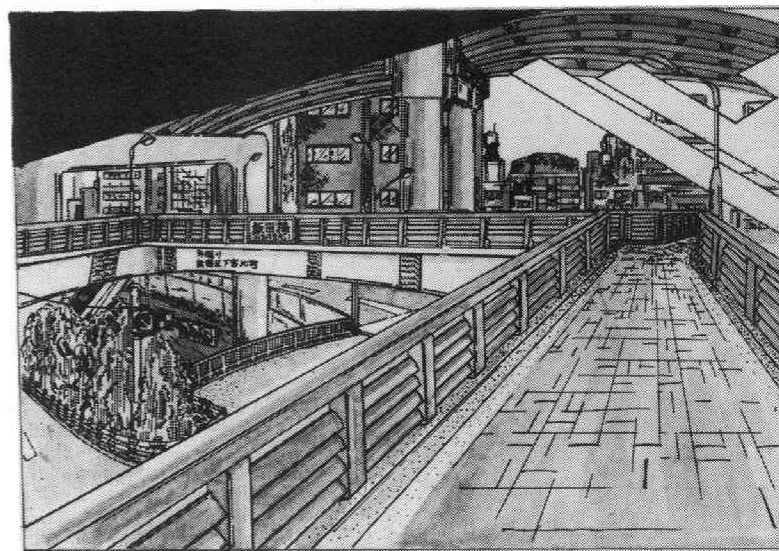
昭和55年 6月

高等学校創立40周年 記念誌発行

# DENKO・1980



在校生より寄稿



◆ 編集後記 ◆

40周年記念事業のハイライトである記念式典が挙行され、早や一年。記念誌を手にとってみると、長かった……そして時の流れの速さが身にしみるこのごろです。

当初の構想より、紙数も内容も2倍近く成長しました。また企画としては、小冊子にはユニークなものも入れたと自負している部分もあります。そして非常に多方面の方々に種々の方向で参画していただきました。

この小さい記念誌が、教職員、PTA、卒業生そして種々御援助いただいた方々の間にいろいろな話題を提供できればと願いつつ、御協力に感謝し、編集の任を終らせていただきます。

編集担当 柴山 茂男  
石崎 泰司

東京電機大学高等学校  
創立40周年 記念誌

昭和55年 6月30日 発行

編集兼発行者 東京電機大学高等学校  
創立40周年記念委員会  
東京都文京区後楽1の7の26

印刷所 ユニバーサル企画

株式会社 有末電機

代表取締役 有末美義  
保谷市泉町二ノ二〇ノ二四  
電話〇四一四一四二一四〇七二

昭和二七年高等学校卒

山下電気保安管理事務所

山下義信  
鹿児島県名瀬市長浜町三ノ一四  
電話〇九九七五―三一〇五―一四

昭和二〇年電機学校卒

有限会社 角田運送

代表取締役 角田善一  
戸田市本町四ノ一五ノ二〇  
電話〇四八四一四一丁四二七

岡崎電機株式会社

代表取締役 岡崎勝  
相模原市御園五ノ三ノ一  
電話〇四一七四一〇七〇九

昭和一七年東京電機第一工業卒

内山電機工業株式会社

代表取締役 雨宮剛  
杉並区南荻窪四ノ四五ノ一  
電話 三三四一五一一六

昭和九年電機学校卒

観世流能楽教室

佐々嶋 長治  
北区赤羽二ノ一七〇二二  
電話 九〇一四八〇九

谷部電気工業株式会社

代表取締役 谷部吉男  
北区中里二ノ一九ノ四  
電話九一八―六四四八

昭和三二年電機学校卒

日本電計株式会社

代表取締役 高田啓伸  
台東区上野五ノ一四ノ二  
電話 八三四一六三二

昭和二四年高等学校卒

小峯商事株式会社

代表取締役 小峯宏  
墨田区江東橋三ノ三ノ八  
電話 六三一―三九五六

昭和二六年工専卒

モデン工業株式会社

取締役社長 関泰雄  
千葉市松波三ノ一ノ十九  
電話〇四七―五五―一九二

昭和三二年高等学校卒

縄田特許事務所

弁理士 縄田徹  
文京区本郷四ノ二ノ二  
電話 八四一―六八八一

浜川電機工業株式会社

代表取締役 清水田正機  
田無市芝久保町四ノ五ノ五  
電話〇四一四一六―一五五九

消防機械 浜園商店

定留安秀  
江東区塩浜一ノ三ノ七  
電話六四五―九八〇九

坂井電機株式会社

代表取締役 坂井弘幸  
文京区本郷四ノ二九ノ一六  
電話 八二一―六六二二

昭和四年秋電機学校卒

大和無線電機株式会社

代表取締役会長 小宮寅夫  
千代田区神田司町二ノ二二  
電話 二五二―二二三二

食品油濾過機の

株式会社 コマツ製作所

取締役社長 小松由太郎  
大田区西糺谷三ノ二六ノ一三  
電話 七四四―一八〇〇

昭和一七年東京電機工業学校卒

青木寿賀三商店

代表取締役 青木寿賀三  
大阪市東成区東中本一ノ二五ノ三二  
電話 〇六一―九七六一―〇八六六―九

<p>昭和一八電機学校高等工業科卒</p> <p><b>菅原電気管理事務所</b></p> <p>菅原 信 夫</p> <p>荒川区西尾久四ノ五ノ三 電話 八〇〇一―一四六</p>	<p>昭和三三年高等学校卒</p> <p><b>飯塚勝美</b></p> <p>株式会社 丸愛勤務</p> <p>大宮市桜木町四ノ四六八ノ二二 電話〇四八六一四―一四九二一</p>	<p>昭和二八年高等学校卒</p> <p><b>相崎勝蔵</b></p> <p>山洋電気(株)勤務</p> <p>岩槻市東岩槻五ノ一ノ一七 電話〇四八七一五七―二六九</p>
<p>昭和五年電機学校高等工業科第一回卒</p> <p><b>小濱 泰一郎</b></p> <p>東神電気工業(株)社長付 株三英電機製作所社長付</p> <p>千葉市幕張西二ノ一五棟三〇六 電話 〇四七二―七三―四九六一</p>	<p><b>島村全真</b></p> <p>協同乳業(株)東京事業所勤務</p> <p>大宮市植竹町一ノ七四五 電話〇四八六一六―一五七六</p>	<p>昭和五四年高等学校一年上五組</p> <p><b>谷黒拓治</b></p> <p>古河市錦町一三五 電話〇二八〇―三二―四五八</p>
<p><b>山本生花店</b></p> <p>山本 隆 三</p> <p>荒川区西日暮里二ノ九ノ二 電話 八〇一―〇三二</p>	<p><b>高橋勇八</b></p> <p>北区浮間四ノ三〇ノ四 電話九六九―七七六六</p>	<p>昭和五十四年度</p> <p>PTA役員一同</p>

## 寄付者御芳名録 (順不同、敬称略)

小田切孝司 岸本貴敏 山本睦 中村一郎 坂口久美 木下和平 横尾与四郎 佐久間次雄 小林信正 青木寿賀三 小川祐一  
 黒岩君夫 五月女勇 片野義雄 吉田宇一 西川辰雄 佐々嶋辰治 山本繁春 勝谷幸營 村越源一 鴨田信 韓述龍 実川武  
 夫 田悟敏安 大井昭二 西沢武見 桜井健一 坂爪喜内 井田博志 渡辺和正 豊田健造 木塚文三郎 林繁 平賀幸吉 浦  
 野正次 伊藤一雄 金子晋 木塚文二郎 大原恭一郎 多田安次 中山芳男 山田璋次 縄田記助 小南泰造 岡田臣司(信  
 次) 久保田半蔵 栗山光央 桜井猷祐 清水岩生 岩崎昭二 池ヶ谷道夫 井口昭二三 宮野芳男 吉田郁夫 大野勇三 荒木  
 晋吾 仙波薫 北村功男 川田順平 綿井彰 関口三平 横山昭司 藤本義夫 中林恒太郎 福泉孝 中島淳 中村英二 瀬山  
 忠男 木村憲一 佐藤一雄 安藤豊 高尾栄一 各務忠夫 池田和夫 佐藤敏男 秋本三郎 梅沢大三郎 鹿島孝一 藤戸和夫  
 中村政雄 三沢三郎 渡辺清一 高尾栄一 加賀谷克 児玉考二 五水会 蛭間恵治 阿久津功 深井一雄 富山賢 山田忠則  
 小泉敏雄 川原祥宏 山崎信夫 横山実 佐羽内春夫 越智敏夫 山口義昭 常廣武雄 石塚光治 大野利道 服部僕美 山下  
 義信 小峯宏 谷沢正一郎 遠西守男 今田正 中村広幸 錦会 土方昭治 小竹四郎 吉川由己 高野四郎 竜沢良雄 中田  
 勇 安田清 羽生光宏 鈴木治郎 山中孝元 姫野成示 辻貞夫 小松嘉恒 浪江泰進 山川保 高橋克雄 早川寿雄 大久保  
 英治 松原宣英 武田勉 寺本佳照 田所睦雄 辻茂 川名松之助 稲葉猛 土田博也 広瀬利一 大出貞男 青木和男 野瀬  
 健一 野房昌晴 岡崎勝 小林建雄 天野八郎 篠山平五郎 海野英幸 佐藤富哉 小川清 今井昇 飯吉正弘 馬場正司 土  
 田穠 野本隆 鈴木明 福田良一 我妻喜久夫 新井昭男 須藤茂 土橋俊作 相崎勝蔵 富井国夫 渡辺守史 鴨志田文幸  
 佐藤守弘 恩田徳明 荒井賢三郎 宇佐美喜八郎 遠藤武 増田稔 北風康夫 北隅昇 北川隆 鈴木洋二郎 間川清太郎 堀  
 川知秀 譲原充 29 Eクラス会 鈴木博 小野正昭 木本健三 若菜慶三 中込庫太 加藤利明 鈴木康雄 石川和雄 市川  
 利夫 田辺和文 田村修身 磯村常介 篠田昇 松本盛一 安西時男 柴山茂男 諸房岑 金杉京一 古賀勝雄 猪熊勝也 渡  
 辺文男 宮田利一 安室善市 井上祐一 大原敬玉 関崎晴夫 多田省三 若山欣一 関原弥千夫 半沢孝夫 田中淳一 初澤  
 佐次 久保田政秀 渡辺俊弘 真行寺市太郎 五野上卓 小長谷登 岡本竜雄 三井浩 小黒淳二 大庭論 宮島盛明 岡本猛  
 大竹泰明 横溝清 小宮秀昭 賀張雅弘 白石忠勝 青木功 大石博之 太田弘 渡辺健志 縄田徹 三上三郎 小久保兼保  
 内藤勇 宮崎陸生 釣谷叔弘 渡辺嘉憲 岩井重人 熊野武教 高柳清雄 大塚守彦 白川節太郎 中山元司 関口弘治 赤坂  
 征昭 長谷川洋介 小林勝一 富田清 玉島暉智 相沢常司 三井一人 齋野久 関義夫 鈴木寛光 谷部正一 斎藤勲 仲野  
 成憲 小笠原正 遠藤章雄 宮沢豊 中野善夫 松下祐輔 倉田隆吉 武藤正二 籠宮雄治 利根川厚 小泉謙治 日崎康雄  
 千喜良博 角田保 中野貞夫 野原勝二 熊木繁 小河信義 山田成義 温井一光 坂本正一 望月今朝市 大館昌男 中村利  
 男 宮川武三 萩原宏芳 番場栄 金子誠 鈴木正己 逢原弘一 須永義弘 二之宮洋一 中村邦彦 神谷秀明 前嶋万人 見  
 崎正行 長沢正名 名古屋勲 木下省三 中島光男 長谷川経夫 藤槻隆 別役義彦 金子陽一 田原耕一 鍛冶川勲 関口明  
 伯 五十嵐幸一 白川善隆 堀内進 土田浩司 平井毅一 江口満佳 菊地一弥(旧石倉) 斉藤広治 白土幸男 須田重男 堀  
 昭 印宮静一 小林卓之 和田弘 三次郷志郎 中島靖男 奥貫有二 今野正一 小山彰 高山弘基 矢島純夫 黒田忠治 古  
 田中武彦 福岡勇 田中実 星合正明 中西敏夫 37 E杉の子会 金森邦雄 高原和弘 菊川文雄 高久政雄 石崎泰司 高  
 橋健彦 網井掬典 西本智 山本佳宏 2 E Bクラス会 岩井勝年 柴田俊一 長谷川政則 伊藤三郎 加藤計夫 中山勇次  
 長島貞夫 小野俊明 栗原敏夫 大胡清司 志村和男 藪隆治 小林博 大塚忠克 井沢隆 神保良博 町田好孝 光枝護 川  
 崎善明 菅野幹夫 杉本和久 高柳稔 大滝缸夫 岡村五夫 田中英資 山本雅一 大島嘉夫 佐久間滋 佐藤勉 曾山真行  
 星野光男 井原嘉雄 今村孝治 本多建治 島崎孝司 木村政利 星野孝行 浅野稔 中島康氏 竹内一忠 海老原勲 常世田  
 健治 印宮登 菊田一夫 竹井光美 青木克己 岩崎博 小川敏也 柏崎一夫 斉藤彰 田中薫 辻喜寿 新沢誠 水小田靖  
 峯尾洋一 山家武 安藤正明 河崎元之助 鈴木賢二 中西浩司 原憲二 大野順一 老久保正藤 今田正之 吉田茂 柴田耕  
 一 小池澄夫 松本保 天海俊男 新井悦男 相川幹夫 青木実 池上省三 佐久間久信 竹平忠司 辻芳徳 高木友夫 中村  
 宏 武田則一 花島喜一 秋山行雄 中西光正(旧西谷) 坪井敬雄 菊地忠一 藤井慶一 桜井康雄 鈴木伊知郎 尾崎利治  
 大野和夫 大山定男 奥村力 川田幸男 上村正文 小林健一 野村章次 千石雅美 井山功一 高木茂 深井泰一 大野陽一  
 石沢昭 加賀勉 中村勉 浅井信行 花島秀年 佐々木誠二 井筒幸二 茨田進一郎 湊哲男 岸昭夫 小原将 真久光雄 山  
 中久幸 阿部博 藤倉良夫 新井徹 桜田雅士 渡辺勝一 萩原勉 佐波国式 山田佳樹 鈴木慎一郎 高貫謙一 服部清美  
 吉橋慶一 山田裕一 渡辺洋一 五関豊征 矢島利雄 有川寛 前島誠司 野村晃 新井幹雄 井山英治 吉森伸介 宇賀神元  
 荒巻勉 金子英司 松丸正己 大倉広 小池裕 阿部季芳 市村信之 神田伸一郎 藤井政一郎 柏崎義也 樺沢康弘 山越豊  
 渡辺寛 永島正人 佐藤友彦 樋口達彦 立川吉明 曾矢信夫 花村公明 清水清治 前田利彦 下田辰雄 島田昇 池田晴雄  
 平野健 渡辺達朗 秋山清隆 桜井貞佑 若林清史 炭本清 関根要 斉藤幸弘 清沢謙次 寺崎勝成 中村敏行 杉本正弘  
 清水正 川崎稔 木原義章 高島重行 折原武男 菊地義之 笠間文好 藤本育夫 佐野和伸 鈴木孝志 土屋成輝 北原充雄  
 野口正男 小暮進 成田邦通 石井孝 守屋邦晴 矢島敏正 中村利男 松本博 森田陽次 平井栄志 沖山洋 井関正男 五  
 十嵐孝行 細田一男 高野良治 片山盛雅 堂坂裕二郎 新井健二 大槻和雄 山田博信 安野正一郎 向芝京太 松井一郎  
 宮川幸一 川上寛 勝村直人 柳川育敬 平野修一 荒井昭 田中資治 須賀寛光 岩井秀樹 泉富夫 佐野敏之 佐藤仁 矢  
 島俊朗 西條明 日野明彦 高橋宏幸 斉藤哲也 芹沢和則 丸信之 小穴正純 西村肇 岡田昇 榎枝仁 高原正尚 佐藤正  
 敏 小沢省吾 藤倉幸宏 新藤幸男 石山仁 大谷徹 北村秀仁 山崎一也 秋本秀夫 小林一男 武藤正人 菅原康夫 結城  
 健 日坂有一 小林明裕 橋本雅彦 橋本淳一 若狭房信 赤川泰章 鈴木弘 星野一徳 浦和幸雄 大石雅由 牛込弘茂 松



原誠 川田太一 小林正昭 田中弘 土橋要 小沢健一 島村剛 相原文一 久保田幸彦 鈴木博之 岡本淳志 高橋幸生 相良洋介 高野達三 田部井淳 荒木靖風 長塚時雄 瀬尾幸男 岡本貢一 宮内康吉 藤沢宣 神宮和隆 森宏幸 有賀正己 野田博昭 工藤順一 川上俊司 松村隆 長田祐明 日暮貴志 内海久雄 長山智志 埜口勝弘 鈴木高志 大塩竹秋 大塚正昭 長谷川英雄 内藤靖夫 佐伯和幸 宗形博之 白石裕 伊藤隆 岩田晃夫 並木和明 新井賢一 山本勉 齊藤雅人 中島薫 鈴木邦昭 有竹秀介 杉山正和 手代木大助 古名家澄男 吉野治男 河内修次 土橋力 小山一郎 長谷川哲也 北沢健治 森本幸生 小野塚良夫 塩野悦史 佐藤恵人 野口俊幸 中條尚樹 矢部俊明 小林隆宏 白石誠 吉田達人 本江勝郎 加納祐三 川野浩一 新堀茂穂 井上忠政 酒井則男 涌井正典 横山隆司 白石正祐 渡辺勝美 伊丹里武 宗村明 河野吉伸 東條直記 小林富栄 山中勉 沢井義和 田中重則 渡辺典夫 荒井哲哉 河内功 堀田政孝 北見晃 西原豊 土屋真一 鈴木崇 藤本謙治 力丸竹男 齊藤健治 荒井洋樹 澤井輝 鷺谷敏夫 脇谷隆 中山茂男 篠原直之 岩瀬千鶴子 谷口恭子 志村陽一 秋元豊実 小田博夫 野口悦男 山沢繁 若月重道 川上典男 藤波義高 野口泰則 呼子信介 青山浩一 脇坂浩一 新藤正美 高木輝夫 飯島真人 中山初太郎 片山貢 岩瀬智治 谷口恭二 比企昌弘 小田博和 網田雄二 青木伸治 池田秀浩 柿沼浩 金子重雄 小池嘉徳 小山靖之 諏訪法和 建石宏之 矢萩敬志 吉田淳 渡辺裕之 井上和昭 市川和弘 遠藤信夫 川島浩文 中沢幹介 野村勉 長谷川浩 萩原明男 平賀良一 萬水敏雄 村田雅彦 横田昭夫 吉住久 吉田俊司 小原一夫 粕谷典彦 高城祥行 高森博文 千代浩之 山森信二 若林浩 渡辺達夫 遠藤悟志 大須賀康宏 神倉潤 坂本伸 佐藤光浩 澤田二郎 穴倉智幸 高田三郎 平野誠 丸山謙三 池尻貴興 小澤朗規 木村義彦 小池雅之 小島正義 塚原一彦 筒井善雅 半田功 平澤輝男 山下浩一 吉川悟郎 天沼淳 江原隆 榎本和弘 小澤智 木村幹雄 小島正浩 斎藤富雄 谷堂繁利 中条雅実 行方啓師 福島章二 三ツ井克之 宮本真人 八幡誠 佐藤猛 増田孝一 山田幹夫 吉田一也 井上誠 岩島昌貴 小山洋一 柴田茂 飛田志郎 長岡文彦 中島幸夫 市川潔 大隈一水 小川力 鯉淵浩 佐藤厚 篠崎英隆 棚沢哲郎 日野原克俊 小林武 堀江稚之 阿部トモ子 青山勝茂 飯塚千秋 岩崎芳男 岩鼻猛 大浦三次 太田光信 奥田三郎 奥山孝夫 金塚騰 小松由太郎 佐々木健次 嶋津喜充 平信三 滝沢永太郎 早崎芳明 廣橋弘 細谷三郎 森兼義 森田徹男 山崎孝治 吉田一輔 吉田六四郎 赤羽弘太郎 荒川黎一 石塚光治 石戸三男 伊藤隆 宇津木八郎 大深国男 金子明允 国井敏勝 倉田勤 近藤政吉 蘇原明郎 高田一男 高野敬介 田中勝造 塚田勝一 永井隆 長浜治夫 野村長三郎 野本光雄 長谷川正一 濱窪清雄 福島礼次郎 福田一夫 前田辰雄 松井文 宮坂忠利 宮路惣五郎 山内幸夫 天野義雄 浅野良久 伊藤聡 宇田川正忠 太田厚 川畑政幸 岸一男 黒田健嗣 小島忠幸 古手川弘 佐伯英郎 斎藤良邦 阪本正雄 斎藤晟一 佐藤光男 白石宏司 清水忠吉 杉澤武雄 杉田稔 高田まさ子 月館圭治郎 永瀬恵美子 中村次男 西野四郎 野村良人 長谷川安男 平沢正吉 古川順康 藤沢寿美 古川嘉一 保刈栄八郎 穂保栄二 前沢秀四郎 三浦修二 宮崎寛 宮下百亀 村山和次 吉田孝久 横手八郎 渡辺寛 吉田行雄 若生隆二 渡辺年美 浅海保夫 新井武士 有賀定彦 泉博 伊藤嘉亮 今尾昭一 遠藤吉男 片倉広益 川鍋和夫 木崎啓次 草薙一男 郡司和雄 斎藤源一 鈴木進 曾我部那博 鈴木富士男 鈴木昭 中西政春 鈴木美勝 平井順治 増田昭午 松田達雄 門間真次 山崎泰雄 山崎勝彦 渡辺茂 渡辺和夫 川橋勉 海老名宣夫 小野牧治 大久保盡 角田善一 笠嶋正秋 河村栄一 木村清治 岸光男 久保威 久保田実 黒田茂 小林豊治 齋藤輝明 鈴木秀雄 田口清一 田沢信雄 高根康清 高橋徹哉 高橋平 竹田昭一郎 出浦洋弘 鳥井三四郎 長岡圭三郎 中里静雄 中西一郎 中村尚 西岡貞夫 野口亀十 橋本正一 早坂久勝 不二門章博 福島三郎 福山文雄 藤井直文 星野寛治 前田兵三 見村政男 山田良明 秋元衛 安部登 青野寿 渥美弘一 伊藤裕治 大和田徳二 小野内求 大和厚 勝倉貞夫 金田語平 河合良一 桜井重三 隅倉正義 鈴木定平 鈴木哲朗 清野達也 高根光次 高橋光四郎 立川喜雄 立田安男 友田正二 長塚時雄 並木茂 中嶋敏夫 野崎広江 林功 広瀬弘 宮崎建吾 山田日出夫 山田雅盛 石井敏弘 石田とも子 石田由史 出原義明 井上清一 今井政夫 大木正大 大熊雄之助 太田卓 菊地章浩 黒須誠 小林秀雄 神戸佳明 佐々木三郎 島村幸雄 杉浦義夫 鈴木多門 鈴木直次 鷺見篤 関島栄見子 高根澤平 寶隆 辻行雄 園谷正功 富岡市太郎 富塚治司 成瀬正司 富山護 広野国雄 堀展彰 本多司朗 山田昭典 若山留八 赤羽耕二 秋元俊治 新井茂 池田隆介 太田精三郎 大野一男 折笠静登 柏崎幾久江 木瀬太郎 黒丸正明 桑原弘通 小林靖夫 小林秀雄 佐藤正志 三高一己 渋谷喜作 高橋一夫 滝沢清晴 田口条次 竹腰謙三 田中兼次郎 田邊兵衛 田邊馨 西川喜正 滝野竜治 平野茂男 風澤丈男 藤本秀行 松村久子 山田孝志 李家隆一 渡辺利夫 徳田国見 青木勇 飯田次夫 池田俊雄 遠藤博行 大森貞夫 大輪良平 小野寺哲郎 金子勇 木村勉 木村本 小松田幸寿 小森一夫 齊藤幸雄 坂幸雄 坂本貞雄 佐久間秋雄 七戸一正 島崎惣太郎 杉山温弘 鈴木泰 関武 高橋勇八 田口忠 鶴岡実 長沢明宏 西田裕尚 林真守 藤田公一本間淳彦 前田享子 御手洗光夫 宮下政毅 森田尚宏 八尋駿吉 矢崎咄次 山田智 平野敏夫 青木晃 秋葉豊 五十嵐将郎 伊澤重夫 大野實 大道裕二 岡田武 柏谷純 加瀬八州夫 小林秀夫 小林正一 小松秀岳 佐川啓裕 進藤喜四郎 田嶋十九夫 谷黒正解 富田一郎 中村三郎 中谷俊幸 七井藤男 野村興三 長谷川徹也 日高操雄 日比国雄 広沢康吉 藤本智 本間康雄 松沢邦介 松本勇 森礼於 吉田実 吉田武男 由本勝友 配野芳和 山本隆三 横山悦三 相川恒雄 安彦忠雄 井上稔 池田達明 岩崎栄蔵 宇田川清蔵 榎本秀五郎 小川義雄 忍田悦治 影山松雄 河又英司 小嶋正雄 小室幹雄 佐藤敬一郎 鈴木松雄 鈴木一男 鈴木敏夫 長原志郎 長洞和男 根本三男 福田庄司 藤田春雄 藤原実 堀内サツ 渡辺貞夫 渡辺登 石山立 内田輝雄 大久保悦男 岡崎重樹 勝又貞良 加藤永二 児玉義孝 小林源治 五野上卓 定留安秀 佐藤三男 篠原輝行 鈴木康仁 鈴木啓子 澄川淳 田口重雄 田村朝雄 浜田好治 福井富子 福嶋正義 増野俊雄 水村岩造 宮越憲二 望月未吉 盛田繁雄 谷部吉男 山口光雄 山本文子 吉田誠蔵 若狭喜一 渡辺済 宇井泰 梅津保一 榎本惣次 大久保智恵子 岡部健 岡里常夫 藤山義三郎 梶島清司郎 楠田芳子 齊藤邦広 坂本文枝 佐藤睦男 佐藤幸子 柴田昌志 嶋村和枝 島村春夫 鈴木暁司 高木実 竹田吾吾 田辺建次郎 鳴嶋章好 福田彰 伏見国幸 星崎政春 本田和男 松岡洋二 松本幸太郎 簀弘祐 武藤和夫 吉見忠義 依田昌明 伊能隆康 大島章吉 川口三郎 黒岩康二 桜井巳津男

佐藤幸一 佐藤清 新谷理平 杉山信吾 諏訪六郎 田中稔 竹中定男 鶴田七五三一 土浜明 中村世治 中谷信子 畠山康  
司 林勝弘 平丸恒夫 星野良平 宮部豊弘 程島繁男 松沢登 松丸良平 村上卓三 山本守 吉田弘 木村薫 穴口正二  
石川昭八 市村陽弘 上田謙太郎 鶴飼定男 大島二三一 大野久男 岡澤詮 川田誠一 小林晴夫 小宮和良 齊藤清徳 佐  
藤孝二 塩出俊彦 島田繁雄 清水喜好 白鷹好章 高橋信夫 田中定住 内藤宏 中村守之 中山敏二郎 仁田三夫 沼沢清  
長谷川三男 原田和明 比留間輝男 前田孝 増田昇 南泰平 山口哲朝 山口造 横山富雄 横山一郎 渡辺兵吾 青木彰一  
郎 飯塚睦也 飯塚利一 伊藤昭臣 海老名新弘 小倉幸夫 大沢忠一 梶山謙二 片野越郎 川島富雄 齊藤増次 佐藤清  
柴山清 島田喜一 武部弘平 寺尾金造 徳永勇 中村精一 仁科清市 蛭川晃 早水俊夫 平岩菊江 堀越友一 松丸信男  
宮園景信 森弘 森下福吉 柳内勝博 渡辺悦巨 秋山弘道 阿部禎夫 新井和 池田圭 石井敏男 石川侃二 伊藤忠雄 井  
上港 岩瀬登 岩野俊彦 江沢秀幸 大野一郎 片島忠彦 木村勝男 久野武 小林貞夫 坂本忠久 佐藤良夫 白井昭 鈴木  
久雄 関塚時太郎 田中茂二 田中茂穂 玉田基雄 逢見高吉 星垣雄 増田義明 山本政利 山本三郎 朝田昌吉 穴田勇心  
安藤義次郎 井下潔 宇田川巖 梅原憲二 尾上健二 恩田兵衛 加藤利明 北村信右 木村とみ 小森正雄 関田孝也 玉木  
秀男 寺尾尚次 中井新吉 新出雄雄 日根和夫 細井和男 本多晴一 正親武 松原雅美 三角三三 南温也 森嶋博夫 山  
寄昭二 山崎修二 山下勝及 吉川卓生 吉水清彦 米山俊彦 渡辺富美男 相川譲 石井弥三郎 石崎章 磯部和男 薄田忠  
夫 遠藤巖 大村貞雄 海道清 片岡智 小宮睦夫 向後茂 斎藤政一 小林育雄 齋藤毅 田辺英雄 土屋常夫 永井守 野  
口欣司 原島六合男 細矢保 宮崎博一 柳田和己 若色正三 井口一男 池田礼次 猪飼松夫 宇田川清 内山重信 遠藤仁  
市郎 小笠原由夫 荻原熙 加藤徹二 佐々木孝三郎 坂巻松三郎 志村幸雄 鈴木芳郎 関口昇 田中正成 田原重信 武内  
岩雄 知久一雄 道伝弓弦 中村佳子 長谷川卓治 藤波謙之 星野和央 本郷清 増淵敏 村上公一 山上高司 吉田巖 吉  
永安治 渡辺昇 渡邊浅吉 中村孝昭 青木久 池原枢 小沢和子 甲斐直彦 川崎澄夫 栗林清治 近藤精宏 榊原喜一 島  
村全真 菅田倉次 鈴木保 高田澄雄 高橋洋行 田中甲三 館野政次 寺井三喜男 富田寿 中島直江 中村正三郎 永峯一  
服部僕美 多々良秋雄 原田重俊 深田保 杉本喜通 丸山富栄 矢口隆一郎 矢沢栄一 安田喜明 柳昭三 瓜本茂三郎 大  
澄昌宏 大塚三郎 加藤典次 亀井邦夫 川上重蔵 齊藤房吉 鈴木正高 高橋了治 遠山敏夫 遠山俊次 濱島一郎 林隆司  
深沢芳満 星野重信 細川徹 細田晴夫 堀多慶彦 峯崎長吉 稗田三郎 阿部弘立 植松正 大淵実 柏原清治 加園忠治  
金田通孝 川田政雄 北嶋泰三 小山等 佐藤昭治 庄野哲雄 杉本正二 杉村太吉 高野実 富澤五一 中川清 中野忠治  
中村登太郎 永島信鶴 永瀬稔 野口慶信 野尻利男 肥田道雄 藤田稔 本間保夫 村上惇孜 村田政夫 矢島明 山館邦雄  
山田嗣 厚川昇 石川勲 石田和夫 石野美代子 板垣敬雄 井上正弘 岩嶋良知 上原達朔 江幡和夫 大桑宏之 大槻昌秀  
岡田実 小川千枝 神田一雄 黒川徹也 斎藤昭吉 高橋弘 田部井朗 津田嘉男 野村友保 人見詩 福田定男 舟津豊松  
古澤駒次 帆刈弘 村山和弘 山崎義明 渡辺利夫 茂木一宣 石山昭雄 遠藤紀平 大山由蔵 影山昭夫 小林政美 佐藤七  
郎 須藤昌彦 須山良三 関根文江 中倉文夫 信澤サダ 原田実 比留間忠 藤代担 村尾保雄 矢下春男 鈴木喜三郎 飯  
田恵己 石戸孝男 岡田忠男 岡崎道夫 大島正治 冲津明 加藤立男 倉田征壽 笹木教三 下口清一 志賀馨 末次勇一  
染宮昌司 高原尚義 竹内保 中田恒夫 中山秀子 西谷恒雄 沼尻一誠 野原登 畠山督司 人見勝二 藤野信二 保栖芳徳  
松崎誠 三宅一昭 三日尻信 本橋嘉信 山野秀範 相吉久 安部幸子 遠藤太重 大島行雄 笠井慶三 加藤隆弘 北浦満治  
小勝保之助 古知秀男 笹哲夫 佐藤照彦 莊利夫 須藤豊国 関根要三 関口茂光 関根一磨 大間洋 高野登 高橋利男  
武田林司 中谷安雄 花房秀知 東島康吉 樋口富喜子 山本靖二 渡辺恵津子 山本健二 新井恒夫 有村豊視 石井正雄  
井部登 岩崎昌一 及川正基 大久保光夫 大塚茂吉 岡本嘉夫 小沢司 風祭和夫 貴田英一郎 小平景一 小林昭 齊藤正  
志 庄司元久 新海和夫 関口健治 高橋秀雄 都築豊四郎 新谷和夫 浜野幸四郎 藤本源一 細川義四郎 松尾勝央 松本  
喜久江 丸山伸一 山崎健三 山田喜久男 小山田勝則 中村晃雄 赤羽志郎 阿部誠 有賀義雄 梅澤茂雄 小田原秀雄 加  
畑実 北隅昇 木本照夫 加藤要蔵 笹尾吉明 佐藤達也 嶋操 鈴木敏夫 瀬賀幸福 寺島忠明 豊国隆 中村亮子 沼田実  
野口重蔵 橋本幸雄 日向野晃 藤井晴 藤沢幸雄 松木進 山崎満 柳田一雄 吉川昌利 米山源次 稲垣政和 植竹弘宗  
生方年次 窪田ヨウ子 渋谷一男 新道雄治郎 関口祐一 福田正弘 堀江徳 湊祐三 渡辺健一 秋田政男 浅香稔 中田将  
彦 中村益始 新里主 岩本秀一 鶴沢由雄 小松原直義 佐藤虎男 滝口栄蔵 野口昭治郎 堀江泰氏 井川正 伊藤伊豆男  
深山三郎 相野谷政重 伊藤栄三 青山弘 オガワヨシオ 浜田伊次郎 サカモトタダヒサ 塩野幸一 ヤジマアキラ 大口容  
一 ヒラノシゲオ 十川英二郎 オオクマユウノスケ 成島敏昭 東京電機大学高等学校同窓会 加藤邦彦 山崎与作 石井一  
3 L 和田 小泉稔 校内売店柴田 新納卓見 池田市寿 永井佐吉 高橋源八 金室金男 宮崎登 稲垣久夫 齊藤広吉 栗原  
次郎吉 山田宏明 本田喜徳 白川守昭 金子政雄 杉野良知 石川勝治 津村栄一 石田甚一郎 菊地諒 原正幸 神庭明  
上條健 伊藤克己 手塚喜久 松岡三夫 遠山富雄 原口喜八 鈴木敬三 平野起業 平出勝誠 浅川マサ子 茂木良雄 川上  
智子 真城宣之 川野一郎 白出秀俊 今野一幸 伊藤憲夫 落合和男 山内智雄 安田俊雄 伊藤梯吉 横田貞夫 岡野保夫

# 収 支 報 告 書

昭和 55 年 6 月 30 日

東京電機大学高等学校創立40周年記念事業寄付金収支につき下記の通り報告いたします。

東京電機大学高等学校  
創立40周年記念委員会

委員長 松 下 祐 輔

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
寄 付 金 <small>(名刺広告料16件含む)</small>	1 1, 2 6 4, 0 7 0 —	1. グランド整備及び 校庭美化 <small>(第1回 学校法人 東京電機大学へ寄贈)</small>	① 5, 0 0 0, 0 0 0 —
預 金 利 子	1 8, 6 1 2 —	<small>(第2回 学校法人 東京電機大学へ寄贈)</small>	② 1, 7 3 1, 1 2 2 —
		2. 募 金 経 費	1, 0 0 5, 1 3 0 —
		3. 記 念 誌 発 行 <small>(発行部数 5,400 部)</small>	3, 4 4 6, 4 3 0 —
		(内 訳) { <ul style="list-style-type: none"> <li>① 54年9月までの諸経費 2 1 2, 3 6 0 —</li> <li>② 54年10月以後の諸経費 2 8 8, 9 7 0 — <small>(編集会議費その他)</small></li> <li>③ 印 刷 費 2, 3 5 8, 0 0 0 —</li> <li>④ 発 送 費 (2,850 部) 5 8 7, 1 0 0 —</li> </ul>	
		4. 記 念 標 柱	1 0 0, 0 0 0 —
合 計	1 1, 2 8 2, 6 8 2 —	合 計	1 1, 2 8 2, 6 8 2 —